政府ノ負債

第十四、第十五

注意　前述ノ負債償還ニ必要ナル、行政費ノ爲メニ若干ノ割合ヲ此ノ額ニ加フルヲ善シトス

予ハ今貴下ノ第二問（丙丁）ニ答フルニ臨ミ、國會ノ代議院ハ一定ノ反對若クハ政府ヲ窘ムルノ目的ヲ以テ（予ハ實際此ノ如キコトナカランコトヲ望ムナリ）是レ等費用ノ一二ヲ決議スルヲ拒ミ、又ハ單ニ內閣ニ反對ノ意ヲ表センガ爲メニ僅ニ數圓ヲ減却セントシタルコトアリトノ假定セン。

之ヲ救正スルノ道如何。

今此ノ場合ニハ取消スベキモノナシ。何トナレバ未ダ一ノ行爲アラザレバナリ。只不法行爲即チ拒否アルナリ。不行爲ハ之レヲ取消スベカラズ。只其ノ空乏ヲ補充スベキノミ。又之ヲ救匡スルノ道ハ甚ダ簡ナリ。

皇帝ハ行法權ノ長タルノ資格ヲ以テ元老院ノ議論ヲ聽キ、內閣會議ニ於テ法律ヲ布告シ且ツ法律ヲ（此ノ場合ニ於テハ憲法）實施スルノ權ヲ任セラレタルヲ以テ、國會ガ拒否シ又ハ節減シタル憲法上ノ性質ヲ有スル費目、卽チ國家ノ負債ニシテ請求シ得ベキモノハ之レヲ豫算書ニ揭載スルコトヲ命ズベシ。

一千八百八十八年四月十日於　東京

同　　同十六日

ヂー・ボアソナード

林田龜太郎譯

日本憲法ノ財政篇ニ關スル歐米學士ノ意見

英國「オクスフオルド」大學校憲法學教授「ダイセー」氏ノ意見

日本憲法中財政ノ篇ヲ熟讀シ、其獨逸流ヲ採用シテ英國議院ノ財政監督權ヲ採用セザルヲ見テ、大ニ日本憲法ノ鞏固善良ナルニ敬服セリ。若シ余ヲシテ今日新タニ憲法ヲ起草セシムルモ、此日本政府ノ前轍ヲ踏ムノ外之レナキナリ。英國ノ下院ガ財政ノ全權ヲ掌握セシハ歷史上ノ變遷ヨリ起ルモノナレドモ、其沿革ハ暫ラク之ヲ省キ、單ニ今日ノ現況ニ付キ之ヲ論ゼントス。英國下院ガ財政案ノ決議ヲ其全權內ニ有スルガ爲ニ、下院ニ於テ財政案ヲ否決スル時ニハ陸海軍費及行政ノ諸費ハ悉ク其ノ日ヨリ無効トナリ、大藏大臣ハ一錢ダモ支出スルコトヲ得ザルニ至リ、遂ニ內閣ノ交迭ハ下院多數ノ掌握ノ中ニアリトス。然ルニ日本憲法ハ此ノ弊害ヲ看破シ、英國ノ例ニ倣ハズ、專ラ獨逸ノ憲法學ノ主義ニ基キ、又獨逸皇帝ガ法律ニ依ラズ財務行政上ニ依テ數多ノ財政處分ヲ爲スコトヲ得ルノ慣例ニ倣ヒ、財政案議決ノ權限ヲ議院ヨリ減殺セシハ日本ノ將來ニ大ナル影響ヲ及スノミナラズ、又憲法學ノ原理ヲ確定スルニ至ラン。憲法第六十七條ヲ以テ財政案議決ノ權限ヲ檢束シタルガ爲ニ、日本政府ハ永久經費ト每年經費トノ區別ヲ創設シ、議院ヲシテ每年經費ヲ左右セシムルモ、永久經費ヲ削除輕減スルコトヲ得ザラシメ、假令ヒ議院ニ於テ每年經費ヲ否決スルモ、永久經費ヲ以テ國家必要ノ政務ヲ處理繼續スルコトヲ得セシメタルハ、余ノ尤モ感服スル所ナリ。故ニ日本政府ハ英國政府ノ如ク財政案議決ニ付キ、國會ノ鼻息ヲ伺ヒ、其ノ否決ヲ因テ內閣ノ更迭ヲ來スノ患ヲ免レタルハ、英國憲法ヨリ一層優リタルモノト謂ノベシ。

英國「ケンブリツチ」大學校政治學教授「セヂウイツグ」氏ノ意見

余ハ日本憲法ノ全體ニ付キ之ヲ評論センニ、財政案ニ關スル議會ノ重大ナル權限ヲ制限シタルヲ贊成スル者トス。其制限シタル箇條ハ專ラ憲法第六十三條第六十七條及第七十一條ニ在リトス。其制限シタル精神ヲ推測スルニ、目下歐洲ニ於テ立憲君主政治ノ傾向ハ漸次英國ニ行ハ

ル議院政治ニ陷ルノ衰運ヲ防ガントスルニ在リ。故ニ此精神ヲ實地ニ決行セント欲スレバ、英國ノ議院ガ所有スル歳出歳入ヲ拒否スル所ノ權限ヲ束縛セザルヲ得ズ。然レドモ此事件タルヤ尤モ困難ナルモノニシテ、已ニ憲法政治ヲ行フ曉ニハ、勢ヒ財政監督ノ權限ヲ議院ニ附與セザルコトヲ得ザルナリ。余ノ考フル所ニ依レバ此ノ篇ニ於テ此ノ困難ナル問題ヲ決斷セシ方法ヨリ外、他ニ良法アルコトヲ發見スルコト能ハザルナリ。

此篇モ亦其他ノ篇ト同ジク日本政府ガ泰西諸國ノ經驗ヲ弄味看破シ、而シテ十分ナル思考ヲ費シタル結果ト云ハザルヲ得ズ。是レ歐羅巴ノ讀者ガ贊嘆賞美シテ已マザル所ナリ。然ルニ之ヲ稱贊スルト同時ニ此ノ事件ニ付キ試ニ一ノ反對說ノ起ランコトヲ陳述セザルヲ得ズ。是レ他ナシ。憲法第六十三條第六十七條第七十一條ハ、政府ヲシテ普通行政ノ費用及陸海軍費ヲ直實必要ナル金額ヨリモ非常ノ高額ニマデ增進セシメ、而シテ一旦之ヲ確定シタル上ハ悉皆租稅ヨリ之ヲ支出シ、後日國會ト、爭論ヲ生ジタル時、政府ハ其權力ヲ自由廣大ナラシメントスルノ餘裕ヲ設ケタルガ如シ。今此理由ヲ明瞭ニスル爲ニ余ハ此ニ一例ヲ擧ゲントス。若シ政府ニ於テ軍制ヲ改革シテ陸軍ノ兵力ヲ增加セント欲スレバ、其費額ヲ增加セザルヲ得ズ。憲法第十二條ニ據レバ、陸軍ノ軍制改革ハ天皇ノ大權ニシテ國會ノ容喙スル所ニアラズト雖モ、其新設ノ費額ニ付テハ議會ノ承諾ヲ要スルモノトス。故ニ若シ議院ニ於テ此承諾ヲ拒ム時ニハ政府ハ其新軍制ヲ施行スルコト能ハザルニ至ラン。因テ其ノ運動ヲ自由ナラシムル爲ニ、又將來ノ困難ヲ避クル爲ニ、今日ヨリ豫メ一般ノ軍備ニ付キ平常必要ノ金額ヨリモ高額ヲ見積ルノ傾向ヲ生ゼントス。

英國前外務次官、下院議員兼「オクスフヲルド」法律學教授「ブライス」氏ノ意見

余モ亦教授「セヂウイツグ」氏ノ意見ト同論ニシテ、憲法第六十三條第六十七條及第七十一條ハ財政案ニ付キ行政官ニ非常ノ權力ヲ與ヘタルモノニシテ、其例ハ英國現時ノ成規ニ異ナリタリト云ハントス。然レドモ是等ハ日本新設ノ憲法ヲ實施スルニハ尤モ必要ニシテ且賢明ナル方法ト謂ハザルベカラズ。但シ此結果ハ政府ヲシテ平時ニ於テ軍費ヲ必要ノ點ヨリモ高額ニ昇スルノ傾向ヲ奬勵セシムルノ弊アリ。

米國「ハーバード」大學憲法學教授「サヤー」氏ノ意見

日本憲法第六十七條天皇ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出ヲ詳解スルニ當リテハ、憲法第十條及第

十二條ヲ熟讀セザルヲ得ズ。憲法第十條ニ據レバ「天皇ノ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ」トアリ、又第十二條ニ據レバ「陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム」トアリ。今之ヲ解釋スルニ當リ余ハ其解釋法ヲ二種ニ分タント欲ス。

第一　米國憲法學者トシテ其慣熟シタル憲法論ニ據リ之ヲ解釋スレバ、行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メトアルハ行政各部ノ組織ヲ制定シ、是ニ必要ナル官吏ノ人員及其俸給ヲ定ムルモノニシテ、既定ノ歳出トハ卽チ其決定シタル官吏ノ俸給額ノミニ止ルモノト謂ハザルヲ得ズ。是レ憲法ノ明文簡略ニ過ギタル故ニ、狹義ニ依テ解釋シタルモノナリ。然ラバ則チ廳費及其他ノ費用ハ無論此既定ノ歳出中ニハ包含セザルモノトス。

第二　日本憲法ハ天皇ノ恩賜ニシテ、歐米各國ノ如ク人民ヨリ帝王ニ强迫シテ制定セシメタルモノニアラザルモノナレバ、第六十七條ノ既定ノ歳出ノ文字ヲ註解スルニ當リ、天皇制定ノ精神ニ遡テ其ノ意義ヲ解釋スルニアラザレバ正當ナル解釋ヲ下スコト能ハザルナリ。故ニ余ハ日本憲法ノ精神ト認ムベキモノヲ發見スルノ必要ヲ感ジタリ。

抑々天皇ノ憲法ヲ制定シテ新政體ヲ創設セラルルニ當リ、明治二十三年ヲ境界トシ、古來天皇ノ統轄セラレタル政權ヲ剝脫シ、悉ク之ヲ議會ニ專任スルノ精神ナルヤ否ヤヲ確定セザルヲ得ズ。余ノ推測スル所ニ依レバ決シテ然ラズト答ヘント欲ス。天皇ノ精神ハ縱令憲法ヲ規定スルト雖モ、內外ノ政務ノ要點ニ付テハ政府ハ舊來ノ如ク又百年一日ノ如ク繼續シテ專ラ國家ノ存續ヲ謀ルヲ以テ第一ノ目的トセラレタルコト憲法ノ全部ニ付テ明瞭ナリ。但國會開設後ハ人民ヲシテ憲法ノ正條ニ依リ、國家ノ政務ニ參與セシムルノ權利ヲ與ヘラレタルニ止ルガ如シ。然ラバ則天皇ノ精神ハ第六十七條ニ於テ、政府ヲシテ單ニ必要ノ官吏ノ俸給ヲ支拂フノミヲ以テ足レリトセンヤ。決シテ然ラザルナリ。政府ニ必要ナル官吏ノ俸給ヲ與フルノ外、其官吏ヲシテ政務ヲ處理執行スル爲ニ廳費及其他必要ナル費用ヲモ併セテ給與シ、以テ國家ノ存續ヲ圖ラレタルヤ疑ヲ容レザルナリ。故ニ此條ヲ註解スルニ當テハ狹義ニ依ルコトヲ得ズ。專ラ天皇ノ憲法ヲ制定セラレタル當時ノ精神ニ基カザルヲ得ズ、其ノ精神ハ國家ノ大體ヲ破壞セズ。外國交際上又ハ內地ノ行政上ニ付キ國家ノ存續ヲ圖ラレクルヤ疑ナキモノトス。此ノ憲法ヲ實施スルニ付テハ、議員タルモノハ聖意ヲ奉戴シ、保守ノ精神ヲ確守シ、務メテ急躁過激ノ言論ヲ制止スルニアラザレバ其成効ヲ見ルコト能ハザラン。又此憲法ヲ實施スルニ當テハ維新ノ大業ヲ輔翼セシ亢勳ノ人物ヲ內閣ニ集合シ、內閣ヲシテ輿望ノ歸スル所トナラシメ、以テ同心協力シテ國政ヲ統轄スルヲ肝要トス。是レ米國獨立ノ後ニ於テ憲法ヲ實施セシ時ノ實例ニシテ、日本ノ今日ニ適用セラレンコトヲ希望ス。彼米國憲法制定ノ初年ニ於テハ、華盛頓ヲ以テ政權ヲ統御セシメ、其內閣ニハ獨立ノ功臣「ジエファーソン」、「アダムス」、「ハミルトン」等ノ諸氏

ヲ集合シ、當時米國政治界ノ第一流ノ人物ニ依リ、又保守漸進ノ政略ニ基キ急躁過激ノ論者ヲ防禦シ、憲法實施ノ方針ヲ定メタレバコソ、十三州中二三ノ不同意ヲ唱ヘシ州モ亦漸次憲法ニ調印シテ今日ノ盛運ヲ致シタリ。故ニ余ハ日本政府モ亦急躁過激ノ論者ニ當ルニハ保守漸進ノ精神ヲ以テシ、專ラ國體ヲ維持シ國家ノ存續ヲ謀リ、此完全ナル憲法ヲシテ實施ノ上ニ於テモ完全ナル結果ヲ見ンコトヲ希望ス。

英國財政案ノ實況

英國ノ豫算ヲ分ツテ二種トシ、一ヲ永久經費トシ一ヲ毎年經費トス。永久經費トハ法律ヲ以テ定メラレタルモノニシテ、其性質ヲ尋ヌレバ永久ノ費目ニシテ、既定ノ年限間又ハ其之ヲ設ケタル法律ノ廢止セラルル迄變更スルヲ得ザルモノトス。故ニ此費目ハ議會ニ於テ毎年議決スル科目ニアラザルナリ。此費目中ニ包含スル重ナルモノヲ擧グレバ、國債ノ元利、帝室費、皇族ノ歲費年金恩給、裁判官及或ル高等官ノ俸給等トス。此等ハ毎年議院ノ決議ニ依ラズ、永久不動ノモノトナスヲ至當ト認メタレバナリ。此永久費目ノ詳細ナル計算及實況ハ、大藏大臣ヨリ毎年議院ニ報告ス。此報告ヲ稱シテ財政報告（フワイナンス、アツカウント）ト云ヒ毎年議院ノ決議ヲ要セザルモノニシテ、毎年經費ノ如ク款、項、節、目、ヲ細別スルニ及バザルモノナリ。

此永久經費ノ報告ハ大藏大臣之ヲ調製シ、會計檢査院長ノ添書ヲ付シ、毎年議院ニ提出スルモノトス。其金額ハ千八百八十三年ノ報告ニ依レバ三千百萬磅ニシテ、歲出總額ノ八分ノ三トス。然レドモ此割合ハ年ヲ追フテ增加スルノ傾向アリ。

此報告ノ科目ニ對シ、議院ニ於テ非難スル議員アレバ大藏大臣ハ之ニ對フルニ大藏大臣ハ既定ノ法律ニ依テ其科目ヲ支出シタルモノニシテ、法律ノ範圍內ニ於テ有スル職權ナリ。故ニ此科目ニ對シ非難スルコトアレバ先ヅ其淵源タル法律ノ改正ヲ發議スベシ。故ニ其法律ノ改正ナキ以上ハ、大藏大臣ハ職權ヲ以テ其費目ヲ支出シ、而シテ議員ハ此支出ニ對シ異議ヲ唱フルコト能ハザルナリ。由是觀之、此永久經費ト既定ノ法律トノ關係ハ影ト形トノ關係ニ於ケルガ如シ、形ヲ改正セザル以上ハ其影ヲ滅スルコト能ハザルナリ。故ニ議院ハ永久經費ノ報告ヲ調査スルニ當リ、其影ニ就テ議論スルコトヲ得ルモ、其形ヲ改正セザル以上ハ其金額ヲ否決スルコト能ハザルナリ。

毎年經費トハ政府ヨリ毎年議院ニ提出シテ其承諾ヲ承クル所ノ政費ノ科目ナリ。此豫算ヲ分ツテ三冊トシ、第一陸軍費、第二海軍費、第三行政及租稅費トス。陸軍費ハ陸軍省、海軍費ハ

海軍省ニ於テ調製シ、而シテ大藏省ニ於テ之ヲ認可シタル後大藏大臣之ヲ下院ニ提出ス。行政及租稅費ハ全ク大藏省ニ於テ調製シテ大藏大臣下院ニ提出スルモノトス。此三冊ノ總金額ハ千八百八十三年ノ豫算ニ依レバ五千萬磅ニシテ、政府歲出ノ總額八分ノ五トス。

由是觀之、英國ノ財政案ハ永久經費ト稱スル一冊ノ報告及每年經費ト稱スル三冊ノ豫算案ノ四冊トス。故ニ各省ノ經費中其費目ノ永久ニ屬スルモノト每年ニ係ルモノトニ依テ二種ノ書類ニ分割シテ揭載セラルヽノ嫌ヒアリト雖モ、永久ト每年トノ區別ヲ明瞭スルニ至テハ尤モ其當ヲ得タルガ如シ。

墺國法學博士スタイン氏ト談話要領

明治廿二年十一月廿七日

一　憲法ハ已ニ發布セラレ其周緻精確ナルコトハ歐洲憲法ノ右ニ出ヅルコト數等ナリ。但歷史ヲ缺クガ故ニ、歐洲人ハ少シク奇異ノ思ヲ生ス。此ノ如キ憲法ヲ制定スルニハ必ラズ歷史ノ存在スルナラン。若シ之ト密接ノ歷史ナケレバ單ニ土耳其ノ憲法ト異ナルコトナシ。故ニ日本政府ハ憲法ノ沿革史ヲ編纂シテ之ヲ世上ニ示スコト自今ノ急務ナリ。

一　歷史ハ一國ノ進步ノ程度ヲ示シ、國家萬般ノ事實ヲ記載ス。故ニ愛國心ヲ殖養スルハ其國體ノ何タルヲ知ラズシテ之ヲ他ヨリ發生スルモノナランヤ。現ニ憲法ヲ制定シタル國ニ於テ（英國獨國）ハ確實ナル歷史ヲ基本トシテ王室ノ尊嚴ヲ保ツ。歷史ヲ一讀スレバ其國ノ成立、人類ノ始祖等ヲ知リ、尤モ有益不可缺ノ學科ナリ。然ルニ日本ハ未ダ其編纂ナシト。若シ

日本ノ歴史ヲ除テハ王室ノ卓立獨行ハ覺束ナシ。又獨逸ノ目今ノ政務ニ付テモ已ニ皇帝ハ本年ノ檢閲ニ於テ孛國ノ歴史ヲ普ク中學以上ニテ教ユベシト宣告ス。

一　上院ノ勅選議員ニハ高僧神官ヲ選任スルコト尤モ必要ナリ。然レドモ高僧神官トシテ選任スルニアラズ。全ク功勞又ハ學識ノ點ヲ以テ選任セラレタル如クニシ、其人々ノ價値ニ依ルモノトスベシ。又下院ニハ僧侶軍人ヲ禁ズルト雖ドモ、上院ニハ之ヲ禁ゼザレバ此使法ヲ行フモ毫モ差支ナキガ如シ。

一　報告員ハ演臺ニテ演說シ、其他ハ自席ヨリ演說スルコトニ極ムルコト便宜ナラン。

一　議會ニ提出スル議案ハ可成簡單ニシテ行政ノ實際トヲ包含シタル性質ノ者ヲ主トシ、勉メテ理論ニ走ルノ傾向アル者ヲ除ク方帝國初會又ハ爾後兩三回ニハ必要ナラン。

米國國務大臣「ブレイン」氏トノ談話要領

明治二十二年八月廿三日米國「バーハーバー」ニ於テ

余ハ日本政府ヨリ日本帝國憲法ヲ受領セシモ、公務ノ繁忙ノ爲ニ一讀スルノ榮ヲ得ズ。然レドモ聞ク所ニ依レバ貴下ハ日本憲法起草ノ業ニ參與セシ人ナリト。故ニ余ガ四十年間米國ノ政治ノ實際ニ付キ米國ノ憲法實施上ヨリ得タル經驗ニ依リ憲法ノ事ヲ談ジ、且ツ余ニシテ若シ今日憲法起草ノ大業ニ當ラシメバ先ヅ左ノ四箇ノ大問題ニ付キ主義ヲ確定セント欲ス。貴國ノ政府ハ此事ニ付テハ如何ナル主義ヲ採用セラレシカ。貴下ノ答辯ヲ請ハントス。

第一　憲法ハ一國政治ノ基本ナルガ故ニ、勉メテ一般政治ニ必要ナル原則ヲ提列シ、其細目ニ至テハ悉ク之ヲ省略シテ普通ノ法律ニ讓ルベキモノトス。此點ニ付テハ英國ヲ始メ歐洲各國皆ナ過テリ。何トナレバ彼諸國ノ憲法ヲ制定シタルハ全ク國家革命ノ機運ニ際會シ、人

「ブレイン　氏トノ談話要領

民ノ强迫ニ依レバナリ。故ニ細目ト原則トヲ識別セズ、之ヲ憲法ニ掲別シタリ。而シテ米國ノ如キハ獨立ノ後深思熟考シテ起草シタルモノナレバ、英國及歐洲ノ憲法ヨリハ此ノ點ニ於テ優レリ。然レドモ此米國ノ憲法スラ尙且細目ニ渉リタリ。故ニ今日憲法ヲ制定スルトキニハ勉メテ原則ヲ而已憲法ニ掲載シテ細目ハ省略スルヲ必要トス。

第二　君主ノ主權ニ付テハ英國ノ典例ニ依ラザルコトニ勉ムベシ。英國ニ於テハ主權ハ全ク下院一院ニアリ。是レ彼國ノ歷史上數百年來因襲シタル慣例ニシテ、人之ヲ怪マズ。又彼國ニ於テハ是レ尤モ良法ナリトス。然レドモ他國ニ於テハ其歷史ノ英國ト同一轍ナラザル以上ハ、決シテ之ニ依ルベキモノニアラズ。此點ニ付テハ近世宇內ニ帝權ヲ輝カシタル獨國ノ憲法尤モ善良ナリトス。彼獨逸流ノ君主權ヲ以テ憲法ヲ制定スルコト余ノ尤モ日本政府ノ爲ニ望ム所ナリトス。

第三　大臣ノ責任ハ英國ノ慣例ヨリ來テ各國皆其流ニ從ヘリ。大臣ニシテ一タビ君主ノ選任ヲ受ケタル以上ハ、其責任ハ全ク君主ニ對スルモノニシテ、議院ノ得テ之ヲ進退スベキモノニアラザルナリ。殊ニ日本ノ如キハ數千年來ノ君主國ナレバ、大臣ノ責任ハ天皇ニ對シテノミ有スルモノニシテ、議院ニ對シテ有セザルコトニ制定シタキモノナリ。現ニ米國ノ大統領及大臣ハ國民一般ニ對シ責任ヲ有スルモ、國會ニ對シテハ直接ニ責任ヲ有セザルナリ。

第四　大臣彈劾ノ如キハ憲法ニ掲記セザルヲ必要トス。現ニ各國ノ實際ニ依レバ、近年之ヲ施行シタルノ例ヲ見ズ。故ニ若シ大臣ニシテ非行又ハ不正ノ過失アレバ、宜シク議員ヨリ君主ニ上奏シテ其退職ヲ請求スベシ。此退職ノ上奏ヲ以テ大臣ノ非行又ハ不正ヲ檢束スルニ足ル。現ニ米國ノ各州ノ憲法ニハ裁判官ノ事ニ付テハ議院ハ彈劾及上申（アドレス）ノ二權ヲ有スレドモ、今日ノ實際ニ依レバ彈劾ヲ用ヒズ、直ニ州知事ニ裁判官ノ非行又ハ不正ヲ上申シテ退職ヲ請求スルナリ。故ニ日本ニ於テ彈劾ヲ廢止シテ單ニ議員ハ上奏ノ權ヲ有スルノミニ止メ置キタシ。

右卒テ其問題ニ答テ日本政府ハ第一ヨリ第四ニ至ルマデ悉ク「ブレイン」氏ノ意見ノ如ク制定シタリト說明セシニ、同氏ハ手ヲ拍テ賞歎シ、其根本已ニ確定セバ餘ハ憂フルニ足ラズ。實ニ此答辯ヲ聞キ余ハ日本政府及其政治家ガ各國憲法ノ長短ヲ折衷シ、理論ト實際トヲ比較シテ此大業ヲ成功セシヲ祝賀スルナリト言ハレタリ。

獨逸法律博士イヤリング氏トノ談話

明治廿二年十月廿六日獨逸「ゲチンゲン」府ニ於テ

貴國ハ明年ヲ期シ議會開設ノ由ナレバ、孛國ノ憲法上ニ於テ經驗シタルコトニ付愚見ヲ陳述シテ貴下ノ諮問ニ對ヘントス。

第一　千八百五十年孛國ニ於テ憲法ヲ制定シテ國會ヲ開キシトキ、政府ノ尤モ注意セシモノハ上院ニアラズシテ下院ニアリ。下院ノ靜否ニ依テ其政治ニ非常ノ影響ヲ及ボスモノナリ。其初回ノ景況ハ始終國會ニ附隨スルモノニシテ尤モ顧慮スベキモノナリ。日本ノ法律ニ依レバ上院ハ皇族、華族及勅選ト民選トノ議員ヲ以テ成立スルモノトス。是レ小生ノ尤モ賛成スル所タリ。殊ニ帝王ニ終身議員ヲ選任スルノ權ヲ與ヘタルト、地方ノ大地主及資本家ヲシテ上院ニ列セシムルトニ至テハ、小生ガ平生懷抱スル宿論ニ適シタリ。

此勅選議員ニ付テ小生ガ貴國政府ニ望ム所ヲ述シントス。此議員ニ依テ帝室ハ常ニ上院ヲ左右スルモノナリ。若シ貴族及民選ノ議員ニシテ過激ニ走ルノ憂アルトキニハ、着實ナル終身議員ヲ選拔シテ其過激ヲ制スルモノナリ。又若シ頑固習舊ニ傾クトキニハ、有爲活潑ナル者ヲ選任シテ其頑固ノ風ヲ洗攘セントス。故ニ明年貴國ニ於テ此勅選議員ヲ選任スルハ、貴族中ノ選擧議員及最多額納稅者ヨリ選擧スル議員ノ氣風及論說ヲ觀察シタル後ニ於ヲスベシ。而シテ其選任スル議員ノ人員モ亦最多限ニ上ラザル樣ニ注意シ、幾分カ人員ヲ殘スコト必要ナリ。何トナレバ議會開會ノ後ニ於テ上院ノ傾向頓ニ一變シテ大ニ政府ニ反對スルコトモアルベシ。又下院ニ於テ非常ナル反對論者アリテ、政府ニ於テモ其人ヲ他ニ變ゼシムルノ必要ヲ感ズベシ。然ルトキニ此殘シ置キタル勅選議員ニ他ヨリ適當ノ人物ヲ任ズルカ、又ハ下院ノ反對論者ヲ轉任セシムルカノ方策ヲ採ルコトヲ要ス。兎モ角モ此勅選議員ヲ常ニ滿員セシムルコトハ政府ノ得策ニアラザルナリ。

第二　皇太子及今上皇帝ノ直系ノ子孫ハ上院ニ列スルノ權ヲ有スルモ、平素ハ議場ニ列セザルコト緊要ナリ。何トナレバ帝王ハ常ニ尊嚴ナルコトヲ要ス。故ニ後來帝王トナルベキ人物ヲ常ニ議場ニ列セシメテ、他ノ議員ト伍ヲ同セシムルハ、帝王ノ尊嚴ヲ滅殺スルノ傾キア

リ。又人民ヲシテ皇子孫ノ言論擧動ヲ議場ニ於テ比較シ、皇子孫ノ優劣賢愚ヲ評論シ、其極終ニ皇太子ヲ廢シテ第二第三ノ皇子ノ帝位ニ卽カレンコトヲ希望スルノ念ヲ起サシムルノ恐レアリ。故ニ其他ノ皇族ト雖モ可成丈ケハ平素議場ニ列セザルコトヲ希望ス。但シ開院及閉院ノ議式ニハ正裝ヲ着ケ議場ニ列シ、帝室ノ威嚴ヲ示スコト緊要ナリ。

第三　上院ヲ設クルノ必要ハ下院ノ急激ナル議決ヲ調停スルニアリ。故ニ政府ハ常ニ上院ヲ己レノ味方ニ取リ込ミ、議案ハ先ヅ下院ニ下シ、其議場ニ於テ到底維持辯護スルコト能ハザル事件ハ、其議案ノ上院ニ廻送アルノ時期ヲ待テ、上院議員ヲシテ政府ノ意見ノ如ク終ニ議決セシメ、而シテ上院ヲシテ下院ト協議セシメ、政府ハ直接ニ其衝ニ當ラザルヲ宜シトス。

第四　政府ヨリ議會ニ出席シテ議案ヲ說明スルハ大臣ノ職掌ノ一タリ。然レドモ議場ハ演說ヲ主トスルモノニシテ、大臣悉ク雄辯家ニアラザルナリ。故ニ議會ニ於テ演說スル爲メニ主務省ノ事務ヲ管理セザル大臣ヲ內閣ニ置クコト必要ナリ。是レ英國ニアル「ミニスター、ウイザウト、ワオートフオリヨー」トヲ云フ。此大臣ハ演說ニ巧ミニシテ能ク議員ト交際シ、政府ノ議案ヲ繼持通過スルノ技倆ヲ有スルモノタルベシ。此議案說明者ハ樞密顧問次官局長等マデハ位置高カラズシテ議員ヲ說キ附スルノ勢力ナシ。現ニ宇國ニテハ大臣ノ代理ニ樞密顧問（「ゲハイムラート」）ヲ議會ニ派遣セシムルコトアレドモ、大臣程ノ勢力ナシ。主務省ノ事務ヲ管理スル才能ト議場ニ於テ答辯スル技倆トハ同一ノ人ニ望ムベカラザルモノナリ。故ニ二派ノ職掌トシテ議會ニ對シ、一ハ內閣ニ於テ主務ノ事務ヲ總轄シ、一ハ議場ニ於テ議案ヲ答辯スルヲ可トス。

第五　議會ヲ開設シタル各國ノ例ニヨレバ、議會ハ悉ク改進急激ノ傾向ヲ有スルモノナリ。故ニ議會ヲ開クトキニハ政府ハ斷然共同一致シテ保守主義ヲ採ルコト第一ノ急務ナリ。政府ニシテ保守主義ヲ確守スレバ急進ノ憂ナク、秩序ヲ紊ルノ恐ナク、漸々ニ國政ヲ增進スルノ途ニ著クモノナリ。然レドモ政府ニシテ保守主義ヲ確守スルコト能ハザルトキハ、國家ノ政事、法律、其他社會萬般ノ事ハ皆壞亂ノ境ニ陷ルモノナリ。

第六　政府ハ斷然保守主義ヲ採ルト雖モ、亦改進急激ノ議員トモ交際スルコト尤モ必要ナリ。故ニ議會開設後ノ國務大臣ハ私交上ニ於テ勉メテ議員ト交際スルヲ要ス。或ハ夜會ヲ催シ、或ハ宴會ヲ設ケテ己レニ反對ノ議員ヲ招キ、之ト團欒シテ談笑スルコト議會ヲ統禦スルノ第一ノ方策ナリ。是レ宇國ノ「ビスマルク」公ノ政策ナリ。

第七　內閣ト議會トノ關係ハ頗ル緊要ノ問題ナリ。宇國ノ大宰相「ビスマルク」公ノ政略ニ依レバ、政府ハ保守主義ヲ採ルト雖モ、議會ニ於テハ各政黨ノ上ニ立テ常ニ國政ヲ處理スル

ニアリ。然レドモ平素各政黨ト關係ヲ着ケ、一朝事アルトキニハ皆己レノ政略ヲ贊成スル樣ニ致スコトハ政治家ノ祕術ニシテ、學者ノ論究スベキコトニアラズ。然ルニ政府ハ議員選擧ニ干渉シテ政府黨ヲ作ルコトハ、憲法上又ハ道義上ニ於テ爲スベキコトニアラザルナリ。然レドモ政府ヲ贊成スル議員ヲ官吏ニ選拔シテ其氣風勢力ヲ養成スルコトハ、政府ノ尤モ爲スベキコトナリ。此權ナケレバ政府ノ一致鞏固ヲ爲スコト能ハザルナリ。又政府ニ反對スル議員ヲ制スル方法ハ全ク行政上ノ處分ヲ以テスベキモノナリ。行政權ノ範圍內ニ於テ此處分ヲ爲スコトハ政府ノ特權ナリ。假令バ反對議員ノ住居地ヨリ鐵道布設、工業設置其他行政官ノ許可ヲ請求スルコトアルトキニ當リ、行政權ヲ以テ之ヲ許可セザルコトモ亦政府ノ爲シ能フ所トス。

第八　議會ニ於テ非常ノ反對議員ヲ出シ其雄辯ト才能トニ至テハ頗ル議場ヲ風靡シテ大ニ政府ヲ苦ムルトキニハ、其議員ニ勳章ヲ與テ其功勞ヲ賞シ、或ハ外國ノ公使ニ轉任セシメ或ハ第四ニアル所ノ演說大臣ニ採用スルコトモ亦反對者ヲ制スルノ一ノ方略ナリ。

第九　宗教ト政治トハ理論上分離シタル如クナレドモ、實際ニ於テハ宗教ノ勢力頗ル强大ナリ。多數ノ人民ハ寧ロ宗教上ノ感覺ニテ左右セラレタリ。故ニ各宗門ノ高僧及神官ノ高位ニアル者ヲ勅選議員トスルハ政略ノ一般ナリ。依之多數ノ人民ヲ政府ノ味方ニ引入レ、政治上ニテモ非常ノ好結果ヲ生ズルナラン。

皇太子及皇子孫ノ教育ニ付テハ通常ノ人民ノ教育ト左マデ異ナルコトナシ。現ニ孛國今上帝ノ如キハ初メ「カツセル」ノ中學ニ於テ修學シ、其後「ボーン」ノ大學ニ於テ修學セラレタリ。又英國ノ皇子「オーガスト」王ノ如キハ「ゲチンゲン」大學ニ於テ修學セラレタリ。

日本ノ皇太子及皇子孫ノ教育ニ付テハ日本古來ノ慣習ノアルコトナレバ、漫リニ外國ノ例ヲ適用スルニモ及バザルベシ。然レドモ左ノ事項ニ付テハ日本ノ宮內省ニ於テ採用アランコトヲ望ム。

第一　皇子孫ノ教育ハ學術、技藝、文學等ニアラズ、全ク日本ノ帝王トナリ又ハ帝室ノ門族トナルベキ膽力ト器量トヲ養成スルヲ以テ第一ノ急務トス。學術、技藝、文學等ハ帝王ニ必要アルモノニアラズ。全ク萬乘ノ君トナリ、百萬ノ人民ヲ統御スル中心トナルベキ人物ヲ養成スルニアリ。故ニ師傅又ハ教育掛ヲ選拔スルニハ此目的ヲ達スル人ヲ得ルヲ以テ第一トス。又師傅又ハ教育掛ニハ決シテ外國人ヲ使用スベカラザルモノトス。

第二　皇子孫ト同年齢位ノ貴族（公侯ノ家ニ限ル）ノ子弟五六名ヲ選抜シテ皇子孫ト同學校ニ於テ同一ノ教授ヲ受ケシムルヲ要ス。何トナレバ單獨ノ教育ハ奬勵ノ途ヲ闕キ、共同ノ教育ハ共進ノ門ヲ開ク。又同學中ノ優秀ナル子弟ヲ賞褒シテハ皇子孫ヲ奬勵シ、又其怠慢不能ナル者ヲ處罰シテハ皇子孫ヲ警戒シ、以テ其學問ノ進歩ヲ勸ムベキモノトス。

第三　日本帝國ハ島國ニシテ四面皆海水ナリ。故ニ外國トノ關係モ第一ニ海水ニアリ。又内外ノ貿易モ亦第一ニ海水ニアリ。凡テ事ヲ計ルニハ海水ニ關係アルモノナレバ、日本ノ帝王ハ海軍ノ大元帥タルコトヲ忘ルベカラザルナリ。又皇子孫ハ陸軍ヨリモ寧ロ海軍ニ從事スベキモノトス。故ニ皇子孫ハ普通ノ教育ヲ經テ海軍兵學校ニ入ルコトヲ得ル學力ヲ有スルトキニハ、悉ク海軍兵學校ニ入ラルヽコトヲ希望ス。然ルトキニハ兵學校卒業ノ後日本ノ軍艦ニ乘込ミ、歐米各國ノ港灣ニ至リ、其砲臺ノ位地及構造ヲ觀テ國防ノ實況ヲ視察シ、又船舶ノ輻輳スルヲ見テハ貿易ノ繁盛ヲ感ジ、上陸シテハ各國ノ帝王ニ面會シテ其容貌言語行爲ヲ觀テ、外國帝王ノ實況ヲ觀察シ、歸朝ノ後大ニ日本帝室ノ爲ニ稗益スル所アルベシ。

スペンサー氏トノ談話

明治廿三年三月二日

日本憲法及之ニ附屬スル法律ニシテ、日本ノ歴史及國體ト同一ノ精神及性質ヲ有スルニアラザレバ、其憲法及附屬ノ法律ヲ實施スルニ當リ非常ノ困難ヲ生ジ、終ニ憲法政治ノ目的ヲ達スルコト能ハザルニ至ラン。此事ニ付余ハ曾テ在英日本公使森氏ニ意見ヲ陳述シ、日本憲法ヲ制定スルニハ漸進保守ノ主義ニ基キ、其國ノ歴史習慣ヲ基礎トシ、傍ラ歐米各國ノ憲法主義ヲ採用シ日本舊來ノ政體ヲシテ歐米ノ立憲主義ニ適合セシメ、決シテ舊體破壞シテ新制ヲ創設スルニアラザルナリトノ精神ヲ培養スルコトヲ希望ス。何トナレバ外國ノ草木ヲ齎シ來テ之ヲ自國ニ植付ルモ、外國ト同一ノ花實ヲ結ブコト能ハザルハ植物學ノ原理ナリ、憲法モ亦此植物ノ原理ト同一ノモノニシテ、憲法ハ歐米諸國各其國體歴史習慣等ヨリ成立ツモノナレバ、決シテ外國ノ憲法ヲ反譯シテ直ニ之ヲ執行シ、外國ト同一ノ結果ヲ生ゼシメント欲スルハ誤解ノ甚シキモノナリト述ベタリ。然ルニ今日本ノ憲法ヲ一讀スルニ、日本古來ノ歴史習慣ヲ本トシ、漸進保守ノ主義ヲ以テ之ヲ起草セラレタルコト憲法ノ正條及其註解ニ明カナリ。故ニ憲法ハ余ノ尤モ

賛成セル所ニシテ、只今日ニ於テ余ガ日本政府ニ忠告セント欲スルモノハ、此憲法實施ノ事タル、憲法起草ヨリモ困難ナル事業ナルヲ記憶セラレンコトヲ希望ス。憲法制定ハ數人ノ勞働ヲ以テ成就スベキモ、憲法ノ實施ハ國民一般ニ對シテノ大事業ナレバ、其困難編制ヨリモ甚ダシケレバナリ。現ニ米國ノ實例ニ照ラシテ之ヲ證明セン。米國ノ憲法ニ依レバ人民ハ平等ニシテ上下同一ノ權利ヲ有シ、言論參政ノ兩權トモ國民同一ノ地位ヲ有スルモノアリ。然ルニ數十年ノ後ニ於テハ米國ノ政治漸次政黨ノ掌中ニ歸シ、其政黨ハ多クハ政治家ノ利己主義ニ依テ左右セラレ良民ヲシテ其弊害ヲ歎ゼシメ、遂ニ憲法ノ上ニ於テ占有スルコト能ハザルモノナリト斷念セシムルニ至リタリ。余ノ信ズル政治家ノ原理ハ、政府ノ事業ヲシテ漸次輕減シ、人民各個ヲシテ其事業ヲ自ラ經營セシムルニアリ。所謂政府ノ最終ノ目的ハ放任主義ニ在リト雖モ、此レ未ダ今日ノ實況ニ望ムベキモノニアラズ、完全世界ノ將來ヲ今日ヨリ豫想シタルノ學說ナリ故ニ政府ノ職務ヲ減殺スルノ程度ハ、人民各個ニ於テ自ラ進ンデ自立自働ノ精神ヲ養成シ、政府ノ干渉ヲ要セズ各自ノ義務ヲ守リ、他人ノ權利ヲ妨害セザルノ地位ニ進ミタル曉ニ至テ、始メテ政府ノ干渉ヲ止ムルコトヲ得ルモノナリ。故ニ一國人民悉ク其言行ヲ自由ニシテ、他人ノ權利ヲ妨害セズ、一國ノ安寧ヲ保持スルノ境遇ニ達セバ政府ノ事業ハ實ニ狹少ナル區域ニ止マルモノナラン。於是乎政治學ノ原理ヲ實地ニ施行スル

ノ曉ニ達シタリト云フベキナリ。此理ヲ證明スル爲メ假リニ埃及ノ三角塔ニ譬ヘンニ、未開國ノ政府ヲ以テ三角塔ノ初階トシ、余ガ主張スル放任主義ノ政府ヲ以テ三角塔ノ尖頭トセン。然ラバ則チ政治ノ針路ハ初階ヨリ尖頭ニ進ムモノナリ。而シテ各國其人智ノ開未開トニ依テ各々其程度ヲ異ニス。故ニ初階二階三階トモ見易キモノナリ。故ニ貴國政府ノ如キモ此理ニ基キ、何レノ階段ニアルカヲ認メ、其階ヨリ漸次上進スルモノナリト認メラレンコトヲ希望ス。然レドモ長足ノ進歩ハ國家國民ノ不利ニシテ、此憲法實施ノ際ニ尤モ戒ムベキモノトス。今貴下ト分袂ノ際ニ臨ミ爰ニ尤モ政府ノ注意ヲ乞ハント欲スルモノハ、被選人ノ資格ニ在リ。余ノ歐米各國ノ實地ニ就キ觀察シタル所ニ依レバ、米國獨立ノ口實ハ納稅ノ義務アレバ參政ノ權利ナカルベカラズト云フニアリ。是レ今日迄人民ガ參政ノ權利ヲ希望スル爲ニ嘗々スル格言ナリ、然レドモ百年間ノ經驗ニ依レバ此格言ヲ轉倒シテ參政ノ權利アルモ納稅ノ義務ヲ有セザルモノアルニ至リタリ。現ニ歐米諸國殊ニ我カ「アイルランド」ノ議員ノ如キハ、納稅スベキ財產ヲ所有セズシテ單ニ參政ノ權利ノミヲ有スル爲メ、議場ニ於テ無責任ノ言論ヲ爲シ實地行フベカラザルノ噪論空說ヲ吐露スルハ人民ヨリ政府ニ迫リ、參政ノ權利ヲ請求セシ以前ト異ナリ、政府ヨリ人民ニ迫テ參政ノ權利

ヲ得セシムルト同時ニ、納税ノ義務ヲ履行スベシト云ハザルヲ得ズ。故ニ余ハ日本政府ニ向テ納税ノ義務ト參政ノ權利トヲ並ビ行ハシムルコトニ注意アランコトヲ希望ス。

アンソン氏日本憲法ニ關スル意見

明治廿三年三月十四日樞密院書記官金子堅太郎
氏英國「オクスフォード」大學教頭「サー・ウイリヤム・アンソン」氏ヲ訪問シタルトキ同教頭ノ日本憲法ニ關スル意見

日本憲法ヲ熟讀スルニ其ノ精神ハ全ク天皇ノ大權ヲシテ悉ク天皇ニ歸セシメ、君主ヲシテ萬機ヲ統宰セシムルニ在リ。是レ世人ノ日本憲法ヲ評シテ獨逸主義ヲ學ビタリトナス所ナリ。然リト雖モ英國憲法ノ精神モ亦實ニ此ノ主義ヨリ外ナラザルナリ。世人ハ唯英國政治ノ實際ニ着目シ、事實上ヨリ推論シ、英國議院政治ヲ以テ多數黨派ノ主宰スル所ナリト謂フ者アレドモ、是レ未ダ英國憲法ノ精神ヲ悟リ、其理論ヲ明カニシタルモノニアラズ。故ニ予ハ日本憲法ノ精神ヲ以テ全ク英國憲法ノ主旨ニ適合セル者ナリト謂ハントス。

憲法第八條ニ依レバ天皇ハ緊急ノ必要ニ由リ議會閉會ノ場合ニ於テ、法律ニ代ルベキ勅令ヲ發スルトアリ。是レ固ヨリ必要ヨリ出デタルモノニシテ、此條ヲ設ケタルハ尤モ其ノ當ヲ得タル

モノナリト雖、日本憲法ニ依レバ行政ノ大憲悉ク之ヲ擧ゲテ君主ニ歸セシメ、大臣ハ天皇ニ對シテ責任ヲ有スルノミニシテ議會ニ向テハ行政ノ責ニ任ゼサルガ故ニ、天皇親ラ行政ノ責任ヲ負フガ如シ。若シ政府ニシテ過失アルトキハ勢ヒ天皇ハ議會攻撃ノ衝ニ當リ、人民怨嗟ノ府トナル恐レナキニシモアラズ。是レ實ニ危險ナルモノニアラズヤ。後日若シ壓制ヲ欲スル君主ノ顯出スルトキニハ、其ノ權力ヲ濫用シテ遂ニ憲法ヲ蔑視シ、其範圍外ニ出ヅルコトナキヲ保スベカラズ。又此條ヲ濫用シ議會閉會ノ機會ヲ伺ヒ、緊急ヲ以テ口實トナシ、勅令ヲ發シテ財政上必要ノ處分ヲナシ、後日議會開會ノ後之ヲ議會ニ提出シ、其承諾ヲ得ザル時ニ至リ、始メテ其勅令ノ將來ニ向テ效力ヲ失フ旨ヲ布告ス。然レドモ此時機ニ至ルマデ其實政府ハ既ニ其希望スルコトヲ遂グルガ如キコトナキヲ保スベカラズ。若シ極端マデ想像スルトキニハ、此勅令ニ對シテハ議會ノ承諾ヲ得ザリシヲ以テ其無效ナル旨ヲ布告シナガラ、議會閉會ノ時期ヲ待テ更ニ再ビ前令ニ類セル勅令ヲ發布シテ政府ノ目的ヲ行フガ如キ恐ナキヲ保スベカラズ。然リト雖是レ固ヨリ政略ノ宜シキヲ得タル者ニアラズ。故ニ大臣ニ於テ其明智ヲ用キテ人心ノ向背ヲ察シ、公明ノ德義心ニ依テ職權ノ濫用ヲ避ケナバ、前陳ノ極端ニ走ルコトナカルベシ、但大臣ニ於テ其權力ヲ自ラ檢束シテ政治運用ノ妙ヲ致スハ、一國ノ政略ト其人ノ良心トニ依ラズンバアタハザルナリ。

英國ニ於テハ政府ヨリ法律案ヲ議院ニ提出スル以前ニ、皆大藏省中ニアル議院顧問官（パーラメンタリーカウンシル）ニ委ネテ立案セシムルガ故ニ、法律ノ文章好ク其體裁ヲ備フルト雖モ、通常議員ノ提出スル者ハ此ノ顧問官ノ手ヲ經ザルヲ以テ、法律案ノ體裁同一ニ出デズ、其用語ノ如キモ亦明瞭正確ヲ缺クノ弊アリ。故ニ或論者ハ更ニ諺案調査局ヲ議員內ニ設置シ、通常議員ノ提出シタル法律案ハ悉ク此局ノ調査修正ヲ經又議員ニ於テ議案ヲ提出セントシ欲スルトキハ其要領ヲ指示シテ議案ヲ編成セシムルコトトセントノ說ヲ唱フルニ至レリ。但シ此論ハ初メ米國ニ於テ主唱セラレテ其後英國ニ傳播セリ。

此制ヲ行フトキハ

（第一）法文用語ノ曖昧ナルヲ避ケ得ルコト。

（第二）法律案ノ體裁區々ニ出ルヲ避ケ得ルコト。

（第三）法文用語ノ曖昧ナルガ爲ニ訴訟事件ノ陸續起ルコトヲ避ケ得ルコト。

三個ノ利益ヲ得ベシト雖モ、此便利ナル局アルガ爲ニ、議員ヲシテ法律案起草ノ念ヲ奬勵シ重要ナラザル事項ニ關シテモ濫リニ法律案ノ提出ヲ試ミ、法律案ノ增加ヲ致シ、其弊害言フベカラザルニ至ラン。故ニ英國現行ノ制ニ依ルヲ以テ適ナリトス。然ルトキハ左ノ二個ノ事情ニ依リ濫リニ法律案ノ提出スルノ弊ヲ避ルコトヲ得ベシ。

（第一）通常議員ガ法律案ヲ提出セントスルトキハ勢ヒ法律家ニシテ法文編制ノ技倆ニ熟スル者ニ依頼シテ之ヲ起草セシメザルヲ得ズ。此場合ニ於テハ之ニ報酬ヲ拂ハザルベカラズ。又已レノ提出スル法律案ノ議院ヲ經過スルヤ否ヤハ始メヨリ期スベキコトニアラザレバ、之レガ爲メニ若干ノ費用ヲ擲ツコトハ固ヨリ人情ノ好マザル所ナルガ故ニ、必要ノ事件ニアラザルヨリハ好ンデ法律案ヲ提出スルコトナク。自然差控ユルコトトナルモノナリ。

（第二）若シ自ラ法律案ヲ起草シテ提出スルモ、果シテ其法案ノ議會ヲ通過スルヤ否ヤハ甚ダ覺束ナキモノトナルヲ以テ、自ラ其面倒ヲ取ランヨリ寧ロ政府ニ依頼スルノ勝レルニ若カズトナシ、豫メ政府ト協議シテ其希望スル所ヲ陳述シ、政府ノ法案トシテ提出セシムルカ、或ハ現存ノ法律ノ修正案トシテ政府ヨリ提出セシムルコトヲ勉ムルモノトス。此ノ如クスルトキハ政府ニ於テモ豫メ議員ト協議シテ其意見ヲ聞キ、議員モ亦大ニ自己ノ便利ヲ得テ一擧兩得ナルモノトス、而シテ必要ノ事件ニアラザレバ假令ヒ議員ガ請求スルモ政府ハ濫リニ之ニ應ズルコトナキヲ以テ、法律案提出ノ濫弊ハ固ヨリ之レナキモノトス。

日本ニ於テモ漸次法律家モ顯出シ、法律案起草ノ依頼ニ應ジ得ル者モアルベク、又議員ヲシテ可成的政府ト協議シ、其手ヲ經由シテ法律制定ノ習慣ヲ付ケシメ、別ニ議員內ニ法制ニ關スル一局ヲ設クルニモ及バザルベシ。英國現行ノ制ニ則ルヲ可トス。

凡ソ何レノ政府ト雖モ議院制度ヲ採用シタル以上ハ、政府獨リ政黨ノ上ニ超然卓立シテ政治ヲ施シ得ルモノニアラザルナリ。獨逸ノ宰相「ビスマーク」公ノ例ヲ援キ之ヲ日本ニ行ハント欲スルモ、恐クハ其實効ヲ見ザルベシ。「ビスマーク」公モ初ノ孛國議會ノ意ニ戻リテ軍備ヲ擴張シ、憲法ニ反セル政治ヲ行ヒタルガ爲ニ世論ノ攻撃スル所タリシガ、千八百六十六年墺國ヲ破リ、又千八百七十年佛國ニ克チ、獨逸帝國ヲ再造シタルヨリ國民其功業ヲ思ヒ之ヲ推戴セシト雖モ、是レ固ヨリ特例ニシテ常例ニアラザルナリ。「ビスマーク」公死セバ獨逸並ニ一國ト雖モ政黨政治ヲ免カル、コト能ハザラントス。故ニ日本ニ於テ政府ヲシテ政黨以外ニ立シメントト欲スルハ抑モ亦難キコトニアラズヤ。

英國ニ於テ憲法政治ノ運用彼レガ如ク圓滑ナル者ハ理論上ヨリ斯クノ如クナルベシト論究シタルノ結果ニアラズ。全ク時々生ジタル事實上ヨリ然ル者ナリ。故ニ其議院政治ヲ稱シテ歲月ノ產出シタル孤兒ナリト云フコトヲ得ベシ。例セバ「ピット」ガ多數ノ黨派ニ反對シテ政治ヲ行ヒタルガ如キモ、僅々數ケ月間ニ過ギズ。爾後反對黨ヲ驅逐シテ自黨ヲ以テ議院ノ多數ヲ制シタリ。又「ジョージ」第三世ガ政黨以外ニ卓立シテ政治ノ才能ヲ顯ハサント試ミシモ終ニ其目的ヲ果スコト能ハズ。議會ト政府ト反對ノ地位ニ立チシコトハ「ロード、アバーヂーン」以

後其例ヲ見ザルナリ。故ニ英國ガ今日政黨政治ヲ行フコトハ其理論上ヨリ將サニ然ルベキモノナルガ爲ニ然リシニアラズ。全ク事實上ノ結果ヨリシテ然ラザルヲ得ザルガ爲メナリ。故ニ英國憲法ノ元則ハ英國政治ノ事實上ノ出來事ヨリ生ジタルモノニシテ決シテ、純粹ナル理論的ノモノニアラザルナリ。

英國ニ於テ軍人ニ參政ノ權ヲ許スガ如キ寬裕ナル制度ハ大陸諸國ニ於テ見ザル所ナリ。是レ全ク英國特殊ノ事情ヨリ生ゼシモノナリ。日本ニ於テ大陸ノ主義ヲ採用シテ、軍人ニ參政權ヲ與ヘザルハ固ヨリ其當ヲ得タルモノトス。英國陸軍ノ士官ニシテ議員ニ當選セラレタルトキハ、士官ノ俸給ヲ受ケナガラ其職務ヲ中止シテ議院ニ參列シ得ルノ制度ナルヲ以テ、同列士官ハ之ヲ喜バズ、自ラ陸軍部內ニ於テ現行此制ニ對シ不平ヲ唱フルモノアルナリ。之ニ反シ海軍ニ於テハ遠洋航海等ノ事アリテ永ク本國ニ住居スルヲ許サズ、又海軍ハ其內規ヲ以テ士官ニシテ議員ニ當選セラルヽモ、議院ニ出席スルヲ許サヾルヲ制トス。故ニ選擧區人民ハ海軍ノ士官ヲ選擧シタル後其士官ニシテ議院ニ出席セズ曠職スルコトアレバ不平ヲ唱ヘ、終ニ海軍士官ハ自ラ其職ヲ辭セザルヲ得ザルニ至ルナリ。又英國ニ於テハ兵卒ト雖モ選擧權ヲ有スルコト通常公民ニ異ナラザルナリ。故ニ若シ此公民權ノ一部ヲ削奪セントスルトキニハ、兵卒タルコトヲ志願スル者ナキニ至ルガ爲メ、英國ニ於テハ軍人ニモ參政ノ權ヲ與ヘザルヲ得ザルナリ。

英國ニ於テ大僧正以下ノ僧侶ハ下院ニ列スルコトヲ許サズ。其ノ理由ハ左ノ二條ニ在リトス。

（第一）理論上下院ニ列スル必要ナシ。何トナレバ往時ノ制度ニ依レバ貴族僧侶及平民ノ三代議體アリテ僧侶一局部ヲ占メ納稅ニ關シテモ發言ノ權ヲ有シタレバナリ。

三代議體ハ左ノ如シ。

（甲）世襲貴族ノ團體、卽チ上院（敎務貴族及大僧正及僧正ノ上院ニ列スルノ高僧タルガ故ニアラズシテ往古「バロネー」ト稱スル領地ヲ所有スル貴族タルガ故ナリ）

（乙）僧侶ノ團體（是レ卽チ僧侶ヲ代表スルモノニシテ第十四世紀迄ハ每年皇帝ヨリ召集狀ヲ受ケテ「ウエストミンスタア」ノ王宮ニ參集シテ租稅負擔ニ關スル事項ヲ決議セリ）

（丙）一般人民ノ代議士及下院

以上三個ノ代議體ノ存在セシヲ以テ、僧侶ガ別ニ下院ニ參列スルノ必要ヲ見ザルナリ。

（第二）實際上ヨリ考フルモ寺院ノ制規ニ依リ寺區ノ僧侶ハ其受持チタル寺區ノ敎務ニ關シ平常餘暇ナキ者ナルヲ以テ、議員ニ當選セラルヽトキハ其本職地ヲ離レ敎務ヲ曠フスルノ恐アリ。故ニ僧侶ノ下院ニ參列ヲ許サヾルガ如シ。但シ大僧正及僧正ノ如キ高僧ニ至テハ別ニ其住居地ニ附著シタル敎務ナキガ爲ニ、上院ニ出席スルモ妨ゲナキナリ。

第十四世紀以來實際ニ於テハ僧侶ノ代議體ナル者ハ召集セラレタルコトナク、知ラズ識ラズ其權利ヲ放擲シタリシガ、千七百四十一年ニ至リ「ヂヨーヂ」第三世第六十三章ノ法律ヲ以テ自今僧侶ノ下院ニ參列スルノ權ヲ削奪シタリ。

日本僧侶ニ於テ單ニ選擧權ノミヲ有シテ被選權ヲ有セザルガ爲メ、多少非難スル者アル由ナレドモ、英國ニ於テモ官吏ノ大半ハ其官吏ノ資格アルガ爲ニ選擧權ノミヲ有シテ被選權ヲ有セザルノ例アリ。故ニ日本僧徒ガ喋々スルハ其謂ハレナキモノナリ、然リト雖モ僧侶牧師等ノ中ニ於テ、學識卓絶碩德聲譽一世ニ高キ者ハ、天皇ニ於テ其學識ヲ敬愛シ、又宗教ニ關スル意見ヲ聽聞シ、又各種ノ人物ヲ上院ニ徵集スルガ爲ニ殊ニ此等ノ僧侶ヲ勅選シテ終身議員トナスハ政略ノ最モ得タル所ナリト信ズルナリ。然ルトキハ現今僧侶ノ間ニ行ハル、不平ノ聲モ自ラ靜穩ニ復スルノ利益ヲ見ルヲ得ベシ。但其僧侶ノ團體ヲ代表セシムルガ爲ニ、若干ノ僧侶ヲ勅選スルナリトノ主義ハ表明ニスルコトハ決シテ採ルベキ者ニアラザルナリ。

英國ニ於テハ千八百六十八年及八十三年ノ法律ヲ以テ當選訴訟ヲ裁判所ニ移シ大ニ便益ヲ感ジタリ。之ニ反シ佛國ニテハ今猶ホ當選ノ當否ヲ議院ニ於テ決スルガ故ニ、多數ノ黨派ハ其黨派心ノ爲ニ正理ヲ曲グルノ弊アリ。又選擧ニ關スル犯罪ニ付テハ議院ト裁判所ト各自ニ審判權

ヲ有スルガ爲ニ、二所矛盾ノ裁判ヲナスガ如キ不都合ヲ生ゼリ。英國ニ於テハ之ヲ裁判所ニ委ネタルガ爲ニ、僥倖ヲ希望スルノ念ヲ絶チ年ヲ追テ濫リニ出訴スル者ナリ、當選訴訟ノ數ヲ減ジ大ニ好結果ヲ得タリ。但シ世人或ハ公明正大ナル裁判官ノ判決ニ向テモ尙ホ未ダ邪推ヲ逞フシ、其裁判官ハ嘗テ其黨派ノ說ニ左祖セシ者ナルヲ以テ此判決モ亦某黨派ニ私セシニアラズヤ抔ト思フ者アリ。又裁判官モ此等ノ批評ヲ受ケンコトヲ恐レ當選訴訟ヲシテ其職務中ニ加ヘラレタルヲ以テ、政黨ノ論鋒ヲ裁判所ニ輸入シタリト云ヒ、不滿ニ思ヒ居ルモノアルナリ。而シテ當選訴訟ヲ起スニハ賄賂、欺騙、脅迫ノ三要件ノ一アルヲ要シ、又三週日以內ニ起訴スベキ者ナリト雖、賄賂ヲ贈ルガ如キ普通刑事犯罪ナル者ハ當選訴訟ノ出訴期限三週日以外ト雖モ猶普通法ニ依リ起訴スルコトヲ得ルモノトス。裁判所ニ於テ議員ニ對シ禁獄ノ裁判ヲ爲シ、其旨ヲ議長ニ報告スルトキハ其議員ハ當然其位地ヲ失ヒ直チニ空位ヲ生ズ。

今年資格ヲ備ヘ當選セラレタル議員、明年ニ至リ資格ヲ缺クニ至ルトキハ、議員中ノ一人公文書ニ依リ證憑ヲ擧ゲテ之ヲ議院ニ報ズルトキハ、其證憑ニ依リ議院ハ該議員ヲ以テ其席ヲ失ヒタルモノト判斷ス。其證憑トハ外國歸化狀又ハ身代限ノ宣告等公證ノ證據ヲ以テ足レリ。

當選訴訟ハ普通ノ裁判所ニ移スト雖モ議員ノ資格ニ付テハ議員ハ尙ホ審判スルノ權アリ。例セバ千八百六十八年總選擧ノ後蘇蘭某地方ノ議員當選シタリシガ、議院開會ノ後其議員ハ政府

ノ受負人ナリシコトヲ發見スルニ及ビ、議員ノ一人之ヲ議院ニ告ゲタレバ、議院ハ別ニ審判ヲ要セズシテ其受負人タルノ證憑ニ依リ、直チニ該員ハ其席ヲ失ヘリト判斷セリ。

中古時代ニ於テ開會ノ勅諭ナルモノハ、皇帝ガ親シク詔セシ者ニシテ、所謂宸襟ヨリ出デタル希圖ト請求トヲ告グラレタル者ナレバ、之ニ奉對スル討議モ亦簡單ニシテ二日間ニシテ奉答書ヲ決議セシ程ナリシガ、此勅諭モ時世ノ變遷ト共ニ其實ヲ改メ、遂ニ大宰相ノ政略ヲ公告スル文辭トナルニ至リタリ。夫レ議會開會ノ初ニ於テ政略ノ方針ヲ議會ニ公告スルハ必要ノ事ナリト雖モ、之レガ爲ニ勅諭ニ付テ一々點檢批評シ、奉答書ノ討論ノ爲メニ六週日ヲ費スコトアリ。又反對黨ハ百方勅諭ノ瑕瑾ヲ搜索シテ、政府攻擊ノ材料トシ、且ツ故サラニ討論ニ時日ヲ費シテ會計上政府ニ困難ヲ與ヘンコトヲ圖ルニ至リタリ。故ニ日本ニ於テ國會開設ノ初メニ當リテハ勅諭ハ極メテ單簡ヲ旨トシ、單ニ議員ヲ召集シテ國政ヲ議セシムル事ノミヲ記載シ、政府施政ノ方針ニ至リテハ別ニ大宰相ヲシテ開會後陳述セシムルコト、帝室ノ尊嚴ヲ傷ケズ、穩當ナル方法ト云フベシ。

日本既ニ代議制度ヲ創始シタル上ハ、政府タル者ハ國民ト親睦シテ共ニ政治ヲ議スルノ心得ナカルベカラズ。猶ホ重キヲ上院ニ置キ、之ヲ以テ政府ノ藩離トナサントスルガ如キハ是レ公然信ヲ下院ニ措カザルヲ示スモノニシテ、上下親睦ノ道ニアラザルナリ。又下院ヲ以テ政府ノ味方トナシ、決シテ之ヲ敵視スベカラザルナリ。下院若シ勢力ナキトキハ有爲ノ人物ハ下院ニ在ルヲ屑トセズシテ上院ニ入ルコトヲ好ムニ至リ、下院ハ遂ニ主領先導者ノ其方針ヲ指示スルモノナキニ至ラン。故ニ政府ハ人物ヲ悉ク上院ニ網羅スルコトニ汲々スベカラズ。日本ノ上院ノ組織ヲ見ルニ其人材ヲ集ムルニ於テ頗ル精巧ヲ致シ、且ツ其權力モ亦頗ル重大ナルガ故ニ、只サヘ勢力盛ナルベシト思フナレバ、故サラニ上院ニ人物ヲ網羅シ上院ニノミ其力ヲ著クベカラザルガ如シ。

議員席次ノ事ハ抽籤ヲ以テ配置スベカラズ。議員ノ着坐スルニ放任スベキモノトス然ルトキニハ自ラ黨派ニ依リ着席シ好結果ヲ生ズルナルベシ。黨派ニ從テ席ヲ定ムルトキハ左ノ三條ノ利益ヲ得、抽籤法ヲ用キルトキハ左ノ三條ノ弊害ヲ受クベシ。

（第一）抽籤法ニ依リ反對黨ト自黨トヲ混同シテ着坐セシムルトキハ、議員ノ不便ハ固ヨリ論ヲ俟タズ。議場整理ノ爲ニモ頗ル不便ナルモノトス。例セバ或ル事件ノ討議中議員ニ於テ其席ヲ去テ自黨ノ政友ノ傍ニ至リ協議スルガ如キコトアラン。此ノ時ニ當リ此所ヨリ彼所ニ往來シ他人モ亦此ノ如キ事ヲナストキニハ、議場ハ決シテ靜肅ナルヲ得ズ。若シ此事ハ假リニ禁ジ得ルモノトスルモ、起立ノ人員ヲ計算スルトキ四隅共遺漏ナク點檢セザルベカラズ。然ルニ各黨派混亂シテ着坐スルトキニハ、投票ヲ計算スルニ當リ非常ノ混雜ヲ生

ズ。然レドモ黨派ニ依テ着坐スルトキニハ黨論一定ノコトナレバ、各議員一所ニ集合シテ計算ニ遺漏ナキコトヲ得ベシ。

（第二）演説者ノ數減少スベシ。凡ソ黨類ヲ以テ坐席ヲ分ツトキハ、首領ノ人起立シテ演説シ其他ノ人ハ皆默シテ之ヲ聽聞スルノ風習ヲ生ジ、又同時ニ數人起立シテ演説セント欲スルトキハ同黨中ノ先輩ニ讓ルノ慣例ヲ生ゼン。然ルニ議員所々ニ散在スルトキハ此等ノ打合セヲナスコトヲ得ズ。又起立者ノ數モ自ラ多クシテ名モナキ者ト雖モ演説ヲ試ミルノ風ヲ生ジ、勢ヒ演説ノ數ヲ增加スルニ至ラントス。

（第三）黨派ノ首領ノ指揮ニ從フノ良習慣ヲ養成スルコトヲ得ベシ。黨派ニ依リ坐席ヲ分チ首領並ニ黨中有力ノ人物ヲシテ前列ニ連坐セシムルトキハ、自餘ノ黨員ハ先輩ノナス所ヲ觀察シテ己レノ坐作ヲ定メ、混亂ヲ避ケ黨派ノ全體一體トナリテ進退スルガ如キノ風習ヲ生ズルニ至ラン。

日本憲法ニ關スル「ルボン」氏ノ意見

樞密院書記官金子堅太郎氏ノ依賴ニ依リ日本帝國憲法ニ付佛國元老院議長祕書官ルボン氏ガ口述シタル意見ノ筆記

余ハ日本ノ憲法ハ全ク日耳曼主義ニ基キタルモノタルコトヲ信ズ。然レドモ其精神ヲ探究スレバ英國ノ憲法ノ主義モ餘程其中ニ包含セラレタリ。

憲法第五條ニ天皇ハ帝國議會ノ同意ヲ得テ其立法權ヲ行フコトヲ規定セリ。故ニ天皇ノ立法權執行ニ關スル權限ハ非常ニ嚴格ナリト謂ハザルヲ得ズ。而シテ天皇ハ勅制ニ依リ隨意其命令ヲ發スルコトヲ得ルヲ以テ、財政案ニ對スル天皇ノ權力ニ付テハ其制限極メテ薄弱ナリト謂ハザルヲ得ズ。余ハ此ノ如ク一方ニ於テハ薄弱ナル其釣合如何ト思フナリ。勿論只今貴下ノ說明ニ依レバ、日本ニ於テハ英國等ト違ヒ固定資本ハ政府ノ總收入ノ過半ニ至ルコトナレバ、別ニ天皇ニ與フルニ此特權ヲ以テセザルモ、政府ノ繼續及政權執行ニ付テノ必要ノ費目ハ已ニ業ニ憲法ヲ以テ確固不動ノモノト定メタリ。然ルニ其外ニ於テ

尙ホ補充資本ニ付テモ、天皇ハ必要ノ場合ニ於テハ勅令ヲ以テ國債ヲ起シ、其他財政ノ處分ヲナスコトヲ許スハ少シク權利ノ偏重ニ過ギ、立法權ト權衡ヲ失スルガ如シ。

憲法第十二條、天皇ハ陸海軍ノ編成及兵員ヲ定ムトアリ。故ニ天皇ハ自分ノ隨意ニテ各軍管ノ編成ヲ定メ、及兵員ヲ增加スルコトヲ得。然ルニ又一方ニ於テハ議會ハ其費目議決ノ權ヲ有スルモノナレバ、若シ議會ニ於テ政府ガ增加シタル費用ヲ非常ニ節減シタルトキハ、政府ハ已ムヲ得ズ其兵員ヲ減ゼザルヲ得ザルニ至ルベシ。若シ之ヲ減ズレバ其目的ヲ達スルコト能ハザルベシ。然レバ則チ天皇ノ特權ハ實際議院ニ於テ制限セラレテ其效能ナキガ如シ、是レ卽チ千八百六十二年帝國ニ於テ顯出シタルコトニシテ、日本モ亦孛國ノ如キ處置ニ出デザルヲ得ズ。之ニ依リ是ヲ觀ルニ、陸海軍ノ費用ニ付テハ實際議會ノ同意ヲ得ルニアラザレバ兵員ヲ增減スルコトヲ得ザルニアラズヤ。余ハ日本モ亦孛國ト同一ノ困難ニ出逢ハザルヲ得ザルヲ疑フナリ故ニ天皇ノ定メラレタル陸海軍ノ兵員ニ要スル所ノ費目ヲ議會ニ於テ通過セシメ、非常ノ減額ヲ來サヾルハ陸海軍大臣ノ平常處分方法ノ宜シキト其技倆信用ノ如何ニ在リ。

憲法第五十二條ニ付テハ疑アリ。議員タル者ハ凡ソ議會ニ於テハ政府ノ處置ニ付キ自由ニ其意見ヲ吐露シ、之ヲ攻擊辯護スルコトヲ得ルモノナリ。然ルニ本條ニ於テハ非常ノ束縛ヲ受クルガ如シ。是レ余ガ稍本條ノ意義ヲ解セザル所ナリ。然ルニ只今貴下ノ說明ニテ議會內ニ於テハ一般ノ法律ノ拘束ヲ受ケザルモ、議會外ニ於テ其言論ヲ演說シ又ハ刷行スルトキハ普通ノ行政規則ニ從ハザルベカラズトノ意ハ適當ノコトナリ。

憲法第五十五條ノ正條ニ付テハ余ハ毫モ異存ヲ有セズ。唯其解釋ニ於テ伊藤伯ハ大臣ハ連帶責任ナシト謂ヘリ。余ハ之ヲ謂過ギタリト信ズルナリ。何トナレバ大臣責任ニ二アリ、一ハ刑事上ノ責任ニシテ一ハ政治上ノ責任ナリ。刑事上ノ責任ニ對シテハ連帶ニアラズト雖モ、政治上ノ責任ニ付テハ連帶ナラズト謂フコトヲ得ズ。然ルニ獨乙憲法學者ハ此二個特權ノ責任ヲ混同シテ、終ニ大臣責任ノ論說ヲ誤テリ。而シテ是連帶責任ハ則チ大臣ガ議會ニ對シテ之ヲ有スルモノナリ。英國、佛國、白耳義ノ如キハ大臣責任ニ付キ刑事上ノ制裁アルノミナラズ、又政治上ノ責任アリ。而シテ議會ハ此制裁ヲ實行スルノ手續ヲ規定スルノ權ヲ有ス。故ニ勿論是等ノ國ニ於テハ大臣タル者ハ一方ニ於テハ政治上ノ責任ヲ有スルナリ。之ヲ換言スレバ刑事上ノ處罰ト政治上ノ彈劾トヲ併課セラルヽモノトス。日本ノ如キ日耳曼ノ如キニ於テハ、大臣ハ刑事上ニ付テハ連帶責任ナシト雖モ、其政治上ノ責任ハ猶ホ連帶トシテ存スルモノニシテ、此責任ハ則チ議會ニ對シ之ヲ有スルモノト謂ハザルヲ得ズ。元來大臣ノ任命並ニ其責任ハ歷史上事實ノ發達ヨリ生ズルモノニシテ學說ノ論理ヨリ起ルモノニアラズ。故ニ事實上大臣タル者ハ議會ニ對シ連帶責任ヲ負ハザルヲ

得ザルガ如シ。何トナレバ則チ英國ノ如キ法律上大臣ノ任命ハ女皇陛下ニ屬スト雖ドモ、女皇陛下ノ任命ヲ受ケタル大臣ハ猶ホ議會ニ對シ連帶責任ヲ負ハザルベカラザレバナリ。

今貴下ノ疑義ニ依レバ大臣ニシテ一方ニ於テハ天皇陛下ニ對シ責任ヲ有シ、又同時ニ他ノ一方ニ於テ議會ニ對シ責任ヲ有スルハ普通責任論ニ關スル法律ノ許サヾル所ナルガ如シト雖ドモ、元來議會ノ成立スル國ニ於テハ、大臣ガ天皇陛下ニ對シ責任ヲ有スルト稱スルハ所謂法律ノ假定ニシテ、實際ニ於テハ議會ニ對シテ其責任ヲ有スルモノナリ。今若シ天皇陛下ニシテ議會ノ信用セザル大臣ヲ任命セン乎。其議會ハ忽チ其大臣ニ反對スベキヲ以テ、到底其政治ヲ行フコト能ハザル可シ。現今英國ニ於テハ大臣タル者ハ一方ニ於テハ天皇ニ對シ、一方ニ於テハ議會ニ對シ責任ヲ有スルガ故ニ、若シ女皇陛下ニシテ命令ヲ發シタルトキハ、大臣勿論之ニ從ハザルベカラズ。是ヲ以テ英國ニ在テハ大臣タル者ハ同時ニ女皇陛下ト議會トニ對シ責任ヲ有セザルヲ得ズト雖ドモ、是レ則チ責任負擔ノ行過ギタルモノニシテ、或ハ論理上責任ノ撞着ヲ來スノ嫌アリト雖トモ、英國政治上ノ事實此ノ如クナラザルヲ得ザルニ出デタルナリ。又大臣ハ單ニ天皇陛下ニ對シテノミ責任ヲ有シ、議會ニ對シ責任ヲ有セズトスルトキハ、議會ノ言論ノ刺戟ハ直ニ天皇陛下ニ向テ之ヲ發シ、到底天皇陛下ト議會トノ軋轢ヲ生ジ、天皇ハ神聖侵スベカラザルノ格言ヲ完フスルコト能ハザルベシ。此軋轢ヲ避ケンガ爲メニ天皇ト議會トノ間

ニ於テ責任大臣ヲ置キタルモノナリ。而シテ是責任大臣ガ有スル責任ハ天皇陛下ニ對スルノミナルカ。將タ議會ニ對シテモ亦之ヲ有スルモノナルカハ學理ヨリ寧ロ事實上ノ問題トスベキモノナリ。然レドモ日本ノ如キ今日初メテ專制政治ヨリ立憲政治ニ移ルトキニハ、大臣責任ニ付テハ狹隘ナル意義ニ從フコト危險ナカルベシ。

又今余ヲ以テ主權者ト假定スベシ。余ハ將ニ大臣ニ告ゲテ謂ハントス。汝宜シク議會ニ對シ其責任ヲ厚誼シ、議會ノ信用ヲ維持シ、議會ニ對シ其職務ヲ盡スベシ。若シ是命ニ背カバ余ハ汝ヲ罷免スベシト、此ノ如クシテ大臣其職ニ當ル場合ニ在テハ、決シテ責任ノ撞着ヲ來スノ患ナカルベシ。

右ノ如クニシテ大臣ノ任命ハ天皇陛下ニ屬スルト假定スルモ、天皇陛下ハ實際議會ニ信用アル者、則チ勢力アル政黨員ヲ任命シテ大臣ト爲サヾルヲ得ザルトキハ、其大臣ガ議會ニ對シ連帶責任ヲ有スルニ至ルハ自然ノ勢ナルベシ。

憲法第六十三條ハ孛國憲法ノ丸寫ニシテ、彼國ニ於テ千八百六十二年ニ制定シタルモノト同一ナリ。每年度打切リニセズ、租稅徵收ハ繼續事業トシテ其徵收シタル稅金ヲ固定資本ニ編入シ、凡テノ政費ヲ支辨スルハ孛國憲法ノ良制ナリ。而シテ日本モ亦之ニ倣ハレタルハ實ニ能智アル處置ト云ハザルヲ得ズ。此點ニ付テハ佛國ハ孛國ニ及バズ、佛國ニ於テハ總テ財政案ハ每

日本憲法ニ關スル「ルボン」氏ノ意見

年度議會ノ同意ヲ得ザル可カラズ。

憲法第六十四條ニアル如ク、豫算ノ條款節目ノ中ニ單ニ條款ヲ止メテ節目ハ款節ノ說明ニ過ギズトシタルハ至極適當ノコトナリ。

憲法第六十九條ハ如何ト思フナリ。本條ニ依レバ豫備費ノ支出ハ豫算案ニ記揭セルモノニ對シテモ之ヲ爲スコトヲ得ルナリ。是レ政府ニ與フルニ非常ノ權ヲ以テシタルモノナリ。何トナレバ豫備費ノ性質ハ單ニ豫算案ニ揭ゲタル費目ノ不足ニ對シテ支出スベキモノナレバナリ。此ノ如キ制度ハ曾テ佛國ニ帝國ノ時代ニ於テ行ハレタルモ、弊害多キヲ以テ千八百六十一年ヨリ千八百六十二年ニ至リ之ヲ廢止シタル。帝國ノ時ニハ皇帝ハ勅令ヲ以テ豫備費ノ中ヨリ勝手ニ財政案以前ノ經費ヲ支出スルコトヲ得タリシガ、遂ニ其弊ヲ看破シ自カラ其權利ヲ制限シ、財政案以外ノ經費支出ヲ爲スコト能ハザルコトト爲シタリ。其理由ハ財政案以外ノ經費支出ヲ爲スコトヲ得ルノ權利ハ、一見政府ノ爲メ甚ダ便利ナルガ如シト雖ドモ、各大臣ヨリ其支出ヲ請求スルコト屢之アリテ、大藏大臣ハ抗拒スルコト能ハズ、遂ニ經費ノ支出ニ堪ヘザルニ至ルノ患アレバナリ。何トナレバ若シ政府此ノ如キ權利アルトキハ、各省大臣ハ各其事務ノ改良ヲ計畫シ、其事業ノ宏大ナランコトヲ欲スルガ故ニ、種々ノ口實ヲ設ケテ經費ノ支出ヲ請求スベシ其時ニ當リ、大藏大臣タル者ハ實際之ヲ斷ル譯ニ行カザルヲ以テ、何トカ工夫ヲ運シ、之ガ支

出ヲ爲スベシ。之ヨリシテ政府ハ遂ニ經費ノ增加ニ堪ヘザルニ至ルベキヲ以テナリ。

余ハ憲法中ニ第七十條ノ如キ規定ヲ揭グルハ甚ダ不得策ナリト信ゼリ。何トナレバ假令是條項ナキモ政府ハ必要緊急ノ場合ニ當リテハ是處分ヲ爲スコトヲ得ルモノナレバナリ。且ツ已ニ固定資本モアリ、徵稅繼續ノ方法モアレバ、別ニ此條ヲ設ケザルモ可ナルガ如シ。是レ全ク過重ノ權力ヲ政府ニ與フルモノナリ。此ク如ク政府ニシテ良心ニ基キ此財政處分ヲ爲サバ可ナリト雖ドモ、若シ不良ノ精神ヲ以テ不正ノ處分ヲ爲サバ後日議會ノ承認ヲ受クルモ事已ニ既往ニ屬シ、毫モ其効力ヲ觀ザルベシ。然ルニ今之ヲ憲法中ニ明記スルトキハ、皇帝ノ特權ヲ濫用シ屢此ノ如キ勅令ヲ發スルニ至ルベシ。且議會ノ同意ヲ得難シト思意スルモノハ之ヲ議會閉會後ニ勅令ヲ以テ發スルノ弊害モ亦從テ生ズベシ。余ハ故ニ本條ヲ一ノ危險ナル條文ト爲スナリ。

右ニテ余ガ憲法ヲ一見シタル所ノ概評トス。余ハ此憲法ヲ以テ精巧ナル編纂ナリト思フナリ。

選擧法等ニ關スル「ルボン」氏ノ意見

次ニ選擧法ニ付キ一言スベシ。本法ニ依レバ被選人ニ付スルニ納稅地制限ヲ以テシタルハ余ノ理會セザル所ナリ。佛國ニ於テハ毫モ此ノ如キ制限ナシ。唯地方議會ノ議員タルベキ被選人ニハ是類ノ制限アレドモ、是レ一地方ノ利害ヲ討議スル者ナレバナリ。一國ノ利害ヲ討議スル

日本憲法ニ關スル「ルボン」氏ノ意見

國會議員トハ大ニ異ナル所ナリ。

選擧會場ニ於テハ何故ニ官吏ノ面前ニ於テ選擧人ヲシテ其姓名ヲ自記セシムルガ如キ公ノ投票ヲ用ヒシヤ。勿論只今貴下ノ說明ノ如ク日本ニ於テハ官吏ハ正直ニシテ選擧人ヲ脅迫誘引スルノ弊ナシトアレバ此方法モ宜シカルベシト雖ドモ、英國ノ如キ選擧人ニ對スル官吏ノ勢力アル國ニ於テハ、官吏ノ選擧人ニ對スル弊害ノ屢生ズルヲ以テ此ノ如キ方法ヲ用ユルハ宜敷カラザルガ如シ。

議院法ニ依レバ衆議院議長ノ選擧ハ純然タル議院ノ選擧ニアラズ。佛國ニ於テモ此ノ如キ連名選擧法ヲ取リシコトアリシガ到底其効能ナキヲ發見セリ。何トナレバ三人ノ候補者ヲ選擧シテ皇帝ヲシテ其中ヨリ一人ヲ選拔セシムルトキハ、議院ハ一人ノ信用アルモノト、二人ノ信用モナク議長タル技倆モナキ者トヲ併セテ選擧スルガ故ニ、勢ヒ皇帝ハ議院ノ指名スル一人ノ信用アル者ヲ選任セザルヲ得ズ。然ラバ則チ三人ノ中ヨリ適當ノ人物ヲ選擇スル立法者ノ精神ハ消滅スルモノナレバナリ。故ニ終ニ「ブルボン」時代ニ至リ、議長選任ハ之ヲ議院ニ一任シタリ、又日本ノ法律ニテハ官吏ニ被選人タルコトヲ許シ、而シテ其員數ニ制限ナケレバ之ガ爲メニ弊害ナキヤ否ヤ、伊太利ニ於テハ其人數ニ制限アリ、佛國ニ於テハ此人員ニ制限ナカリシガ爲メ、千八百四十七年及千八百四十八年ニ於テ官吏ハ總議員ノ過半ヲ占メタルコトアリシナリ

豫算案審査會ノ審査ヲ十五日ト規定シタルハ短キニ失セザル乎。此日限ニテハ委員會ハ政府ノ收稅主義ヲ討究シ、其收入ヲ計リテ其經費ニ付キ其應用ヲ研究スルコト能ハザルベシ。勿論現行ノ租稅法ニ依レバ繼續徵稅法ニシテ其總收入ヨリ全經費ニ對シ支出スル仕組ナレバ、別ニ毎年ノ研究ヲ要セザルベケレドモ、補充資本ニ付テハ徵租ト支出トヲ比較計算スルコト必要ナルベケレバナリ。

政府ガ議會ノ同意ヲ得ズシテ負債ヲ起スコト能ハザルハ最良制ニシテ余ノ贊成スル所ナリ。財政案ノ修正ニ付要スル所ノ同意者ノ員數ハ多キニ失セザル乎。

本法ニ依レバ一議員ハ一人ニテ議會ニ議案ヲ提出スルコト能ハズ。然レドモ人民ノ請願ノ取次トシテ議題ヲ議會ニ提出スルコトヲ得ルガ故ニ、若シ一議員ニシテ議案トセズ請願トシテ取次グトキハ其意見ヲ議會ニ提出スルコトヲ得ルナリ。

金子書記官ノ質問ニ對スル「ルボン」秘書官ノ答

金子書記官ト「ルボン」氏ノ問答

問　天皇ニ於テ外國ト締結シタル條約ノ正條ニシテ、憲法ノ明文ト相牴觸スルトキハ何レガ効力アルモノナルヤ。

答　日本ノ憲法ニ在テハ余ハ天皇ハ其條約ノ正條ヲ實行セザルベカラズト信ズ。何トナレバ天皇ハ憲法上條約締結ニ付テハ議會ノ同意ヲ要セザレバナリ。又外國政府ハ已ニ一國ヲ代表スル日本ノ天皇ト締結シタル以上ハ、其憲法ノ正條ニ矛盾スルヤ否ヤ、又内政ノ如何ニ關係スルヤ否ヤ等ニ顧慮スルニ及バズ。單ニ天皇ヨリ與ヘラレタル權利ヲ享有スルノ權アリ。而シテ憲法ノ矛盾及内政ノ如何ニ天皇ハ其大臣ト豫メ調察スベキ内國ノ政治ナリ。外國政府ノ與リ知ル所ニアラズ。現ニ第六十七條ノ註解ニアルガ如ク。外國條約ヨリ生ズル經費ハ議會ト雖ドモ之ヲ廢止削減スルコトヲ得ズトアリ。唯爰ニ一ノ疑點ハ其條約ニ依リ日本政府ニ於テ法律ノ制定ヲ約スルトキニ當リ、後日議會ニ其議案ヲ提出シタルトキ、議院之ヲ廢案トシタルトキハ如何ト云フニ在リ。此時ニ於テモ外國政府ハ條約ニ於テ得タル權利ヲ主唱スルナラン其時ハ日本政府ハ之ヲ如何處分スル乎後日ノ難題ナラン。故ニ日本ノ憲法ニテハ天皇ガ第十三條ニ依リ外國ト條約ヲ締結シ、其條約ニシテ憲法第五條ノ正文ニ牴觸スルモノナルトキハ、第五條ト第十三條トハ撞着スルコトヲ免レザルモノトス。之ニ反シ佛國ニ於テハ大統領ハ議會ノ同意ヲ得ルコトアリ、外國ト條約ヲ締結スル權限ナキガ故、若シ大統領ニシテ條約ヲ取締ルコトアルモ、議會ノ之ニ同意スルコトナケレバ、其條約ハ無効ノモノタルニ過ギザルナリ。

問　會計檢査院ト議會トノ關係如何。

答　佛國ニ於テハ議會ハ通常會計檢査院ノ報告ニ依リ、單ニ之ガ取調ヲ爲スニ過ギズト雖ドモ議會ハ猶ホ其上ニ調査ヲ爲スノ權限アリ。故ニ議會ノ議決ハ檢査院ノ判決ニ對シ、大臣ノ責任ヲ解免スルコトヲ得、故ニ議會ノ議決ヲ以テ終結トス。一般ニ通常ハ檢査院ハ出納官ガ果シテ法律規則ニ從ヒ又ハ支拂命令ニ依リ正當ナル支拂ヲ爲サシムルヤ否ヤヲ調査スルニ過ギズ、白耳義ニ於テモ然リトス。

佛國ニ於テハ大臣ガ不當ノ支拂若クハ消費ヲ爲シタル場合ニ付テハ、別ニ特別ノ制裁規則ナシ。實ニ此事件ハ現今ノ一疑問ナリトス。唯今日ニ在テハ簿記ノ整頓ト出納支拂方法ノ精細ナルアリテ、稍々之ガ擔保ヲ爲スニ過ギズ。

問　議會開設後天皇及皇族ノ國政ニ關スル關係ニ付キ貴下ノ意見如何。

答　余ハ單ニ一ノ外形上ノ裝飾タル國家ノ主領ニ過ギズト信ズルナリ。一般ニ論ズレバ皇帝ハ大臣ヨリ才能少ナケレバ到底政治ノ要務ハ之ヲ大臣ニ委任スルモノナリ。偶英邁ノ皇帝アルモ之ハ例外ナルガ故ニ、皇家ノ位置狀態ノ如何ハ事實上ノ疑ナルベシ。

皇帝ハ議會開設後ト雖モ外國政府ニ付テハ猶其意志ヲ用ユルコトヲ得ルモ、内國政略ニ付テハ遂ニ其喙ヲ容ルヽコト能ハザルベシ。

問　日本ノ上院ニ付キ貴下ノ意見如何。

答　日本ノ貴族ハ土地ヲ所有セザルガ故ニ、其特權ヲ享有スルコトヲ得ルヤ否ヤハ、結局貴族ガ日本社會ニ對スル德義上ノ位置ニ屬スルモノニシテ、余ハ英國ノ貴族ト均シキカ否ヤノ答ヲ爲スコト能ハズ。然レドモ此憲法ノ精神ニ依レバ貴族的ノ組織ニ付キ之ニ必要ナル特權ヲ與フルハ必要ナリト信ズ。

問　佛國ニ於テ兩院協議會ナルモノアル乎。

答　佛國ニハ之アリ。兩院其協議ノ調ハザル議案ニ付キ協議ノ爲メ特別委員ヲ選擧スルコトヲ得レドモ、余ガ入院以來八年間ニ一度協議會ヲ開キタリシコトアルモ纏ラズシテ止ミタリ。故ニ議案ニシテ兩院ノ協議調ハザルトキハ互ニ往復二時日ヲ費シ、終ニ議案ノ成立ヲ見ルコト能ハズ。故ニ今日ニ於テ佛國ニハ實際協議會ナシト謂可キナリ。

明治廿三年一月廿六日

法制局參事官　中橋德五郎筆記

シドウヰツク氏日本憲法私見

金子君足下

余ハ足下ニ別紙ノ蕪稿日本憲法私見ヲ呈ス、此ノ蕪稿ニシテ足下ノ參考ニ供スルニ足ラズトスルモ、余ハ敢テ之ヲ草スルガ爲ニ徒費セシ日子ヲ痛惜セザルベシ。何トナレバ余恩賜ノ二書ヲ精讀スルニ裨益スル所實ニ多キヲ覺エケレバナリ。

シドウヰツク拜

日本帝國憲法及伊藤伯義解ニ對スル私見

余ノ私見ヲシテ無用ナラシメンニハ必ズ評論ヲ加ヘザルベカラズ。卽チ其ノ私見ハ余ノ見解ヲ以テ憲法又ハ其義解ヲ修正スベキガ如ク見ユル所ノ點ヲ發揮セザルベカラズ。故ニ余ハ此等各條ノ評論ヲナサントスルニ當リ、先ヅ本書ノ示セル材能智略ニ關シ、及如何ニ西歐諸國ノ憲法及憲法論ヲ咀嚼融會セルカニ關シテ余ノ說ヲ略陳セントス。

余ノ觀ル所ヲ以テ誤謬ナシトスレバ、此ノ憲法ノ大目的ハ日本ノ古傳及現況ニ白耳義風ノ立憲主政體ヲ接合セントスルニ在リテ、全ク英吉利風ニ異レリ。

今日耳曼風ノ立憲君主政體ノ特性ヲ擧グレバ左ノ如シ。

第一　英吉利ニ於テ有スルガ如キ議會政治ヲ排シ、世襲帝王君臨並ニ統治シ、而シテ其ノ大臣ヲ任命シ、敢テ議會ニ多數ヲ制スル首領ヲ大臣トシテ登用スルコトヲナサズ。

第二　英國ニ於テ法律ノ普行ニ依リテ公民ニ與フル保護ハ重要ナル點ニ於テ制限セラレ、行政府ヲシテ大ニ獨立自由ノ處置ヲナスコトヲ得セシム。

然ルニ新法律ヲ發布シ、新租稅ヲ課シ、若クハ歳計豫算案ヲ以テ各種ノ歳出ニ歳入ヲ支給スルニ當リ、必ズ公民ノ定時ニ選擧スル議院ノ協贊ヲ經ルヲ要シ、以テ立法收稅上ニ輿衆ノ牽制ヲ加フルハ英吉利憲法ト與ニ日耳曼憲法ノ目的トスル所ナリ。之ニ加フルニ行政府ノ壓制束縛ニ對シ、司法上並ニ議會上ノ救濟ヲ與ヘテ以テ公民ヲ適當ニ保護スルモ亦其ノ目的トスル所ナリ。余ヲ以テ之ヲ視ルニ、此等ノ目的ハ又日本新憲法ノ大目的ナルガ如シ。

今之ヲ以テ大目的トスレバ余ハ概シテ第六十三條第六十七條第七十一條ノ如ク議會ノ歳計ニ對スル權力ニ重要ナル制限ヲ加フルヲ稱賛セザルヲ得ズ。何トナレバ此レ立憲君主政體ガ英吉利ニ存スルガ如キ議會政治ニ推移セントスルノ傾向ヲ防制スルニ必要ナレバナリ。余ハ又第八條第十條第十二條第十三條ノ如ク、議會ガ行政府ニ對スル立法權ニ制限ヲ加フルヲ同樣ノ理由ヲ以テ稱賛セザルヲ得ズ。余ハ此等ノ諸點ニ關シテハ唯全體ヲ通貫セル大目的ト相應スル小節目ノ修正ヲ勅告スベキノミ。

第一章

第四條乃至第六條　余第四條ヨリ第六條ニ至ルノ各條及其ノ義解ヲ讀ミ、立憲主義ノ意ニアラズシテ寧ロ君主專制ノ意ニ類スルノ文字アルヲ知ル。卽チ第四條ニ曰ク、天皇ハ統治權ヲ總攬スト、其ノ義解ニ曰ク、統治權ヲ總攬スルハ主權ノ體ナリト。又第五條ノ義解ニ曰ク、立法ハ天皇ノ大權ニ屬スト。然レドモ余ガ此ノ憲法ノ文字ヲ解スル所ヲ以テ見レバ、議會兩院ハ法律案ヲ提出スルコトヲ得ルガ故ニ、立法權ハ天皇ト兩院ト平分共有スル所ニシテ、新法律ヲ設ケンニハ兩院ノ協贊ハ天皇ノ認可ト共ニ必要トス。是ヲ以テ第六條ニ於テ我憲法組織ト拒否ノ權ノ組織トヲ區別スレバ、蓋シ空論タルヲ免レズ。姑ク其論ヲ然リトスルモ拒否ノ權ハ歐洲諸國行政府ガ明ニ保持スル法律案提起ノ權ヲ行政府ヨリ奪却スルモノナリト解スルニアラザレバ何ノ意ナルコトヲ解スベカラザルナリ。余ノ聞ク所ニ據レバ、日耳曼ノ國法學者ハ文字ト事實トノ間ニ、之レト同樣ノ區別ヲ立テ、以テ自ラ喜ブト云フ。余ハ常ニ以爲ク、是レ實ニ彼等ノ

缺點ナリト。

余ハ第四章ノ初メニ用キラレシ或文字ニ同樣ノ評論ヲ下スベシ。

第七條　余ハ第七條ニ於テハ（原本缺字）ト欲ス。第四十二條第四十五條ヲ以テ天皇ノ議會閉會ノ權ヲ制限スル所アラント欲セバ「議會ハ衆議院開散ノ外三ケ月間繼續スベシ。若シ三ケ月以前ニ解散スルトキハ、解散ノ日ヨリ五ケ月以內ニ再ビ開會スベシ」ト云ヘルガ如キ數句ヲ玆ニ加ヘ、其制限ヲ明カニスルノ更ニ宜キニ若カザルナリ。

第八條乃至第九條　余ノ說ヲ以テスレバ、此ノ二條ニ於テ定メラレシ勅令發布ノ權ハ、政府ノ威力ヲ損セズ、而シテ更ニ之ヲ制限シ以テ臣民ニ一層ノ安全ヲ與フルニ若カザルガ如シ。

第八條第九條　此二條ニ定メラレタル勅令命令ヲ發スルノ權ハ、余ノ見ル所ヲ以テスレバ臣民ニ更ニ大ナル保障ヲ與フル爲メニ、更ニ制限ヲ加ヘ而シテ政府ノ實行力ヲ害セザルコトヲ得ルナリ。

第八條　余ハ緊急ノ勅令ヲ發スルノ權ヲ憲法ニ於テ明ニ認メラレシヲ喜ブ。（法律ヲ破リテ以テ緊急ニ應ジ、後宥罪條令ヲ以テ之ヲ回復スル英國ノ方法ハ余ノ取ラザル所ナリ）然レドモ此ノ如キ勅令ニシテ現行法律又ハ憲法ノ條規ニ牴觸スルトキハ一刻モ速ニ議會ノ議ニ附セザルベカラズ。然ラザレバ行政府ガ法律ニ代ルベキ無限ノ權ヲ有スル時ノ長キコト驚クベキニ至ラン。

故ニ政府ニシテ法律ニ代ルベキ緊急ノ勅令ヲ發セシトキハ、一刻モ速ニ議會ヲ招集スルヲ以テ政府ノ義務トナスベシ。

第九條　法律ノ範圍內ニ於テ發セシ命令ハ現行法律及憲法ノ條規ノ明ニ公民ノ自由ヲ保護スル限ニ於テハ之ニ抑制ヲ加フルコト能ハズ。然レドモ此ノ如キ明文ノ保護ハ常ニ充分ナリトナスベキカ未ダ知ルベカラズ。實ニ此ノ憲法ノ第二章ヲ以テ與ヘラレシ保護ハ、行政權ヲ以テ之ヲ破ルノ餘地ヲ存スルヤ明ナリ。此章ノ各條從來政府ノ關涉セシ重要ノ點ニ於テ、明カニ自由ヲ保護セザルニアラズ。卽チ信敎ノ自由、言論著作集會結社ノ自由、居住移轉ノ自由ノ如キ是レナリ。

然レドモ此等ハ以テ自由ノ全體ヲ保護スルニ足ラザルナリ。今一例ヲ擧ゲンニ、政府一般臣民ニ令シテ日沒後特別ノ許可ナクシテ戶外ニ出ヅルコトヲ禁ズルト假定センカ、罪惡ヲ防グノ旨ニ於テ大ニ嘉スベシト雖モ、其自由ヲ妨害スルヤ大ナリ。然レドモ第二章ノ條規ニ一モ牴觸スル所ナシ。故ニ余ハ其ノ命令ト禁止トヲ問ハズ、苟モ一般臣民若クハ官吏以外ノ人ニ義務ヲ課スル所ノ命令ハ議會ノ集會スルニ當リ、之ヲ承諾セザルトキハ其効力ヲ失フトナスノ優レルニ若カザルヲ見ルナリ。但シ或現行法律ノ規定ニ一致スルモノハ此ノ限ニアラズ。

第十條乃至第十二條　官制及ビ軍制ハ如何ナル點ニ至ルマデ議會ノ牽制ヲ免ルヽヤハ充分明

瞭ナラズ。第十二條ノ義解ニ曰ク、陸海軍ノ編制及常備兵額ハ議會ノ干渉ヲ須タザルベキナリト。然レドモ第六十七條ノ義解ニ據ルニ、新置及增置ノ歲出ハ仍議會ニ於テ論議ノ自由ヲ有スルナリ。而シテ政府ノ同意ヲ經ルトキハ既定ノ歲出ト雖モ仍省略修正スルコトヲ得ベキナリ。是ヲ以テ余ノ考フル所ニ據レバ、之ニ關スル議會ノ論議ハ素ヨリ會計ノ點ヨリ着眼セザルベカラズト雖モ、又官制若クハ軍制ノ或ル部分ノ利害得失ニ關シテ論議ノ自由ヲ與ヘラレザルベカラズ。果シテ然ラバ第十二條ノ義解ノ文字ハ過當ノ力ヲ有スルニ似タリ。

且ツ余ハ議會ノ實權ハ如何ナル點ニマデ達スルヤヲ審ニセズ。試ニ問ハン、政府常備兵額若クハ文武官ノ俸給ヲ增加シ、議會此ノ增額ニ反對シタレドモ、天皇之ニ從フコトヲ嫌ハバ則チ如何。此時ニ當リ議會ハ此ノ增額ノ爲ニ基金ヲ供スルコトヲ拒ムノ實權ヲ有スルカ。第六十七條ニ依レバ之ヲ拒ムニ法律上ノ權ヲ有セリ。然レドモ第十條及第十二條ハ其實權ヲ疑似ノ間ニ沒却スルナリ。

文武官ノ任免ハ天皇ノ欲スル所ノマヽニシテ、文武官品行ノ良否ニ依ラズトスルハ第十條ノ規定スル所ナリ。此レ行政府ノ憲法違犯ノ行爲ヲ防グ所以ニアラズシテ或日耳曼學者ノ取ラザル所ナリ。蓋シ日耳曼ノ制度ニ據レバ、文武官ハ司法上ノ手續ヲ經ズシテ其ノ祿（官職ニ付給スル年俸等トハ別ナリ）ヲ奪ハル、コトナシ。此レ長上ノ憲法違犯ノ命令ニ從フノ弊アルヲ防グ所以ナリ。而シテ憲法違犯ノ命令ニ從ハザルヲ以テ司法上ノ手續ヲ起スノ理由トナスコトヲ得ザルナリ。然レドモ日本憲法ノ如ク、文武官ハ長上ノ欲スル所ニ據リテ任免セラルヽトキハ、長上ノ憲法違犯ノ命令ト雖モ文武官ハ之ニ從ハザルヲ得ザルニ至ラン。

蓋シ英國ニ於テハ外面上任免ノ權ヲ以テ長上ノ欲スル所ニ委スト雖モ、實際ニ於テハ之ヲ免黜スルハ非行アルトキニ限ルナリ。

第十三條　余ハ一般ニ外交事務ニ關シテ議會ノ干渉ヲ除カザルヲ得ザルノ理アルコトヲ知レリ。然レドモ亦實ニ干渉セザルヲ得ザル二ノ場合アリ。此レ議會ヲシテ新稅賦課ヲ承認セシムルノ制ヲ取ルトキハ實ニ避クベカラザル者ナリ。卽チ左ノ如シ。

第一　國家ニ金錢上ノ義務ヲ負ハシムル所ノ條約ヲ締結スル場合

第二　戰爭ノ場合

第一ニ關シテハ第六十二條ニ依ルニ、議會ハ之ニ要スル新支出ヲ拒ムコトヲ得ベシ。若シ議會ヲシテ實ニ之ヲ爲スノ自由ヲ有セシメザルベカラズトナサバ、第十三條ニ於テ明カニ此種ノ條約ヲ有効ナラシメムニハ、議會ノ協贊ヲ經ベシト記載スルノ更ニ滿足ナルニ若カザルナリ。戰爭ニ關シテモ亦然リ。議會ノ協贊ハ戰費ヲ得ルニ憲法上必要ナルヲ以テ、政府ヲシテ宣戰ニ關シ議會ノ干涉ヲ免レシムルモ、之ガ爲ニ得ル所ハ幾何モナカルベシ。故ニ宣戰ノ前ニ議會ノ

協賛ヲ經ルノ途アラザル場合ノ外ハ其協賛ヲ經ベシトスルノ更ニ可ナルヲ見ルナリ。

第二章

義務　各種ノ義務ヲ歴擧シテ以テ遺漏ナカラシムルハ至難ノ事ト謂フベシ、法律及勅令ヲ遵奉スルノ義務ト云ハバ簡單ナレドモ、其ノ中ニ含ム所ノ各種ノ義務ハ如何ニ複雜夥多アルヤ知ルベカラザルナリ。此ノ章ニ於テ唯政府ノ爲ニ卽チ（他ノ私人ニ對スル一切ノ義務ヲ除キ）政府ヲシテ其ノ職掌ヲ竭サシムルガ爲ニ課セラレタル義務ヲノミ記載セラレタルモノナルベシ。思フニ第二十條及第二十一條ニ揭グラレシ義務ハ洵ニ重要ナラズト謂フベカラズ。然レドモ他ニ猶必要ニ際シ裁判所ニ出現シテ證人トナルノ義務及場合ノ起ルニ從ヒ、罪惡ノ發見鎭壓ニ盡力スルノ義務アリ。此等ハ豈ニ之ヲ揭グルノ要ナシト謂フベケンヤ。

權利　臣民ノ權利ヲ揭ゲタルハ其政府ノ處置ニ制限ヲ措クニ足ルモノヽミヲ記載セラレタルモノナルベシ（而シテ（第一）他ノ私人ノ侵犯ニ對シテ政府ノ保持スベキ權利（第二）代議士ヲ選出スル權利ノ如キ政府ノ組織ニ影響ヲ及ボスノ權利ヲ省ケリ）政府ヲシテ不當ニ一個人ノ自由ヲ侵犯セシメザル所ノ各種ノ權利ヲ歴擧シテ遺漏ナカラシムルノ至難アルコトハ既ニ余ノ述ベシ所ナリ。茲ニ歴擧セラレシ者ハ皆歐洲ニ於テモ重要ナリト稱セラレザルハナシ。然レドモ商業若クハ職業ヲ行フノ自由ヲ以テ第二十二條ニ入ルヽコト能ハザルカ、告發ノ自由ヲ以テ第二十四條ニ入ルヽコト能ハザルカ、又文武官ニ任ゼラルヽ者ハ適當ノ人物ニシテ、法律上ノ資格ヲ有スベシトノ明文ヲ立テヽ以テ第十九條ヲ更ニ確固タラシムルコト能ハザルカ、且ツ如何ナル宗教ヲ信ズルモ文武官ニ任ゼラルヽニ妨ゲズトノ一句ヲ第二十八條ニ入ルヽコト能ハザルカ。

相當ノ賠償アルニアラザレバ法律ノ命ズル所ナリト雖モ、私有財產ヲ以テ公共ノ用ニ充テラルヽコトナシトノ旨ヲ憲法中ニ明記セバ、第二十七條ノ保證ヲシテ更ニ效力アラシメザルナルベシ。

第三章

第三章序論中ノ或文字ハ余遂ニ之ヲ通解スルコト能ハズ。夫レ議會ハ立法ニ參與シテ其ノ協賛ハ法律ヲシテ效力ヲ有セシムルニ必要ナリ。又第七十三條ヲ以テ之ヲ觀ルニ、議會ニ立法ニ參與スル權ヲ與フル憲法ハ、天皇ノ欲スル所ニ從ヒテ之ヲ撤去スルコト能ハズ。然レバ則チ議會ハ主權ヲ分ツ者ニアラズト謂フコト能ハザルベシ。且ツ此等ノ文字ト後ニ權力ノ偏重ヲ制シ立法行政ノ際調和平衡シテト云ヘル文字トハ如何ニ調和スベキカ、余之ヲ知ラザルナリ。

第三十三條乃至第三十四條　憲法制度中外國人ノ評論シ難キモノ貴族院即チ上院ノ採否如何ニ若クナシ。何トナレバ或國ノ或時ニ存スル所ノ思想感情ノ如何ニ屬スルモノ、憲法中之ニ若クナケレバナリ。故ニ余ハ日本貴族院ノ制度ニ關シ敢テ說ヲ述ベザルベシ。然レドモ余ノ唯一言セント欲スルハ、義解ノ第三十三條及第三十四條ノ議論中相異レル二問題ヲ含メルコトナリ。(第一)第二院ヲ設クルハ一院ニ於テ一時感情ノ激昂ヨリ生ズル弊害ヲ制シ又ハ私利ヲ防グニ在ルカ。(第二)世襲ノ爵ハ貴族院ノ議員トナルベキ資格又ハ資格ノ一トナスニ足ルベキガ爲メカ。第一問題ニ關シテハ余ハ然リト答フベシ。然レドモ第十九條ノ規定ヲ以テ憲法ノ主義トナセル國ニ於テ、世襲ノ爵ヲ以テ立法官選擇ノ標準トナスニ至リテハ余ノ解セザル所ナリ。何トナレバ門地品流ハ一般ニ文武官ニ任ゼラルヽニ足ラズトセバ何ヲ以テ立法官ニ任ゼラルヽニ足ルカ。

第三十七條　余ノ考フル所ニ依レバ、第一章ノ各條特ニ第十條第十二條第十三條ハ(原本缺)立法權ヲ制限センガ爲ニ設ケラレタルガ如シ。而シテ余ハ第三十七條ニ於テ此等ノ關係ヲ見ルナラント思ヘリ。余ハ日本憲法史ヲ以テ議會立法權ノ制限ヲ論斷スル果シテ如何シテ爲スベキヤヲ審ニセズ。蓋シ本條ハ義解ノ說ク所ニ從フニ、議會立法權ノ制限ヲ以テ曖昧糢糊ノ中ニ措ケルガ如シ。

第四十六條　第四十七條ニ記スル類ハ余ノ見解ヲ以テスルニ議會ヲ開クノ條件トシテハ多キニ過グルガ如シ。

第四十八條乃至第五十二條　既ニ兩議院ノ開議ヲ公開セバ、之ヲ報告スル所ノ新聞紙ニシテ苟モ其ノ報告ノ正確ナルトキハ、議員ノ如ク民事及刑事ノ責ヲ免ルベシ。但シ新聞紙ニシテ此ノ保護ヲ受ケシムルニハ或人ノ誤聞ヲ傳ヘンコトヲ恐レテ送付セシ記事ハ恰モ反對ナリト雖モ、必之ヲ紙上ニ揷入スルノ義務ヲ付セザルベカラズ。然レドモ此等ノ事ヲ以テ憲法中ノ一條トナスハ法律ヲ以テ之ヲ規定スルノ良キニ若カザルナリ。

第四章

第五十五條　余ハ本條ノ義解ニ用キラレシ政務上ノ責ト、刑事及民事ノ責トノ關係ヲ解スルコト能ハズ。

今余ノ意見ヲ明瞭ナラシメンガ爲ニ簡單ニ余ノ說ヲ述ブベシ。

凡ソ立憲國ニ於テハ各大臣及其ノ僚屬ハ其ノ職務ヲ執ルニ當リ、法律ノ下ニ立テリ。而シテ唯法律ノ定ムル範圍內ニ於テ便宜處分ヲ行フコトアルナリ。卽チ或ハ

(甲)正義及適宜ニ之ヲ行ヘバ之ニ對スル訴訟ノ起ルコトナシ。或ハ

(乙)正義ナシトモ適宜ニ之ヲ行ハズ

(丙)正義ニ之ヲ行ハズ

然レドモ亦(丁)法律ノ定ムル範圍ヲ超エテ臣民ノ法律上ノ權利ヲ破ルコトアリ。今(丁)ノ場合ニ於テハ秩序ノ整頓シタル國ニ於テハ常ニ民事上ノ賠償アリ。若シ此ノ場合ニシテ重大ナルトキハ刑ニ處セラレザルベカラズ。是ニ於テ民事及刑事ノ責アリ。(丙)ノ場合ニ於テモ亦正義ニ職務ヲ執ラザルバ刑ニ服スベシ。此等ノ兩場合ニ於テハ其ノ普通裁判所ニ於テ之ヲ行フト、或ハ大臣ノ場合ニ於テハ議會ニ於テ之ヲ行フトヲ問ハズ、司法上ノ手續ヲ以テ之ヲ定メザルベカラズ。而シテ民事及刑事ノ責ヲ離レテ政務上ノ責ヲ生ズルハ唯(乙)ノ場合ノミ、此場合ニ於テ日本憲法ノ主義ニ基キテ、獨リ君主ニ對シ責任ヲ負フベシトスルハ余ハ義解ニ一致スベシ。何トナレバ議會ニ對シテ責任ヲ負フハ其ノ排除セント欲スル議會政治ヲ輸入スレバナリ。苟モ天皇ニシテ君臨スルト與ニ統治スルトキハ、大臣タル者ハ正義ニ職務ヲ行ヒ、及法律上憲法上ノ範圍ヲ超エザル限リ、唯天皇ニ對シテ責任ヲ有スベシ。然レドモ此ノ說ヲ以テ(丙)及(丁)ノ場合、卽チ法律ニ背キ正義ニ職務ヲ執ラザルノ責任ニ適用スルコト能ハズ。故ニ余ハ此ノ責任ヲ確定スル爲メニ、獨立裁判所ノ裁判手續ヲ規定セバ違法ニ對スル保證ヲ增スベシト考フ。蓋シ余ハ義解ノ云々スル所ヨリ第六十一條ノ所謂行政裁判所ナル者ハ大臣ノ犯セシ違法モ僚屬ノ

犯セシ違法ノ如ク之ヲ取扱フヤ否ヤヲ審ニセズ。若シ之ヲ取扱フトセバ第五十五條ノ義解ニ於テ更ニ之ヲ明白ナラシムベシ。且ツ第六十一條ニ法律ノ定ムル範圍內ノ職權ヲ不正ニ濫用セシ者ヲ罰スルノ規定ナキハ何ゾヤ。

第五十六條　義解ニ曰ク、緊急命令ノ發布ニ當リ之ヲ樞密顧問ニ諮詢シテ而シテ後ニ決行スト、又曰ク凡ソ勅令ニシテ顧問ノ議ヲ經ル者ハ其ノ上諭ニ於テ之ヲ宣言スト、然レドモ余ハ此等ノ諸則ハ憲法上束制ノ力アルコトヲ信ズルコト能ハズ。若シ果シテ其力アラシメンニハ、第八條若クハ本條ニ於テ多少ノ文字ナカルベカラズ。蓋シ此ノ義解ハ唯政府今日ノ慣行ヲ示セシニ過ギズシテ、後來變更スルコトアルモ知ルベカラザルモノナラン。果シテ然ラバ樞密顧問ヲ以テ憲法上至高ノ輔翼タリト稱スルハ過當ナルガ如シ。

若シ樞密顧問ニ諮詢シテ其ノ意見ニ從ハザルガ如キコトアラバ、之ニ諮詢シタレドモ其ノ意見ニ從ハザル旨ヲ宣言スベキカ。思フニ樞密顧問ノ意見ヲ祕スルハ至難ナルベシ。余ハ素ヨリ此ニ定メラレシ規則ニ反對セント欲スル者ニアラズ。何トナレバ樞密顧問ニ諮詢スルハ輕忽不正ノ命令ヲ防止スルニ與リテ力アレバナリ、然レドモ樞密顧問ノ發布セザランコトヲ欲スル命令ニシテ發布セラル、ナラバ、之ニ諮詢スルト否トハ其命令ヲ輕重スルニ足ラザルナリ。

第五章

余ハ本章ニ於テ評論セント欲スル所少シ。

第六十一條ノ英國憲法論及其ノ慣行ニ同ジカラザルハ敢テ喋々スルヲ要セズ。蓋シ英國ノ慣行ハ官吏ノ違法處分ヲ以テ通常裁判所ノ權内ニ委セリ。然レドモ歐魯巴ノ學者中ニモ行政裁判所ヲ稱贊スル者アリ。故ニ余ハ敢テ之ニ反對スルコトヲナサヾルベシ。唯裁判所ノ組織ヲシテ行政權ノ左右スル所トナラザラシメンコトヲ欲スルノミ。

然ルニ義解ノ議論中余ノ解スル能ハザル者アリ。曰ク若シ行政權ノ處置ニシテ司法權ノ監督ヲ受ケ、裁判所ヨシテ行政ノ當否ヲ判定取捨スルノ任ニ居ラシメバ、則チ行政官ハ正ニ司法官ニ隷屬スル者タルコトヲ免レズト。然レドモ行政權ノ處置ニシテ法律ノ許ス限リハ司法權ト雖トモ敢テ其ノ處置ニ干渉スルコトヲナサンヤ、但特別裁判所ハ法律ガ行政權ノ使用者ヲ監督スル限リ、其條項ヲ解釋スルコトヲ得レドモ、通常裁判所ノ判事ハ此ノ如キ權力ヲ有セザルコト往々之ナシト云フベカラズ。

第六章

余ハ既ニ本章ノ掲グル憲法上ノ組織ノ重要ナルコトニ一致スルノ意ヲ述ベタリ。何トナレバ此レ日本ノ新立憲君主政體ガ今日英國及他ノ歐洲諸國ニ行ハルヽ議會政治ニ推移セントスルヲ防グガ爲ナルコトヲ知レバナリ。蓋シ此ノ目的ヲ達センガ爲ニハ、英國議會ノ有スルガ如キ支給拒否ノ無限權ヲ排除セザルベカラズ。然レドモ議會ニ歳計監督ノ重要切實ナル職掌ヲ與ヘ、而シテ之ヲ爲サントスルハ實ニ至難ナリ。本章ニ於テ此ノ至難事ニ應ズルノ方法ハ大ニ善良ナリト謂フベシ。憲法及義解ノ他ノ部分ニ於ケルガ如ク、玆ニモ亦西歐諸國ノ多年經驗セシ結果ヲ能ク咀嚼融會セシ跡アリ。此レ歐洲人ノ歎稱セザルヲ得ザル所ナリ。然レドモ第六十三條第六十七條第八十一條及第一章ノ第十條第十二條ニ於テ行政府ヲ獨立セシメンガ爲ニ議會ノ歳計監督ヲ制限スル組織ノ結果ヲ正當ニ解釋スルトキハ、一ノ反對說アリテ起ラザルヲ得ズ。卽チ政府ヲシテ議會ト紛議ヲ生ズルニ當リ、困難ヲ感ゼザランガ爲ニ、其ノ實際必要ナルヨリ多額ノ官廳費陸海軍費及之ニ應ズル租稅ヲ徴收セシムルノ傾向ヲ生ズルコト是レナリトス。

今政府ニ於テ兵威ヲ張ランガ爲メニ軍制ヲ改正シ、從ヒテ增額ノ歳出ヲ要スト假定センニ、第十二條ニ依ルニ陸海軍ノ編制ハ議會ノ干渉スルコト能ハザル所ナリ。然レドモ歳出ノ新置增額ニ至リテハ素ヨリ議會ノ協贊ヲ要ス。是ニ於テ議會之ニ贊同セズト假定セヨ。政府ニシテ陸海軍費或ハ官廳費中他種ノ費額ヲ減シテ以テ必要ノ基金ヲ供フルコトヲ得バ、憲法ニ違犯セズ

シテ猶能ク此ノ改正ヲ爲スコトヲ得ベシ。思フニ然ルトキハ議會ニ於テ必ズ既ニ議決セシ歳計豫算ニ違フコトヲ承認セザルベシ。然レドモ余ヲ以テ之ヲ觀ルニ、大臣議會ノ協賛ヲ得ズシテ此ノ改正ヲ爲スヲ以テ憲法上ノ義務ヲ破リシ者ナリト謂フベカラズ。何トナレバ第十二條ニ於テ明ニ議會ハ陸海軍ノ編制ニ干渉スベカラザルコトヲ規定シ、且ツ義解ニ於テ大臣ノ職務ハ獨リ豫算ニ關スル議會ノ協賛ニ依リ指定セラルヽノミニアラザル旨ヲ示セバナリ。故ニ苟モ他ヲ滅ジテ以テ基金ヲ供フルコトヲ得バ、議會ノ贊同セザルニ拘ラズ、憲法ニ違犯セズシテ此ノ改正ヲ斷行スルナルベシ。而シテ此ノ自由獨立ナル處置ヲ行ハンガ爲ニ一般ノ歳出ヲ多額ニ見積リ、以テ融通ノ便ニ供スルハ必然ノ結果ナリトス。

余ハ此ノ點ニ於テ憲法ヲ誤解セルヤモ測ルベカラズ。然レドモ果シテ然リトスレバ第十條第十二條第六十四條ノ關係ヲ、第六十四條ノ義解ニ於テ更ニ分明ニ指示センコト余ノ望ム所ナリ。

第六十二條　議會ヲシテ行政上ノ手數料ニ容喙セシメザルハ既ニ論ゼシ所ト聯關シテ反對說ノ生ズルコトヲ免レズ。何トナレバ此等ノ手數料ハ政府ノ專權ヲ有スル事務ニ對シテ上納スル者ニシテ、政府ノ基金ヲ要スルニ當リ社會ノ利害如何ヲ顧ミズ、多額ノ手數料ヲ取ラントスルコトナキニシモアラザレバナリ。故ニ或ル場合ニ於テハ手數料ヲ要スル政府ノ事業ニ議會ノ干渉シテ以テ之ガ法律ヲ定ムルノ便宜ナルコトアルベシ。勿論憲法ノ意議會ヲシテ此權ヲ有セシムルニ在ルヤモ知ルベカラズ。然レドモ第三十七條及第六十三條ヲ對照スルニ憲法ノ果シテ之ヲ許スヤ否ヤ明ナラズ。（此レ議會立法權ノ漠然タル處ニシテ余ノ既ニ第三十七條ニ就テ指示セシ所ナリ）

アイ・ブライス氏
日本憲法私見

金子君足下

余ハ足下ニ對シテ日本ノ憲法ニ關スル拙稿一篇ヲ送レリ。然レドモ余ハ敢テ一般政府ノ組織ヲ評價セント試ミタルモノニアラズ。唯々後來疑問ノ起リ得ベキ要點ヲ摘示シタルニ過ギザルノミ。要スルニ日本ノ憲法中ニハ歎稱スベキ箇條甚ダ多シ。誰カ之ヲ見テ起草者ノ判斷ト注意ノ密ナルニ驚カザルモノアラン。恐懼再拜

千八百九十年四月五日

アイ・ブライス

日本ノ憲法ハ多クハ考察ト注意トヲ以テ起草セラレタルモノト思ハル、就中其條章ノ簡約ニシテ詳細ノ規定ヲ避ケタルハ起草者ノ深ク注意セシ所ナルベシ。日本ノ近世史及ビ現行ニ於ケル政治上ノ事情ヲ詳ニセザル外國人ハ、其規定ノ主意ニ就テ意見ヲ立テ易カラズト雖モ、其大體就中其著大ノ權力ヲ天皇ノ掌握ニ歸セシメタルコト、及ビ其行政府ヲシテ立法府ト分立セシメタルガ如キハ、憲法政治ノ新ニ創設セラレタル同國ノ事情ニ最モ能ク適合シタルモノト謂ハザルベカラズ。英國ノ所謂內閣政治ニ於テハ下院ノ輿望ヲ得タルモノヲ以テ國務大臣トナスト雖モ、久シク王權政治ノ下ニ支配セラレタル國民ヲシテ、俄カニ此ノ如キ政體ヲ採用セシムルハ寧ロ稍々王權政治ノ傾キアル政體ヲ採用セシムルノ優レルニ若カザルガ如シ。（希臘及ビ白耳義ノ如キ自由政體ノ創立日尙ホ淺キ國柄ニ於テモ亦內閣政治ノ見事ニ行ハレタル例ナキニアラザルモ）故ニ余ハ日本ノ皇帝ガ陸海軍統帥ノ權ト共ニ、文務上英吉利又ハ合衆國ノ統治者ヨリモ多クノ命令發布權ヲ自ラ掌握シタルコトハ誠ニ至當ノ識見ナリト思惟ス。

左ノ各條ニ關スル愚見ハ後來憲法問題ノ起リ得ベキ要點ヲ指示シ、且ツ其條項ノ英國ノ理想及ビ慣行ト共ニ背馳スルモノヲ注意センガ爲ニ述ベタルモノナリ。敢テ其條項ノ正シカラザルコトヲ論辯スルノ意ニアラザルナリ。

第八條　余ノ觀ル所ヲ以テスレバ、本條ノ主眼トスル所ハ其所謂勅令ナルモノヲ以テスレバ如何ニ明確ナル法律タルトモ之ヲ停止スルコトヲ得ルト云フニ在ルガ如シ。是レ其所謂勅令ト第九條ノ所謂命令ト異ナル所ナリ。今之ヲ極論スレバ本條ノ所謂勅令ナルモノハ議會ニ於テ若

シ之ヲ承認セザル場合ニ於テモ、其之ヲ承諾セザルコトヲ議決スル前ニ此勅令ニ依リ働キタルモノハ十分ニ之ヲ保護スルノ効力ヲ有スルナラン。但シ此勅令ハ假令憲法矛盾ノ場合ニ於テモ亦之ヲ有効ト認ムベキヤ否ヤ。

第九條　本條ノ所謂命令トハ本文及ビ註釋ニ如何ナル文言アルトモ、法律ノ規定外ニ在ル事件ニ關シテモ亦之ヲ發布スルコトヲ得ベキモノニシテ。單ニ特別法律ノ執行ニ關スル命令ニノミニ限レルニアラザルベシ。然レドモ若シ此ノ命令ヲ以テ定メタル事件ニ關シテ更ニ法律ノ發布セラルヽコトアラバ、此法律ト矛盾スベキ命令ハ盡ク廢止ニ歸セザルベカラザルコト、信ズ。

第十三條　本條ノ目的トスル所ハ議會ハ皇帝ニ對シ外交政略ニ關スル建議ヲ呈出スベカラズト云フニ在ル乎、外交政略ノ外交ニ關係アル場合、卽チ通商條約ニ於テモ議會ハ一切之ニ喙ヲ容ルベカラズト云フニ在ル乎。

第二十三條　余ハ本條ノ所謂法律トハ第八條ノ所謂勅令及ビ第九條ノ所謂命令ヲ含蓄スルモノト假定ス。

第二十八條乃至第二十九條　此二條ハ主義ノ公示トシテハ甚ダ貴重スベキモノナレドモ、其實用ノ如何ハ他ニ定メラルベキ法律ノ如何ニ依リテ大ニ異ナル所アルベシ。

第三十二條　余ノ觀ル所ニ依レハ本條ハ陸海軍人ニノミ適用スベキモノニシテ陸海軍ノ法令及ビ紀律ハ兵士ガ民人ノ私權ヲ害スルコトヲ許スト云フニハアラザルヘシ。

第三十三條　英國及ビ他ノ諸國ノ經驗ニ依レバ上院ハ公務ニ就テ尊敬ヲ受クベキ政治上ノ才能及ビ熱心ヲ現ハシタルモノヲ以テ之ヲ組織スルニアラザレバ到底下院ト相對シテ其勢力及ビ權力ヲ維持スルコト能ハザルニ至ルヲ常トス。日本ノ上院モ亦其議員ノ才能及ビ運動ノ如何ニ由リテ大ニ其價値ヲ增減スベキナリ故ニ余ハ其唯々貴族及ビ富豪ノ機關タラザルコトヲ希望ス

第三十七條　法律ハ或特別ノ事件ニ就テ命令ヲ發スルコトヲ防グコトヲ得ベキヤ、之ヲ再言スレバ法律ハ或ル特別ノ事件ニ就テハ如何ナル命令タリトモ之ヲ發スベカラズトノ事ヲ規定スルコトヲ得ベキヤ、本條及ビ他ノ條章ニ於テ定メラレタル命令ニ關スル規定ハ甚ダ適當ナルガ如クナレドモ、尙ホ命令ト法律ト互ニ矛盾スベキ場合アリテ數多ノ疑問ヲ生ズルノ恐レナキヲ得ズ。余ハ此ノ如キ疑問ハ裁判所ノ裁決ニ依リテ定メラルベキモノト假定ス。

第三十九條　本條ハ貴族院ニ於テ否決シタル議案ハ同會期中ニ於テ之ヲ代議員ニ呈出スルコトヲ得ズ、又衆議院ニ於テ否決シタル者モ亦然リトノ意ナリヤ、其義明了ヲ缺クニ似タリ。

第四十條　建議ニ關スル批評ハ本條ニモ適用スベキナリ。議會ヲシテ其建議ヲ再ビスルコトヲ得ザラシムルトキハ議會ノ權力ハ爲ニ著ク制限セラレザルベカラス。

第四十一條　天皇若シ議會ヲ召集セザル場合ニ於テハ如何ニスベキヤ、本條ニ之ヲ明示セザ

ルハ蓋シ國家ノ爲ニ甚ダ望マシカラザル事トナスガ爲メナラン。

第四十二條　皇帝ハ三箇月ヲ經過セザル前ニ議會ヲ停止スルコトヲ得ベキヤ否ヲ明示セザルハ如何。

第四十四條　本條ハ從來ノ經驗ニ由リテ可認セラレタルモノナリ。

第四十八條　政府ガ議會ノ多數ヲ制スルコトヲ得ザランコトヲ恐レテ祕密會ヲ開クコトヲ要求スルノ權ヲ政府ニ與ヘタルハ非常ノ權力ヲ與ヘタルモノナリ。英國及ビ亞米利加ノ議會ハ自ラ議會ノ主タルヲ以テ決シテ此ノ如キコトナシ。

第五十四條　本條ト選擧法第三章第九條トニ依ルトキハ、國務大臣ハ議員タルコトヲ得又表決スルコトヲ得ルモノヽ如シ。斯ル規定ハ之ヲ贊成スルニモ若干ノ口實アリ、又之ヲ非難スルニモ若干ノ口實アルベシト雖ドモ、英國及亞米利加ノ慣行ハ大ニ之ト異ナルモノアリ。

第五十五條　若シ余ノ解スル所ヲシテ正當ナラシメバ、國務大臣ハ獨リ天皇ニ對シテ責任ヲ有スルノミニテ國會ニ對シテハ如何ナル責任ヲモ有セザルガ如シ。之ヲ再言スレバ國務大臣ハ一議院又ハ兩議院ノ反對アルニ拘ラズ其職務ノ保持スルコトヲ得、議院ハ之ヲ彈劾スルコトヲ得ザルガ如シ。然レドモ余ハ議院ニ彈劾權ヲ與フルノ否ナルコトヲ見出スコト能ハズ、獨リ其否ナルコトヲ見出スコト能ハザルノミナラズ、天皇不幸ニシテ適當ナラザル政策ヲ行ハレタルトキ國民ノ怨望ヲ天皇ニ歸セズシテ之ヲ國務大臣ニ移スニ必要欠クベカラザル條件タルコトヲ信ズルモノナリ。

國務大臣若シ一私人ノ爲ニ尋常裁判所ニ訴ヘラレタルトキハ民事上又ハ刑事上其責ニ任ズルノ主意ナルヤ否。

第五十八條　本條ノ結果ハ明白ナル犯罪ノ證據アルニアラザレバ裁判官ノ權ヲ免ズルコトヲ得ザルコト、ナルベシ、是レ或ハ正當ノ事ナルベシト雖モ英國ニ於テハ品行ノ廉潔ナラサルカ又ハ心情ノ善良ナラザルトキハ假令刑事上ノ犯罪ナキモ其職ヲ免ズルコトヲ得ルナリ。

第五十九條　政治上ノ犯罪ヲ祕密裁判ニ附スルトキハ英國ニ於テ其貴重ナル國民ノ自由ヲ保障スルコト甚ダ薄弱ナリ

第六十一條　余ノ假定スルガ如クナレバ、本條ノ所謂行政裁判所ナルモノハ行政官ヲ以テ之ヲ組織スルナルベシ。果シテ然ラバ行政裁判所ハ勢ヒ行勢上行爲ヲ維持スルノ傾ナキコトヲ得ズ、若夫レ行政官ヲシテ尋常判事ノ判決ヲ受ケシムルコトヲ以テ甚ダ不可ナリトセバ、此兩者卽チ行政官ト司法官トノ間ニ立テル中間ノ方法ヲ以テ其極端ヲ避クルノ優レルニ若カズ。

第六十四條　本條ノ所謂議會ノ協贊トハ如何ナル意義ヲ有スルヤ、若シ其之ヲ否決シタルトキハ如何ナル結果スベキヤ、余之ヲ解スルコト能ハザルナリ。蓋シ起草者ハ特ニ此等ノ點ヲ漠

然タラシメタルモノナラン。

第六十三條乃至第七十一條　此各條ハ財政上英國ヨリモ多クノ權力ヲ政府ニ與ヘタルモノトス。但シ政府ヲシテ莫大ナル既定金額ヲ以テ常備兵ヲ置クコトヲ得シメザル限リハ之ヲ善良ナル規定ト謂ハザルベカラズ。

余ハ此他ノ點ニ於テ敢テ愚見ヲ述ベズ。何トナレバ他ノ要點ニ關シテハ「ケンブリッヂ」ノ「ヘンリー、シドウイク」氏ガ足下ニ送リタル論稿中既ニ十分ノ考察ヲ遂ゲタレバナリ。

アイ・ブライス

憲法條議

目錄

緒言
第一項　租稅徵收ノ權　三條
第二項　豫算決定ノ權　三條
第三項　決算認可ノ權　三條
第四項　國債募集ノ權　三條
第五項　地方財務ノ權　二條
附言

緒言

何等ノ法律規則タルヲ論ゼズ、自ラ一種ノ精神目的アリテ該法律規則中各章各條互ニ相統屬シ相貫聯シテ、而シテ後始メテ此一種ノ精神目的ノ投合點ニ應ズ。然ルヲ今玆建國ノ大體ヲ指定シ官民ノ權利ヲ規程スベキ根本律法中ニ於テ、單ニ財政ニ關係アル各章各條ノミヲ抽拔シテ之ガ審案草定ヲ試ムルガ如キハ實ニ至難中ノ至難ナル者ト云フベキナリ。故ニ本案草定ノ命ヲ奉ズルノ際ニ在テハ、憲法中立法行政司法等ノ諸大案ニ屬スル他ノ各章各條ハ胸中ニ一種ノ成案ヲ假定シ置キ、之ニ據テ以テ事ニ此ニ從フノ外他ニ方法アル事ナカルベシ。

前陳ノ趣向順序ニ由リ辛ウジテ玆ニ草定シ得タル者凡ソ五項、一ニ曰租稅徵收ノ權、二ニ曰豫算決定ノ權、三ニ曰決算認可ノ權、四ニ曰國債募集ノ權、五ニ曰地方財務ノ權

而シテ各項下ニ論列スル者之ヲ大別シテ四ト爲ス、該項ニ關スル本邦ノ沿革事歷ヲ按ズルニ徵スル者之ヲ參照ト云ヒ、其利害得失ヲ推窮スル者之ヲ論斷ト云ヒ、立案ノ餘意ヲ演繹スル者之ヲ備考ト云フ。

第一項　租稅徵收ノ權

〔歷史〕租稅ノ法記紀ニ散見スル者アリト雖ドモ、上古ノ制得テ審カニスベカラズ。其全豹ヲ見ルヲ得ベキ者ハ特リ田令賦役令ヲ以テ嚆矢ト爲ス。當時ノ制之ヲ隋唐ニ採リ、田ニ租アリ身ニ庸アリ、戶ニ調アルヲ法トシ、而シテ三稅各常率アル者トス。

中古武門政治ノ時ニ及ビ三稅ノ法漸ク其常度ヲ失ヒ、田租歲毎ニ其重キヲ加ヘ、連年兵事ノ爲ニ庸役頻繁、人民凋衰スル事甚シ。豐臣氏檢田ノ法ヲ行フニ及ビ田租又一層ノ重キヲ加ヘ、德川氏因循シテ之ヲ革メズ。

慶應四年王政古ニ復スルニ及デ朝議首トシテ一切人民無賃庸役ノ法ヲ廢シ、尋デ夫米庸役米等總テ庸役法ニ原因セル一切ノ小物成ヲ免ゼリ。此ヨリ後諸種ノ稅法年毎ニ改良ヲ加ヘ、明治六年ニ至リ地租改正法ヲ頒布シ、國民ヲシテ各自其所有地ノ面積實價所得等ヲ言ハシメ、政府之ガ檢査ヲ爲シテ以テ其價格ヲ定メ、地主各自ノ甘諾スルヲ待テ而シテ其百分ノ三ヲ徵シテ以テ地租ト爲ス。尋デ百分ノ二、五ニ革ム。此兩回改革ノ爲ニ地租ヲ減ズル事無慮一千百十四萬餘圓、同八年ニ至リ往古ノ調稅ヨリ轉化シ來リタル各般ノ雜種稅目二千餘種ヲ免除シ本邦中古以來租稅ノ面目始メテ一新スルヲ得タリ。

然リト雖モ、現行ノ稅法ハ悉ク定率不動ノ租稅ナルヲ以テ、其歲計豫算ヲ調理スルニ當テハ毎ニ量レ入爲レ出ノ舊套ヲ襲フヲ免ル、事能ハズ。之ヲ現行稅法ノ一大闕典トス。故ニ國會開設前ニ於テ家屋稅若クハ所得稅ヲ起シ、年々歲出額ノ消長增加減ニ隨テ其配當ノ稅率ヲ伸縮弛張スベキ一制度ヲ設クルハ蓋シ當今ノ急務ナルベシト信ズ。

而シテ本邦ノ沿革ニ於テハ租稅徵收ニ對シテ國民公權アルノ明文所見ナシ。只德川氏ノ時檢田檢見ノ兩法ニ於テ少シク人民ノ承諾ヲ要スル慣例アリタルガ如キ、地租改正法ニ於テ人民ノ甘諾ヲ待テ地價ヲ決定セシガ如キハ、暗然私權中ニ公權ヲ寓スル者アルニ似タリトス。

〔參照〕各國憲法中租稅ニ關スル人民ノ公權ハ大要一轍ニ出ルガ如シ。卽チ租稅ハ國會ノ議決ニ非ザレバ之ヲ徵收スルヲ得ズト云ヘル一主義是ナリ。今其一二ヲ擧レバ、

佛蘭西國（千八百三十年）憲法第四十條ニ曰、凡ソ租稅ハ兩院ニ於テ之ヲ承諾シ、國王之ヲ確定シタルノ後ニ非ザレバ之ヲ定メ及ビ收納スベカラズ。

普魯西國　憲法第百條ニ曰、國計表ニ記載シ若クハ別法ニ定メタルニ非ザルヨリハ租稅及ビ貢賦ヲ催スルヲ得ズ。

白耳義國　憲法第百十條ニ曰、國稅ハ法章ニ由ルニ非ザレバ定ムル事ヲ得ズ。

西班牙國　憲法第七十五條ニ曰、何レノ租稅若クハ入府稅ニテモ、歲計豫算表ノ法律若クハ其他ノ特別ノ法律ヲ以テ認許スルニ非ザレバ之ヲ賦課徵收スルヲ得ズ。

丁抹國　憲法第四十七條ニ曰、法律ノ力ニ由ルニ非ザレバ賦稅ヲ定メ或ハ變更シ及ビ之ヲ免除スルヲ得ズ。

又或ル國ニ於テハ租稅ニ關スル法律ノ効力ヲ有スル時限ヲ憲法上ニ於テ指定スル者アリ。

白耳義國　憲法第百十一條ニ曰、國稅ヲ定ムルノ法章ハ其力ヲ有スル事一年ニ限ル。

佛蘭西國（千八百三十年）憲法第四十一條ニ曰、地租ハ一年ノ爲ノミ之ヲ決議スベシ（同國ノ地稅ハ割賦稅ナルガ故ナリ）不直稅ハ數年ノ爲一度ニ之ヲ決議スルヲ得ベシ。

葡萄牙國　憲法第百三十七條ニ曰、國債ノ利子並ニ其還償ニ供備スベキ租稅ヲ除クノ外凡テ直稅ハ每歲國會ニ於テ規定スベシ。然レドモ該直稅ヲ廢止シ若クハ改正スルノ日ニ至ルマデハ舊ニ依テ之ヲ存置ス。

又或ル國ニ於テハ憲法頒布ニ際シテ現行スル所ノ租稅ハ、再ビ國會ノ承諾ヲ要セズ。之ヲ繼續徵收スルノ議ヲ憲法上ニ於テ明言スル者アリ。

普魯西國　憲法第百九條ニ曰、現行ノ租稅ハ舊ニ依テ收入スベシ。

又租稅ニ特免ナキノ議ヲ憲法上ニ於テ揭示スル者アリ。

普魯西國　憲法第百一條ニ曰租稅ニ付テ特免アル事ナシ現存セル凡テノ特免ハ之ヲ廢スベシ。

白耳義國　憲法第百十二條ニ曰租稅ニ就テ特免アル事ヲ得ズ。租稅ノ免除及ビ減分ハ法章ニ由ルニ非ザレバ設クル事ヲ得ズ。

荷蘭國　憲法第百七十二條ニ曰租稅ニ係リ苟モ特權ヲ與フル事ヲ得ズ。

〔論斷〕本項ニ於テ推窮ヲ要スベキ者ハ左ノ四點ニ歸着ス。

第一　租稅ヲ定ムルハ國會ノ承諾ヲ要スルヤ。

第二　現行租稅ハ舊ニ依テ徵收シ、更ニ國會ノ承諾ヲ要セザルヤ。

第三　租稅承諾ノ効用ハ之ヲ一年乃至數年ニ限ルベキヤ。

第四　租稅ニ於テ一切特免特許ヲ要セザルヤ。

第一　ニ租稅ヲ定ムルニ向テ國民即チ國會ニ承諾權ヲ與フルハ憲法政治ノ一大眼目ナルヲ以テ、之ガ爲ニハ政治上ニ巨多ノ障碍ヲ生ズベキノ虞ナキ能ハザルニモ拘ラズ、之ガ爲ニ國體上ニ於テ生ジ得ベキ巨多ノ善良結果ヲ目的トシテ斷然國民ニ此公權ヲ認與セザル可ラズ。

等二　ニ現行租稅ハ舊ニ依テ之ヲ徵收シ、更ニ國會ノ承諾ヲ要セザルベキナリ。蓋現行租稅ノ如キハ概ネ定率不動ノ稅法ニシテ、一國經濟ノ組織之ニ因テ成リ、百般ノ事業之ニ因テ其平準ヲ保ツ、今一朝之ヲ枚擧列擧シテ國會ノ議定ヲ要シ、若クハ其改革增減ヲ爲スガ如キハ實際決シテ行ヒ得可ラザルノミナラズ、一國ノ生產力ニ於テ蓋亦大害アルベキヲ以テナリ。（本條ノ明文ハ第二項豫算決定ノ權ノ下ニ揭グ）

第三　ニ租稅承諾ノ効用即チ租稅法章ノ効用ハ決シテ之ヲ一年乃至數年ニ限ラザルヲ可トス。稅法ヲ年々ニ改革スルガ爲ニ經濟上生產上ニ來ス所ノ利害、損害、損益、國家國民ノ富强進步ニ影響スル事實ニ僅少ナラザルベキヲ以テナリ。然レドモ上條歷史中ニ附言セル伸縮稅ノ如キ者ヲ起シタル時ハ、其配當率ノ增減スル每ニ、年々之ヲ國會ノ議定ニ付スル事猶佛國ノ地稅ニ於ルガ如クナルベキハ勿論ナリトス。（本條ノ明文ハ第二項豫算決定ノ權ノ下ニ揭グ）

第四　ニ租稅ニ於特免特許アル可ラザルハ道理上無論ナリト雖モ、憲法上ニ明示スル上ハ官有財產、國有財產、民有財產ノ區分權議及ビ租稅減免等ニ屬スル完全ノ法章ヲ決定シ、實際處分上ニ於テ彼此混雜葛藤アルヲ免レン事ヲ要ス。

以上ノ意見ヲ以テ租稅徵收ノ權ニ關スル憲法條項ヲ草案スル事左ノ如シ。

第　條　凡ソ租稅ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第　條　現行ノ租稅ハ舊ニ依テ徵收ス

第　條　租稅ハ特免アル事ナシ。

〔備考〕初條ハ國民ニ租稅承諾權ヲ與フル者ニシテ憲法中ニ缺ク可ラザルハ論斷第一項ニ之ヲ言フガ如シ。第二條ハ參照中ニ揭グル所ノ普魯西國憲法第百九條ノ精神ヲ用ユル者ニシテ、

此明條アルガ爲ニ普魯西政府ハ國會トノ紛議ニ方リ毎ニ其勝ヲ制スルヲ得タリト聞ク。本邦ノ如キニ在テモ之ヲ憲法ノ明文ニ揭グルハ益必要ノ條項ナラン。第三條ハ將來徵稅上ニ起ルベキ弊害ヲ防禦スル者ニシテ、憲法上ニ於テ缺クベカラザルベシト信ゼリ。

本案草定ニ付キ大藏省ニ於テ準備ヲ要スル者左ノ如シ。

第一　現行稅法中法律ニ屬スベキ者ト該法律制限以內ニ於テ設置セル閣令省令訓令等ニ屬スベキ者トノ區別ヲ明カニスル事

第二　官有財產國有財產等ノ區別ヲ明カニスル事。

第三　家屋稅所得稅等ノ內ニテ配當稅ノ一種ヲ起シ、年々歲出ノ增減ニ隨テ稅率ヲ伸縮スベキ制度ヲ立ツル事。

第四　租稅徵收法ヲ改良スル事。

第五　租稅減免蠲除ニ屬スル法律ヲ明カニスル事。

第六　國費ノ缺乏ヲ補フガ爲ニ新タニ租稅ヲ課シ、又ハ現行稅法中改正ヲ要スベキ者ハナルベク明治二十年乃至二十一年頃マデニ決行スルヲ欲スル事。

第七　直稅間稅ノ區分ヲ明カニスル事。

第二項　豫算決定ノ權

〔歷史〕歲計豫算ノ事令ニ所見ナシ、職員令主計寮頭ノ職掌中ニ支度國用勘勾用度ノ曰アリト雖ドモ、其方法得テ知ル可カラズ。德川氏ノ時ニ在テハ遠國奉行代官等開申スル所ノ御取箇帳ト稱スル者ヲ統計シテ、勘定奉行國費支辨ノ胸算ニ供スルノミ。各藩ノ如キモ概ネ此ノ如キニ過ギズ。其歲出ニ至テハ各官衙定額アリ、臨時費途ヲ除クノ外年々之ヲ變更スルコトナシ。

王政維新後モ明治四五年マデハ定額若クハ凡積ト稱シテ其概計ヲ定メ、國庫若クハ各廳ニ於テ逐次出納勾辨シタルノミ。歲計豫算ノ法未ダ一定ニ至ラズ。

明治六年大藏大輔井上馨、三等出仕澁澤榮一其職ヲ辭スルニ臨ミ、建議スル所アリ。政府ノ歲入ハ每ニ其歲出ヲ償フニ足ラズシテ年々巨額ノ負債ヲ增加スルノ意ヲ述ブ、政府參議大隈重信ヲ以テ大藏省事務總裁ニ任ジ、其實際ノ當否ヲ檢察具狀セシム。乃チ同年ノ歲入出見込會計表ヲ作リ、二氏建議ノ全ク臆測ニ出ルヲ辯駁シ、我政府ハ通年歲入歲出相償ハザルノ虞無キヲ明カニセリ、之ヲ我政府ノ歲計豫算世ニ出ルノ嚆矢ト爲ス。

同七年ニ至リ同年度ノ豫算會計表ヲ作リ、尋デ會計年度ヲ改正シ、從前一月一日ヨリ起テ十

二月卅一日ニ終ハルノ制ヲ改メ、甲年七月一日ヨリ乙年六月三十日マデノ一周年間ヲ以テ一會計年度ト定ム。爾後逐年科目ノ區分ト豫算ノ樣式トヲ改良シ、同十四年會計法ヲ頒布スルニ至テ歳計豫算ノ順序大ニ備ハル。

爾後又逐年之ガ改良進歩ヲ謀リ、明治十七年歳入出豫算條規ヲ頒布スルニ至リ、歳計豫算ノ法大ニ精詳明備スルヲ得タリ。同年再ビ從前ノ會計年度ヲ改正シ、英普等諸國ノ例ニ據リ甲年四月一日ヨリ乙年三月三十一日マデノ一周年間ヲ以テ一會計年度ト定ム。茲ニ於テ乎會計年度ト國稅ノ徵收期限ト相吻合シ、國庫現金ノ出納大ニ利便ヲ得、國庫證券ノ利子若干萬圓ヲ減ズルヲ得。

然レドモ以上ノ諸改良ハ後年一部ノ完全ナル會計組織法ヲ調理スベキ材料タルニ過ギザルヲ以テ、大藏省ニ於テハ直ニ委員ヲ命ジ會計上一切權利ノ由テ起ル所、責任ノ由テ終ル所ヲ規程スベキ會計組織法ノ立案ニ取掛レリ。

而シテ明治七年ヨリ同十八年ニ至ル十二年間ノ歳計豫算ハ大藏省ニ於テ之ヲ調理シ、太政官之ヲ裁定シ、太政大臣ノ名ヲ以テ之ヲ官院省使府縣ニ達シタルノミ。敢テ人民ニ公布スルコトナシ。明治十九年以後始メテ　勅令ヲ以テ之ヲ天下ニ公布シ、國民ヲシテ公然國家ノ歳計ヲ知ルコトヲ得セシムルニ至ル。

〔參照〕各國憲法中歳計豫算ニ關スル條項ノ一二ヲ擧レバ、獨逸帝國憲法第六十九條ニ曰、帝國ノ歳入出ハ毎年之ヲ見積リ、而シテ之ヲ豫算表ニ記載スベシ。此豫算表ハ其歳入ヲ費用スルノ前年ニ於テ此下ニ記載スル所ノ規則ニ循ヒ、議院ノ決議ヲ以テ之ヲ定ムベシ。

同　第七十一條ニ曰、帝國ノ諸入費ハ通例一年間ニ定ムベシ。然レドモ格別ノ場合ニ於テ一年ヨリ長キ時間ニ定ムルコトヲ得ベシ。

佛蘭西國（一千七百九十一年）憲法第百九十九條ニ曰、國債ノ仕拂及ビ國王ノ俸金ノ拂方ニ要スル金錢ハ孰レノ口實アルモ民選議院之ヲ承諾セザルヲ得ズ。又孰レノ時ト雖ドモ仕拂ヲ一時差停ムベカラズ。

同國（一千八百五十二年）憲法ヲ釋明更改セル元老院決定書第十二條ニ曰、經費ノ見積書ハ政府ノ各宰相局ニ於テ其入用ノ額ヲ章條ニ分チ之ヲ議院ニ出ズベシ。其見積書ハ政府ノ各宰相局毎ニ議院ニ於テ之ヲ決議スベシ。政府ノ各宰相局ノ爲許シタル經費ヲ流用スルハ參議院ニ於テ下シタル皇帝ノ勅書ヲ以テ定ムベシ。

又同上ノ法式ニ從ヲタル別段ノ勅書ヲ以テ其經費見積書中ノ一章ヲ他ノ一章ト換ルコトヲ許スベシ。

普魯西國　憲法第九十九條ニ曰、國ノ費額及ビ入額ハ必ズ豫ジメ國計表ニ記載スベシ國計表ハ必ズ每年之ヲ定ムベシ。

白耳義國　憲法第百十五條ニ曰、每年兩院ハ統計（前年度ノ歲入歲出）ノ法章ヲ決シ及ビ豫算（來年度ノ歲入歲出）ヲ評定ス。

政府一歲ノ出納ハ必ズ豫算表及ビ統計表ニ載スベシ。

瑞典國　憲法第五十八條ニ曰、尋常ノ集會每ニ國王ハ必ズ國會中會計ノ模樣ヲ書面ニ認メ、一切ノ出納公債等ヲ明記シ議院ニ差出スベシ。若シ外國ト條約ヲ取結ビタルガ爲ニ一定ノ金額ヲ仕拂フベキ時ハ、之ヲ前文ノ手續同樣ニ取計フベシ。

同　第五十九條ニ曰、若シ國用多端ニシテ定額ノ歲入ヲ以テ之ヲ支出ユルニ足ラザルトキハ、國王ハ國中會計ノ模樣ト其緩急ノ次第トヲ議院ニ差出スト同時ニ、租稅ヲ賦シテ之ヲ補足スベキ方法ヲ報知スベシ。

西班牙國　憲法第七十四條ニ曰、政府ハ每歲翌年ノ國費豫算ヲ概表及ビ國費ヲ支出スベキ方法ノ意見書ヲ國會ニ送致スベシ。且租稅ノ徵收及ビ其費用ノ報告書ヲ國會ニ併セ送リ以テ其檢查ト承認ヲ受クベシ。

同　增補律例第七條ニ曰、例年ノ歲計豫算表ニ付キ立法兩院ノ議相協ハザルトキハ前年ノ歲計豫算表ノ法ヲ準用スベシ。

同　第十五條ニ曰、政府ハ國會ノ開會ヨリ八日以內ニ前年ノ決算表及ビ翌年ノ豫算簿ヲ代議士院ニ下附スベシ。

葡萄牙國　憲法第百三十八條ニ曰、大藏卿ハ他省ノ卿ヨリ本省ノ支費豫算表ヲ交收シ、國會ノ集合スベキトキ每歲代議士院ニ國庫前年ノ出納總決算表及ビ明年ノ國費並ニ總租稅國入ノ總豫算表ヲ具送スベシ。

同　增補律例第十三條ニ曰、代議士院開設ノ日ヨリ十五日內ニ政府ハ明年ノ出納豫算表ヲ設議院ニ送付スベシ、及ビ其開設ノ日ヨリ一月內ニ前年ノ決算表ヲ亦之ニ送付スベシ。

荷蘭國　憲法第百十九條ニ曰、王國ノ出納豫算表ハ法律ヲ以テ定ム。

同　第百二十條ニ曰、歲計豫算ニ管スル法律ノ議案ハ連歲該豫算表ニ係ル前年ニ當リ國會ノ通常會ノ通常會期ヲ開キタル後卽時ニ國王ノ名ヲ以テ下院ニ送付ス。

同　第百二十一條ニ曰、歲計豫算表中支費ノ各章ヲ以テ或ハ一個ノ法案トナシ、或ハ數箇ノ法案ト爲ス法律ヲ以テ此章ヨリ彼章ニ支費ノ各章ニハ各省ニ管スル支費ヲ特記ス。

支費ヲ移易スルコトヲ許認スルヲ得。

丁抹國　憲法第四十九條ニ曰、豫算表ノ決定ニ由ルニ非ザレバ租稅ヲ賦スベカラズ。豫算表及

ビ格別ナル費額ノ決定書ニ由ルニ非ズシテ國財ヲ使用スルコトヲ得ズ。又或ル國ニ於テハ國庫豫備ニ類スル金額ヲ置クコトヲ得ルノ義ヲ憲法上ニ於テ明言スル者アリ。

瑞典國　憲法第六十三條ニ曰、右ノ外非常用意トシテ公債局ニ於テ充分ナル儲金ヲ募リ之ヲ甲乙ノ二口ニ仕分ケ置クベシ。甲ノ儲金ハ國王内閣大臣ニ諮詢シ、其意見ヲ聽キタル上ニテ之ヲ支出セザレバ止ム可ラザル緊要ノ事出來スルコトヲ得ベシ。乙ノ儲金ハ戰爭ノ時國王内閣大臣一體ニ商議シ議院ヲ召集シ其上ニテ使用スベシ。

此儲金ハ議院ニテ封印ヲ付シ置キ、而シテ議院集會ノ旨ヲ都府ノ禮拜堂ニテ公告スルノ後ニ非ザレバ公債局ノ委官ト雖ドモ開クコトヲ許サズ。

同　第六十四條ニ曰、國王平常ノ財用並ニ歲入ハ前條ノ趣ニ基キ議院ニ於テ募集シタル諸金額即チ非常ノ國用ト稱スル者ト倶ニ國王之ヲ仕拂フテ要用ヲ辨ズベシ、但之ヲ仕拂フニハ議院ノ承認ヲ得テ且濫費ナキヲ要ス。

同　第六十五條ニ曰、右收納ハ前條ニ揭ゲタル用途ノ外ニ仕拂フ可カラズ。若シ之ヲ仕拂フ時ニ内閣大臣其草案ニ意見ヲ記サズ、又之ヲ仕拂フベキ議院ノ差圖アリシコトヲ言ハザル者ハ乃チ其責ニ任ジテ濫用ノ罪ヲ免ル可ラズ。

〔論斷〕　本項ニ於テ推窮ヲ要スベキ者ハ左ノ四點ニ歸着ス。

第一　豫算ハ何等ノ歲入歲出タルヲ問ハズ必ズ毎年之ヲ定ムベキヤ。

第二　兩院豫算法律ヲ決議セザルトキ及ビ議ヲ異ニスルトキ處分如何。

第三　豫算法案ニハ必ズ前年度ノ決算表ヲ添ユベキヤ。

第四　補充費及ビ國庫豫備費ハ必ズ之ヲ要スルヤ。

第一豫算ハ其歲入歲出ノ種類ニ因リ必シモ毎年ノ議決ヲ要セザル者アルベシ。卽チ歲入ニ在テハ現行定額諸稅ノ類、歲出ニ在テハ帝室費及ビ國債費恩給諸祿ノ如キ、若クハ海陸軍皇張費、砲臺建築費等ノ類ハ、特別ノ法律ヲ以テ之ヲ規程シ、毎年ノ議決ヲ要セザルコト、英國ノ不易歲入ヲ以テ王宮ノ歲供、國債、恩給法官外交官其他或ル官吏ノ俸給等ニ充ツルガ如クナランヲ要ス。蓋國家ナル者ハ永久不變ノ性質ナルヲ以テ、其事業經畫ノ如キモ毎年之ヲ始メ、毎年之ヲ終ルベキニ非ズ。何等ノ歲入歲出タルヲ論ゼズ、必ズ毎年之ヲ定ムルヲ法トスルガ如キハ執政者ノ弊害ヲ矯ムルニ急ニシテ、國家ノ大利ヲ起シ費用ノ目的ヲ達スルニ短ナル者ト云フベキナリ。普國ニ於テ比斯馬克公ガ連年豫算繼續不變ノ法ヲ主張セラル、ガ如キモ亦此意ニ外ナラザル可キニ似タリ。

第二　兩院豫算法律ヲ決議セザルトキハ無論原案ニ據テ之ヲ執行シ、兩院議ヲ異ニシ到底相協ハザルトキハ前年度ノ豫算額ニ據テ之ヲ執行スベシ。甲ハ兩院其義務ヲ盡サヾルニ坐シ、乙ハ國論未ダ一定セザルモノト見做スガ故ナリ。然レドモ憲法明文ニ揭グルニ及バザルベシ。

第三　豫算法案ニ必ズ前年度ノ決算表ヲ添ヘ、來年度ノ豫定法案ト決定法案ト同時ニ議決スベキハ固ヨリ至當ノ事ナルベシ。然レドモ毎年國會開會ノ期限ヲ十月一日ト定ムルトキハ、前會計年度ハ其年ノ三月卅一日ニ終ルガ故ニ、中間六ケ月ナラデハ決算整理ノ時日ナキヲ以テ、現行ノ決算期限國庫出納閉鎖等ニ巨多ノ改正ヲ要スルハ勿論ナリトス。（本條ノ明文ハ之ヲ第三項決算認可ノ權ノ下ニ揭グ）

第四　徵兵費等精當ノ豫算ヲ得難ク、且實際節縮シ得可ラザル各科目ニ對シテ補充費ヲ置クヲ要スル勿論ニシテ、從前數年間ヲ經驗スル所ニ因レバ、天變地殃其他國際上ノ臨時費途等ニ充ツルガ爲、若干ノ國庫豫備費（從前ノ經驗ニ依レバ凡ソ四五百萬圓ノ間ニ居ル）ヲ置クニ要スルナリ。然レドモ此等ハ豫算法案ノ說明ニ讓ルベキヲ以テ、必ズシモ憲法ノ明文ニ揚グルヲ要セズ。

以上ノ意見ヲ以テ豫算決定ノ權ニ關スル憲法條項ヲ草案スルコト左ノ如シ。

第　條　歲入歲出豫算ノ額ハ總テ之ヲ豫算法案ニ揭載ス。

第　條　特別ノ法律ヲ以テ定メタル歲入歲出ハ每年ノ決議ヲ要セズ。其他ハ必ズ每年法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第　條　歲出ノ豫算法案ハ之ヲ款項ニ分チ各款ニ就テ決議ス。

〔備考〕初條ハ政府一切歲入歲出ノ額ヲ豫算法案ニ揭載スベキヲ明カニシ、第二條ハ其中ニ必ズシモ每年ノ決議ヲ要スル者アルヲ示シ、第三條ハ豫算法案決議ノ大綱ヲ明カニシ、煩碎ノ決議ヲ爲スヲ免レシム。本案草定ニ付キ大藏省ニ就テ準備ヲ要スル者左ノ如シ。

第一　會計組織法ヲ立案シ、法律ノ効用アラシムル事、但該法律中各項ノ流用ハ勅令ヲ以テ許可スルノ明條アルヲ要ス。

第二　經常費ト臨時費トノ區分ヲ明カニシ科目ノ分合ヲ一定スル事。

第三　豫算法案ノ樣式ヲ定ムル事。

第四　歲出中每年ノ議決ヲ要セザル費項ヲ定メ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ規程スル事。

第五　作業條例ヲ改正シ特別會計ノ法規ヲ立ツル事。

第六　準備金ノ處分ヲ定ムル事。

第三項　決算認可ノ權

〔歷史〕　決算認可ノ法上古其制アルヲ聞カズ。德川氏ノ時ニ在テハ翌々年度ニ於テ地方總勘定ト稱シテ歲入ヲ決算シ、閣老以下ノ面前ニ於テ朗讀檢算スルコト地方總勘定ニ同ジ。蓋當時會計ノ區分ハ甲年度ノ歲入ヲ以テ乙年度ノ歲出ニ充ツルガ故ニ、此ノ如ク歲入歲出兩回ノ決算ヲ要セシナリ。

明治維新ノ後國庫總決算ノ法久シク實行ニ至ラズ。明治十二年ニ至リ始メテ明治元年ヨリ同八年ニ至ル八會計年度ヲ一期ト爲シテ之ヲ決算ス。然レドモ當時ノ制歲入多クハ米穀其他ノ物品ヲ以テシ、歲出中ニモ亦官祿其他米渡ノ法アリ、時價ヲ以テ之ヲ通貨ニ折算スルノ際頗ル困難スル所アリシト聞ク。而シテ當時ニ在テハ大藏省中ニ檢査局ヲ置キ、各廳ノ歲出ヲ檢査シ、其公費ニ立ツ可キト否トヲ決定セシノミ。明法十四年ニ至リ內閣諸省分立ノ擧アリ、會計法及ビ會計檢查院章程ヲ頒スルニ至リ、始メテ會計決算檢查ノ法確立スルヲ得タリ。然レドモ當時ノ章程ニ依レバ會計檢查院ハ豫算決算其他財政一切ノ事項ヲ審查議定スルヲ以テ職掌トシ、恰モ會計檢查院ハ上司ノ如ク、大藏省ハ下司ノ如ク、該院ノ職掌頗ル行政ト密着シテ未ダ獨立ノ地位ニ至ラズ。

同十五年參議各省卿ヲ兼任スルニ及ンデ再ビ會計法及ビ會計檢查院章程ヲ改正ス。茲ニ於テ乎會計檢查院ノ職掌ハ會計ノ結果當否ヲ審查判定スルヲ以テ目的ト爲シ、少シク其體統ヲ得ルニ至ルト雖トモ、現行上尙幾分カ行政處分ヲ混合シ、未ダ全ク獨立ノ體裁ヲ得タリト謂フ可ラズ。以テ今日ニ至ル。

而シテ明治九年以降同十三年ニ至ル五年間ノ決算報告ハ、逐年次大藏省ニ於テ之ヲ整頓シ、太政官之ヲ裁定シ、太政大臣ノ名ヲ以テ官院省使府縣ヘ達シ、其責任ヲ解ク、同十四年度ノ決算報告ハ勅令ヲ以テ之ヲ天下ニ公布セラル。其十五年ヨリ以降ノ分ハ國庫及ビ各廳ニ於テ目今專ラ整理中ニ屬ス。故ニ本邦ノ沿革ニ由レバ政府ノ歲計決算ハ明治十四年度決算報告以前ニ在テハ公然國民ニ公布告知シタルコト無シトス。

〔參照〕　各國憲法中決算認可ノ權ニ關スル條項ノ一二ヲ擧レバ、

佛蘭西國　（一千七百九十三年）　憲法第百四條ニ曰、民選議院ヨリ特任シタル委員ハ國帑寮ノ勘定役人ヲ檢查スベシ。但此委員ハ民選議員中ニ選擧ス可ラズ。且會計上ニ於テ故造アルニ於テハ右委員之ヲ告發セザレバ其責ニ任ズベシ。

同　第百五條ニ曰、國帑寮ノ官員ノ會計書及ビ其他都テ官金ヲ管掌スル役人ノ會計書ハ行政院

ヨリ特任シタル檢査委員ニ年々之ヲ送達スベシ、且其委員ハ夫ニ就テ責ニ任ズベシ。

同　第百六條ニ曰、檢査委員及ビ民選議院ヨリ民選議員ノ外ニ選擧シタル他ノ委員ハ前條ノ檢査委員ヲ監守スベシ、右監守委員ハ會計書ニ於テ過度或ハ違算アリテ之ヲ告發セザレバ其責ニ任ズベシ。

民選議院ハ國ノ年計ノ決算ヲ爲ス。

普魯西國　憲法第百四條ニ曰、實費國計表ヲ超ユル時ハ兩院ノ後認ヲ要ス。（事前許可已ニ得ルニ及バス故ニ猶事後承認ヲ要ス）

出納ノ統計院之ヲ檢勘結定ス。（政府ノ歲計ヲ檢勘スル爲ニ統計院ヲ設ク、一歲ノ出納ヲ錄シ政府ヨリ統計院ニ付シ、統計院檢勘シテ後ニ議院ニ付シ監視セシム、佛國ノ制ニ倣ヘルナリ）

毎年ノ統計全表（一歲ノ出納ヲ錄スル者）ハ統計院ヨリ國債償却ノ部ニ注明ヲ加ヘ議院ニ付スベシ。

別法統計院ノ構制及ビ權限ヲ定ム。

白耳義國　憲法第百十五條ニ曰、毎年兩院ハ統計（前年ノ出入）ノ法章ヲ決シ（檢查ノ後統計ノ法章成ル）及ビ豫算（來歲ノ出入）ヲ議定ス。

政府一切ノ出納ハ必ズ豫算表及ビ統計表ニ載スベシ（出納ノ公布）

同　第百十六條ニ曰、統計院ノ官員ハ代議士院之ヲ選任シ法章定ムル所ノ任期ヲ以テ代任ス。

（一任六年）

統計院ハ政府全局ヲ出納及ビ國庫ヨリ支出スル一切ノ會計ヲ檢查清算スルニ任ズ。

豫算表ノ支費ニ於テ一項ノ過費アルコトナク（實費定額ヲ超ヘズ）又一ノ那移アルコトナキコトヲ監ス。

政府各部ノ統計ヲ決シ、就テ一切ノ憑據一切ノ文票ヲ拾收スルニ任ズ。

國計全表（毎年統計ヲ公布スルノ書）ハ統計院注明ヲ加ヘ兩院ニ付シ議ヲ取ル。

統計院ノ構制ハ法章之ヲ定ム。

西班牙國　憲法增補律例第十五條ニ曰、政府ハ國會ノ開會ヨリ八日以內ニ前年ノ決算表及ビ翌年ノ豫算簿ヲ代議士院ニ下附スベシ。

葡萄牙國　憲法第百三十八條ニ曰、大藏卿ハ他省ノ卿ヨリ本省ノ支費豫算表ヲ交收シ、國會ノ集合スベキ時毎歲代議士院ニ國庫前年ノ出納決算表及ビ明年ノ國費並ニ總租稅國入ノ總豫算ヲ具送スベシ。

同國　憲法增補律例第十二條ニ曰、法律ニ由リ其構制職掌ヲ規定スベキ會計法院ヲ置クベシ。

同　第十三條ニ曰、代議士院開設ノ日ヨリ十五日内ニ政府ハ明年ノ出納豫算表ヲ該議院ニ送付スベシ、及ビ其開設ノ日ヨリ一月内ニ前年ノ決算表ヲモ亦之ニ送付スベシ。

荷蘭國　憲法第百廿二條ニ曰、毎歳ノ出納決算表ハ統計院ニ於テ承認シタル簿冊ニ併セ立法官ニ送附ス。

出納精算ノ差額ハ法律ニ由テ整頓ス。

同　第百七十六條ニ曰、統計院ノ設置及ビ權任ハ法律ヲ以テ定ム。

國王ハ國會ノ下院ヨリ上奏スル三員ノ應選人姓名表ニヨリ選テ統計院ノ缺員ヲ補任ス。

統計院ノ僚員ハ終身其職ニ任ス其俸給ハ法律之ヲ定ム。

〔論斷〕　本項ニ於テ推窮ヲ要スベキ者ハ左ノ四點ニ歸着ス。

第一　歳計決算ハ必ズ之ヲ法律トシテ議決スルヲ要スルヤ。

第二　會計檢査院ノ組織權限如何。

第三　實際ノ支出豫算ニ超過セルトキ兩院ニ對スル處分如何。

第四　科目流用補充及ビ豫備金支出ノ方法如何。

第一ニ歳計豫算ヲ豫定法律ト爲ストキハ其決算ヲ決定法律ト爲スベキハ道理上無論ナルヲ以テ、佛國等ニ於テハ之ヲ法律ト爲シテ議定スト雖ドモ、英國其他ニ於テハ必シモ敢テ然ラザル者アリト聞ク。故ニ本邦ノ如キニ在テハ必シモ之ヲ法律ト爲スヲ要セズ。兩院ニ報告スルニ止ムルヲ可トス。

第二ニ會計檢査院ハ會計上獨立ノ一器械ト爲シ、其職員ハ　陛下ノ勅選ニ由リ大藏省ニ於テ統計スル所ノ各廳歳計決算書ニ就キ其實蹟ヲ審査判定シ、一面ハ兩院ニ向テ豫算增減科目流用等ノ結果ヲ報告シ、一面ハ　天皇陛下ニ對シテ會計上行政處分ノ當否ヲ具狀セシムベシ。

第三ニ實際ノ支出豫算ニ超過シタルトキハ其歳入殘餘ヲ以テ之ヲ支辨スルヲ得ルト否トニ係ラズ、兩院ノ後認ヲ要シ主任大臣其責ニ任ズルヲ以テ法ト爲スベシ。

第四ニ科目ノ流用補充及ビ豫備金支出ハ勅裁ヲ以テ之ヲ決行シ得ルノ明文ハ、必ズ之ヲ會計組織法中ニ掲載スルヲ要ス。

以上ノ意見ヲ以テ決算認可ノ權ニ關スル憲法條項ヲ草案スルコト左ノ如シ。

第　條　毎年國會開會ノ際會計檢査院ノ審査ヲ經タル前年度ノ歳計決算ヲ兩院ニ報告ス。

第　條　會計檢査院ノ職務權限ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第一條　實費豫算ニ超過スルトキハ兩院ノ後認ヲ要ス。

〔備考〕　初條ハ決算報告ノ順序ヲ明カニシ、第二條ハ會計檢査院職務權限ノ由テ起ル所ヲ規程シ、第三條ハ普國憲法第百四條ノ精神ヲ用ヒ、實費豫算ニ超過セシ時ノ處分ヲ定ム。

本案草定ニ付キ大藏省ニ於テ準備ヲ要スル者左ノ如シ。

第一　會計組織法中ニ會計檢査院ノ職務權限ヲ明カニスル事。

第二　會計組織法中ニ實際豫算ニ超過セザルヲ得ザル時ニ當リテノ支出ノ順序ヲ規程スル事。

第三　會計組織法中ニ歳入實額ノ豫算ニ及バザル時ニ於テノ補塡ノ方法ヲ規程スル事。

第四　決算報告ノ樣式ヲ定ムル事。

第五　決算整理及ビ國庫閉鎖ノ期限ヲ改正スル事。

第四項　國債募集ノ權

〔歷史〕本邦上古國債ノ法ナシ。德川氏ノ時往々富豪ヨリ用金借上ノ事アリト雖ドモ、概ネ借テ返サズ、臨時賦課法ノ極メテ不公平ナル者ニ過ギザルナリ。

明治維新ノ際國費支ヘズ、京攝等ノ富豪ヨリ金若干ヲ借入ルヽト雖ドモ、數年ニシテ之ヲ償還ス。明治三年東京横濱間鐵道布設ノ爲メニ公債證書ヲ發行シ、英國東洋銀行ニ囑托シテ金貨一百萬磅ヲ借入ル。之ヲ外國債ノ始トス。同四年廢藩置縣ノ令ヲ發スルニ及ビ、各藩ノ負債ヲ政府ニ負擔シ、新舊二種ノ公債證書二千三百三十九萬餘圓ヲ發行シテ之ニ換ユ。是ヲ內國公債

證書發行ノ始トス。明治六年士族卒家祿買收ノ爲ニ金貨二百四十萬磅ヲ再ビ東洋銀行ニ囑托シテ之ヲ借入レ、同時ニ秩祿公債證書一千六百五十六萬餘圓ヲ發行シテ、之ヲ家祿奉還者ニ交付ス。

同九年華士族等ノ家祿賞典祿ヲ廢シ、金祿公債證書一億七千四百十九萬餘圓ヲ發行シテ以テ家祿賞典祿ニ換ヘテ之ヲ有祿者等ニ交付ス。

同十一年公益ノ事原ヲ起シ、物產繁殖ノ道ヲ開キ內外ノ商賣ヲ盛ンニスルガ爲ニ內國債一千二百五十萬圓ヲ募集シ、鐵道其他土地開墾士族授產等ノ基金ニ充ツ。

同十七年中仙道鐵道布設ノ爲ニ、內國債二千萬圓ヲ募集シ、同十九年海軍皇張ノ爲ニ海軍公債一千七百萬圓、從前六朱以上高利ノ公債償却ノ爲ニ整理公債一億七千萬圓募集ノ事ヲ公布シ其第一次ニ於テ海軍公債五百萬圓、整理公債一千萬圓ヲ募集ス。

其他明治十年西南騷擾軍費ノ爲ニ、第十五國立銀行ヨリ通貨一千五百萬圓ヲ借入レ、明治六年以後金札引換公債證書逐時發行ノ額モ亦前後一千四百五十九萬餘圓ノ巨額ニ達セリ。

以上諸般ノ事情ニ因リ維新以降內外公債證書ヲ發行スルコト無慮二億九千九百萬餘圓ニ及ブト雖ドモ、募集發行ノ際毫モ困難ノ事アルコト無ク、其應募額ハ每ニ募集額ニ超ユ、而シテ利子仕拂ハ固ヨリ論無ク、元金償却ノ如キモ每ニ豫期豫定ノ外ニ出デ、往々其期ヲ早ムルヲ以テ

國家ノ信憑逐年厚キヲ加ヘ、國債保固ノ一端ニ於テハ敢テ他ノ文明國ニ恥ザルコト無キヲ得タリトス。

其他維新以降内外多事、兵馬倥傯ノ爲ニ紙幣ヲ發行シテ以テ國費ヲ補充スル者一億三十二萬餘圓、舊藩紙幣ニ換ユル者二千二百六十一萬餘圓、其他各國立銀行發行ノ紙幣等ヲ合算シテ一時内國ニ流通スル所ノ紙幣一億數千萬圓ノ巨額ニ至リ、紙幣ノ實價漸ク低落シ物價頓ニ騰貴ノ情況ニ陷リ、一國經濟ノ本位將ニ錯亂セントスルノ虞アリ。茲ニ於テ乎政府ハ鋭意冗費ヲ節縮シテ紙幣銷却ノ事ニ從ヒ、傍ラ準備ノ正貨ヲ儲蓄シ流通紙幣ハ漸次銷却シテ七千餘萬圓ノ小數ニ至リ、遂ニ本年一月一日ヨリ政府發行ノ紙幣交換ノ事ヲ公布スルニ及ビ、一國ノ經濟始メテ其眞相ニ復スルヲ得ルニ至ル。

〔參照〕各國憲法中國債募集ノ權ニ關スル條項ノ一二ヲ擧レバ。

佛蘭西國（千八百三十年）憲法第六十一條ニ曰、國債ハ保證シタルモノトス、全體政府ヨリ債主ニ對シテ爲シタル所ノ約束ハ違背ス可ラザル者ナリ。

普魯西國憲法第百三條ニ曰、法ニ據ルニ非ザレバ國債ヲ起スコトヲ得ズ（國債ハ國ノ大事故ニ必ズ公議ヲ待ツ）

其他凡ソ政府ノ保證ニ係ル者、並ニ之ニ同ジ（銀行及ビ諸會社ノ政府ヨリ保證ヲ受ケ債證及ビ銀幣ヲ發行スルノ類）

西班牙國　憲法第七十七條ニ曰、國債ハ國民ノ特別ナル保固ニ賴ル。（代議士員等每歲論議公評シテ法律ヲ定メ歲計豫算表ニ因リ漸ク國債ヲ償還スルヲ云フ）

葡萄牙國　憲法第百三十七條ニ曰、國債ノ利子並ニ其償還ニ供備スベキ租稅ヲ除クノ外、凡直稅ハ每歲國會ニ於テ規定スベシ、然レドモ該直稅ヲ廢止シ若クハ改置スルノ日ニ至ルマデハ舊ニ依テ之ヲ存置ス。

荷蘭國　憲法第百七十三條ニ曰、政府ヨリ其債主ニ對スル義務ハ保固トス。國債ハ每歲債主ノ利益ヲ量リテ考訂ス。

瑞典國　憲法第六十六條ニ曰、公債局ハ議院ノ管轄ニ屬シテ諸務皆其指令ヲ以テ施行スベシ。議院ハ此局ヲ管轄スルニ付公債ノ仕拂ヲ保證シ、且審カニ會計ノ模樣ヲ檢査シ、時宜ニ依リテハ別段ニ收納ヲ募リテ公債仕拂ノ手段ト爲シテ之ガ元利ヲ償ヒ、以テ國信ヲ維持シテ墜サザルベシ。

同　第六十七條ニ曰、公債局ニ勤仕スル所ノ國王ノ委官ハ、議院ノ委官ノ集會スル時ニ其望ム所アルニ非ザレバ商議ノ席ニ列ス可ラズ。

同　第六十八條ニ曰、公債ノ用途ニ屬シ又之ニ充タスベキ金額ハ何等ノ時宜ニ至リ何等ノ名義

アリト雖ドモ議院ニ於テ決定シタル目的ノ外ニ使用ス可ラズ。故ニ此金額ニ觸ルヽ所ノ命令ハ總テ無効ナリトス。

獨逸　帝國憲法第七十三條ニ曰、非常ノ入費アル場合ニ於テハ、兩院ノ決定ヲ以テ金額ヲ借リ、又帝國ノ名義ヲ以テ其負債ヲ保證スルコトヲ得ベシ。

〔論斷〕本項ニ於テ權窮ヲ要スベキ者ハ左ノ二點ニ歸着ス。

第一　減債金櫃ヲ置クヲ必用ト爲スヤ。

第二　減債金櫃監督ノ方法如何。

第一ニ本邦ノ國債ハ二十年乃至三十年間ニ悉皆償却スベキ債主トノ規約アリテ、所謂永久國債ナル者ニ非ザルヲ以テ、債主ニ對シ其規約ヲ全フセント欲セバ、各種公債償却年限ノ長短ヲ通算折中シテ其中位ヲ取リ、一定ノ金額ヲ算出シ、年々之ヲ減債金櫃ニ繰入レ、特別會計ノ法規ヲ以テ之ヲ規程シ、努メテ債主ノ利便ヲ謀リ市場ノ變動ヲ察シ、該金櫃ヨリ公債ノ利子及ビ償却スベキ元金等ヲ拂出スヲ適當ノ處分ト爲スベシ。若シ然ラズシテ毎年不定ノ豫算ヲ立テ常用經費ヨリ支出スルガ如キハ、假令特別ノ法章ニ因リテ國會ニ於テハ之ヲ加除增減セザル者トスルモ、他ノ政務ノ費用ト互ニ伸縮貫聯セザルヲ得ズ、之ガ爲ニハ許多ノ煩雜ヲ來タスコトアル可キヲ以テナリ。

第二ニ減債金櫃監督ノ法ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ムベク、各國ニ於テハ國會其他ノ委員ヲ撰拔シテ該監督者ニ充ツル者アリト雖ドモ、目下我國ニ在テハ會計檢査院ヲシテ該責任ヲ負ハシムルノミナルモ大ナル不可ナカルベシ。然レドモ他日各種ノ監督委員ヲ要スルノ日アラバ、其際ニ至リ該監督法規ヲ刪補修正シテ足ルベキナリ。

以上ノ意見ヲ以テ國債募集ノ權ニ關スル憲法條項ヲ草案スルコト左ノ如シ。

第　條　凡ソ國債ノ募集ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第　條　每年國債元利ノ仕拂ニ充ツベキ金額及ビ監督ノ法ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第　條　國債償却ノ義務ハ其債主ニ對シテ保固トス。

〔備考〕初條、國債募集權限ノ由テ起ル所ヲ規程シ、第二條ハ每年減債金櫃ニ繰入ルベキ金額ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定メ、年々ノ議決ニ因リ加除增減スベキ者ニ非ザルノ意ヲ含マシメ且該金櫃監督法規ノ基本ヲ立ツ。而シテ他年公債新募等ノ事アリテ減債金櫃ニ繰入ルベキ金額ヲ加除增減セザルベカラザルニ際シテハ、兩院ノ議決ヲ經　陛下ノ　勅裁ヲ請ヒ、該法律ヲ修正セザル可ラザルハ固ヨリナリトス。其第三條ハ國債償却ノ義務保固ナルヲ示ス。

本案草定ニ付キ大藏省ニ於テ準備ヲ要スル者左ノ如シ。

第一　現存セル各種公債償還期限ノ長短ヲ折算シ、年々減債金櫃ニ繰入ルベキ金額ヲ定メ、

別段ノ法律ヲ以テ之ヲ規程スル事。

第二　會計組織特別會計法規中ニ減債金櫃監督整理ノ規程ヲ定ムル事。

第三　減債金櫃出納計算簿記等ノ細則ヲ定ムル事。

第四　歳入ニ殘餘アル時ハ之ヲ減債金櫃ニ繰入ルベキ制度ヲ立ツル事。

第五項　地方財務ノ權

〔歴史〕　地方財務ノ法、徳川氏ノ時ニ在テハ一定ノ制度アルコトナク、明治四年政府藩縣ニ布告シ、工商ノ制限立テ或ハ物品取締等ノ爲メ新タニ收稅法ヲ設クル者ハ一々之ヲ伺出シムルヲ以、前ニ在テハ地方財務ノ制漫然統紀スル所ナシ。同八年國稅中ノ諸種二千餘種ヲ廢スルニ及ビ、營業上保護ノ爲メ收稅ヲ要スル者ハ大藏省ニ伺出、地方官ニ於テ課稅セシム。同年以後國稅府縣稅ノ名アリ。而シテ府縣稅ハ之ヲ府縣ニ取立、其他ノ民費ハ概シテ之ヲ區戸長等ニ放任スル者ノ如シ。同九年府縣稅收入高ヲ大藏省ニ届出ノ方法ヲ定ムル等ノコトアリ雖トモ、同十一年府縣稅及ビ民費ノ名ヲ以テ徵收セル府縣費區費ヲ改メ、更ニ地方稅トシ、其規則ヲ定ムルニ至テ地方財務ノ制始メテ少シク統紀スル所アリトス。

同年又地方稅中、營業稅雜種稅ノ種類及ビ制限ヲ定メ、同十三年地方稅規則ヲ改メ、府縣會ヲ起シ、府縣議員ヲシテ地方ノ歳入歳出ヲ議定セシムルニ及ビ、地方財務ノ制大ニ其體裁ヲ一新ス爾後逐次改良以テ今日ニ至ル。

而シテ目下地方財務ノ弊ハ營業稅雜種稅戶數割等ニ制限スル所ナキヲ以テ、甲乙二府縣ノ間ニ於テ往々半減若クハ相倍蓰スル者アリ。各地ノ人民大ニ其休戚ヲ異ニスルノミナラズ、町村費ノ如キニ至テハ其監督檢查ノ法充分ナラズ、或ハ地方町村費ヲ合算スル時ハ其額殆ンド國稅ノ徵收額ニ達セントスル者アリト聞ク。其他之ヲ收入シ之ヲ支出スルノ法ニ至テモ一定法規ノ之ヲ規程スルナキヲ以テ、或ル府縣ニ於テハ言フニ忍ビザルノ弊害アル者少カラズト聞ケリ。故ニ地方財務ノ權ニ對シ、憲法ヲ以テ其大本ヲ定メ、其他各種ノ法律ヲ以テ之ヲ規程スベキハ蓋亦當今ノ急務ナルベシト信ズ。

〔參照〕　各國憲法中地方財務ノ權ニ關スル條項ノ一二ヲ擧レバ、

佛蘭西國（一千八百四十八年）憲法第七十八條ニ曰、州民議院區民議院邑民議院等ノ編制及ビ事務章程並ニ邑長副長トノ委任ノ方法ハ追テ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシ。

普魯西國　憲法第百五條ニ曰、普魯西國ノ邑區部ノ代議及ビ政治ハ別法之ヲ定ム。

澳地利國　憲法第一章第一條ニ曰、安斯河東澳地利部ニ於テ凡ソ該部ノ政務ハ州會之ヲ代理ス

同　第二條ニ曰、州議員ニ與ヘタル權理ハ州會若クハ掌事官之ヲ執行スベシ。

同　第二章第十七條ニ曰、州ノ利益ニ關スル法律ヲ起議スルノ權ヲ有ス。州會モ亦州ノ利益ニ關スル法案ハ政府ノ起議ノ式ニ於テ州會ニ附スベシ。起議ニ法律ノ力ヲ與フルニハ州會ノ承認ト皇帝ノ制可トヲ必要トス。既ニ皇帝若クハ州會ノ斥ケタル法案ヲ一會期間ニ起議スルコト二回ニ及ブコトヲ得ザルベシ

同　第二十條ニ曰、州會ハ州ニ屬スル特別ノ財產其原因若クハ其所用ニ循ヒ、安斯河東澳地利部ノ所有ニ屬スル公有ノ財產及ビ各個若クハ公共ノ資本ニ因リ、設置シ、又贈遺シタル財產並ニ建物ノ保存ヲ看守スベシ。

公有財產ノ賣與又公有財產ニ永久ノ負擔若クハ書入質ヲ生ズベキ州會ノ決定ハ宜ク皇帝ノ制可ヲ仰グベシ。

同　第二十一條ニ曰、州會ハ州ノ有ニ屬スル特別ノ資本州ノ用途金並ニ州ノ逋債ヲ管理シ、及ビ州ノ負任スル義務ノ踐行ヲ看守ス。

州會ハ諸資本ノ所用ヲ定ムル條規ニ確準シ、州ノ資本及ビ安斯河東澳地利部ノ逋債還償金及ビ地稅ノ免除金（不當ニ若クハ過分ニ徵收スルニ因リ還付スベキ餘剩ノ稅金ヲ云フ）ヲ管理享用ス。

同　第二十二條ニ曰、州庫通常ノ歲入充足セザル時、州會ハ州ノ金庫及ビ建物ニ須要ナル財本ヲ得ルノ方法ヲ論議決定ス。

是故ニ州會現在ノ租稅百分ノ十ニ至ルマデ增稅ヲ課スルコトヲ得、直稅及ビ其他ノ租稅ニ本稅百分ノ十ヨリ多キ增稅ヲ課スルニハ皇帝ノ制可ヲ必要ト爲ス。

西班牙國　憲法第七十一條ニ曰、每州ニ州會ヲ置クベシ。但州會ノ員ハ法律ニ定タル規程ニ循フテ之ヲ選舉シ、法律ニ揭ゲタル定員ヲ以テ之ヲ構制ス。

同　第七十三條ニ曰、州會邑會ノ構制職掌及ビ政府ノ委員州邑會ニ參與スルノ權等ハ法律之ヲ定ム。

葡萄牙國　憲法增補律第例十一條ニ曰、國民ノ直接ニ公選シタル邑議會ハ法律ニ依據シテ理財務ヲ執行スベシ。

荷蘭國　憲法第百廿六條ニ曰、州會ハ每歲法律ニ定メタル期限ニ於テ集會ス、及ビ國王ノ之ヲ召集スルトキニ臨時會議ヲ開ク。

同　第百廿九條ニ曰、州會ハ每歲其職任トスル政務費ヲ國王ニ上奏シ、其准名ヲ得ルニ及デ之ヲ州ノ歲計豫算表ニ登記ス。

州會ハ每歲特ニ該州ノ出納豫算表ヲ公許シテ國王ノ准允ヲ請フ。

州費ニ供備スル州ノ租稅ハ國王ニ上奏ジ法律ニ由テ許准ヲ受。

同　第百四十條ニ曰、邑會ハ邑政及ビ邑益ノ事件ヲ規定ス。

同　第百四十三條ニ曰、法律ハ亦邑ノ歲計豫算表及ビ決算表ニ依ル總則ヲ定ム。

白義國　憲法第百八條ニ曰、州邑ノ政制ハ法章ヲ以テ規定ス。

同　第百十條ニ曰、凡ソ州稅及ビ州ノ賦徵ハ州會ノ承可ヲ經ルニ非ザレバ賦課スベカラズ。凡ソ邑稅及ビ邑ノ賦徵ハ邑會ノ承可ヲ經ルニ非ザレバ賦課スベカラズ。州邑ノ稅計ヲ課徵スルニ就キ實驗上要用ナル所ノ變則ハ法章ヲ以テ之ヲ定ム。

〔論斷〕本項ニ於テ推窮ヲ要スベキ者ハ左ノ三點ニ歸着ス。

第一　方今地方ノ制度ハ變革ヲ要セザルヤ。

第二　地方稅ノ種類制限如何。

第三　地方財務監督ノ方法如何。

第一ニ地方ノ制度ヲ論窮スルハ財政直接ノ事ニ非ズト雖トモ、地方財務ノ事ヲ審査セント欲スルニ當リ、先ヅ地方制度ノ要領ヲ言ハザレバ其意ヲ明カニスルヲ得ズ。蓋方今ノ制、府縣ノ下ニ郡區アリ、郡區ノ下ニ町村アリテ體統略々備ハルガ如シト雖トモ、其行政區ニ屬スルモノト、自治區ニ屬スモノトノ分界甚ダ明カナラズ。故ニ之ヲ分界シテ郡區ハ純然タル行政區ト爲シ　府縣及ビ町村ハ行政自治ノ兩性質ヲ兼ネシムルヲ以テ實際適當ト爲スベシ。而シテ自治ノ性質ニ屬スルモノニ對シテハ、各議員中理事員ヲ置キ、終始其事務ニ擔當セシムルガ如キモ亦不可ナカルベシ。

第二ノ地方稅中營業雜種兩稅及ビ戶數割ニ制限ナキガ爲ニ、各地人民大ニ休戚ヲ異ニスルノ狀ハ歷史中ニ序述スルガ如シ。故ニ地方費額中郡區役所ノ費用監獄費府縣廳舍建築修繕費ノ類ハ斷然之ヲ國庫支辨ト爲シ、家屋稅若クハ所得稅營業稅等ヲ起シテ以テ之ニ充テ、從前ノ營業雜種兩稅ハ之ヲ廢シ、而シテ地方支辨ニ屬スベキ行政自治兩途ノ費用ハ別段ノ法律ヲ以テ其制限ヲ立、或ル種類ノ國稅ニ幾分ヲ附加徵收シテ之ニ充ツルヲ以テ法ト爲スベキナリ。

第三ハ地方財務ノ監督ヘ會計組織法特別會計法規中ニ之ヲ組入ルベキ見込ナルヲ以テ玆ニ之ヲ論ゼズ。

以上ノ意見ヲ以テ地方財務ノ權ニ關スル憲法條項ヲ草案スルコト左ノ如シ。

第　條　地方ノ制度ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第　條　地方ノ歲計ハ別段ノ注視ニ從ヒ地方會議ニ於テ之ヲ決議ス。

〔備考〕初條ハ地方制度ニ屬スル法章ノ由テ起ル所ヲ規程シ、第二條ハ地方財務ノ權限ヲ規程ス。

本案草定ニ付キ内務省大藏省ニ於テ準備ヲ要スル者左ノ如シ。

第一　地方制度ニ屬スル法章ヲ立案スル事。
第二　府縣町村自治ノ制度ヲ明カニスル事。
第三　會計組織法特別會計法規中ニ地方財務監督檢査ノ方法ヲ規程スル事。
第四　地方議會ノ權限ヲ定ムル事。
第五　地方附加稅ノ種類及ビ制限ヲ定メ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ規程スル事。
第六　地方稅ヲ以テ町村行政費ヲ支辨スルノ方法ヲ立ツル事。
第七　地方有財產處分ノ方法ヲ立ツル事。

附言

上文ニ審案草定スル所ノ五項ノ外、貨幣鑄造ノ權、政府專業ノ權、官有財產固有財產管理ノ權、帝室費決定ノ權、恩給頒與ノ權等財政ニ關シテ憲法上明文ヲ揭グルヲ必要トスル者少カラザルベシト雖ドモ、事大體ニ關セザルヲ以テ先ヅ本案ヲ呈出シ、大要ノ決スルヲ待テ更ニ之ヲ審案草定スベキ見込ニテ、本案中ニハ之ヲ省ク。

各國憲法中往々適切ニ事ヲ擧ズ實ヲ指シテ權義ヲ規程スル者ナリ。本案努メテ之ヲ避クル者ハ他年時勢一變スルニ及ビ、該條項ニ就キ官民倶ニ如何トモス可ラザル憾アリテ、終ニ憲法修正等ノ擧屢々實際ニ行ハレ大ニ國體ノ尊嚴鞏固ヲ缺クノ恐アルヲ以テナリ。

備考中ニ揭グル準備ヲ要スル各事項ニ就キ、精細ノ定見ヲ具セント欲スル者ナキニ非ズト雖ドモ、事細目ニ涉ルヲ以テ暫ク之ヲ省ケリ。而シテ該各事項ノ如キハ今ヨリシテ夜ヲ以テ日ニ繼ギ之ニ着手スルモ尙時日ノ甚ダ切迫セルヲ憂フルナリ。急ニ委員ヲ督セラレ、概略明治二十年二十一年ノ間ニ之ヲ完成シ、國會開設前一兩年間ハ、純然實際經驗ノ餘裕アランコト實ニ至願ニ堪ヘザル也。

各國憲法異同疑目

第一　帝室

一、攝政官ハ皇族最近親ヲ以テ之ニ任ズルノ國アリ、又議院ヲシテ之ヲ選定セシムルモノアリ何如、

一、皇族中最近親ヲ以テ攝政ト爲ストセバ其年齡ノ制限何如、

一、前條ノ場合ニ於テ適任ノ皇族ナキ時ハ、其處置何如、

一、皇帝旅行等ニテ親カラ政ヲ執ルコト能ハザル時ハ、攝政官ヲ命ズルニハ憲法所定ノ順序ニ從フヲ要セザルカ、

一、幼帝ノ時ハ攝政官ノ外別ニ後見職ヲ置クノ國アリ何如、

一、帝室歲餉ハ新帝卽位ノ初議院ニ於テ議定シ終世改メザルヲ例トスルガ如シ、各年又ハ數年毎ニ之ヲ議定セシムルノ國アリヤ、

一、帝室歲餉ノ支出ニ屬スル經費ノ區域何如、

一、帝室私有財產各國ノ差等何如、

一、各國中我皇族ノ如キモノアリヤ、且在位帝王ノ近親皇族ト右ノ族ト禮遇ノ差何如、

一、新帝卽位ノ初國憲ヲ守ルノ誓ヲ宣ブルハ立君國ノ通則ナルガ如シ、或ハ宣誓セザルノ國アリヤ、

一、宣誓スルノ國ニ於テハ其方法儀式何如、

一、大赦ハ皇帝ノ特權トスル國アリ、或ハ議院ノ決ヲ要スルノ國アリ何如、

第二　內閣

一、宰相ハ議員ヲ兼ヌルヲ許ス國アリ、之ヲ禁ズルモノアリヤ、

一、宰相ヲ彈劾スルハ下院之ヲ掌リ、其審判ハ上院ノ權ニ歸スルノ國アリ、下院若クハ上下兩院共ニ彈劾ノ權ヲ有シ、審判ハ大審院若クハ特設法院ニ委スルモノアリ、其法律手續何如、

一、議院ノ彈劾ニヨリテ處刑セラレタル官吏ハ議院ノ請求アルニ非レバ國帝ト雖モ恩赦ヲ賜フコトヲ得ザルヲ通則トスルニ似タリ、或ハ否ラザルヤ、

一、宰相ヲ彈劾スルハ在職中犯則發覺セシ時ニ限ルカ、退職後ニ至テ發覺スルトモ所犯在職中ニ係ル者ハ猶ホ之ヲ彈劾スルヲ得ルカ、

一、議院彈劾ノ結局ハ被告仕官ノ權ヲ奪フニ止メ、其刑法ニ觸ルヽ者ハ更ニ普通法院ヲシテ裁判セシムル國（米國）アリ、之ニ反シ議院ニ於テ全ク普通法院ニ代リテ裁判スル國アリヤ、

一、宰相ハ議院ニ對スル責任アリ、然ルニ其以下ハ否ラザルヲ以テ議院ニ於テ彈劾スベキ官吏ハ宰相ニ止ムル國アリ、或ハ其他ノ官ニ及ボス者アリ其細目何如、

一、武官ヲ以テ宰相（陸海軍卿ヲ除ク）ト爲スヲ禁ズルノ例規アル國アリヤ、

一、宮內長官モ亦內閣ト共ニ進退セシムルノ國アリ、之ニ反スルモノアリ、其理由何如、

第三　立法院

一、議員ハ全ク行政官タルヲ禁ズルノ國アリ、宰相其他若干ノ官職ノミヲ兼ヌルヲ許スモノアリ、一切行政官ノ兼務ヲ許スモノアリ、其利害何如、

一、議員ニテ行政官トナル時ハ改選ヲ要スルモノト否ラザルモノトアリ、其理由何如、

一、上下院議長ハ勅選ノ國アリ或ハ本院ニ於テ公選スルモノアリ其任選法何如、

一、議案ノ修正ニ干シ兩院ノ議合ハザル時ハ結收ヲ致スノ方法何如、

一、開會中議員ヲ法廷ニ召喚セントスル時ハ民事訴訟タリト雖モ亦議院ノ承諾ヲ要スルヤ、

一、急切ノ場合ニ當リ議院閉會中ナレバ其決ヲ待タズ行政官ノ特權ヲ以テ法律ヲ假定公布シ、議院開會ノ日其承認ニ付スルノ手續何如、

一、議員ニ給料ヲ與フル國アリ又與ヘザル國アリ、其理由何如、

一、軍人ハ非職ナリトモ議員タルヲ得ザルヤ、將タ之ヲ許スカ、

一、人民ヨリ議院ニ建白シ及ビ之ヲ處分スルノ手續何如、

一、傍聽ヲ禁ズルハ議員ノ建議ニ依リ、議院ノ決議ヲ要スルガ如シ、然レドモ時機ニ依リ議長ノ特權ヲ以テ直チニ之ヲ禁ズルノ國アリヤ、

一、皇帝議院ノ決議ヲ可トセザル時、議院ヲ解散セズシテ原案ヲ直チニ再議ニ付スルノ例アリヤ、

一、近來英米等ニテハ議院ニ於テ議案調査ノ爲メ一局ヲ設ケ、法律ニ熟達シタル官吏ヲ置クベキノ說アリ何如、

一、上院議員ノ選任法ヲ通觀スルニ、大抵世襲ニ由ル者、勅任ニ由ル者、職權ヲ以テスル者、及選擧セラルヽ者ノ四種ニ出デザルガ如シ、此四種中一種ヲ專用スルト數種ヲ混用スルト其利害理由何如、

一、皇族滿十八歲ニ至レバ元老院議員トナリ、其後若干年ヲ經テ方サニ決議ニ參スルノ權アリトスルノ國アリ其利害何如、

一、下院議員ノ選擧ニ直選法ヲ用フルト複選法ヲ用フルトノ得失何如、

一、直選法ヲ用フルトセバ普通選擧ト制限選擧トノ利害何如、

一、被選人ノ制限ハ選擧人ノ制限ヨリ一層寬廣ナラシムルト狹小ナラシムルトノ利害何如、

一、選擧區ハ專ラ人口ニノミ據リテ之ヲ設クベキカ將タ都鄙ヲ分テ之ヲ設クベキカ、

一、被選人ハ其現在スル選擧區ノミヨリ選擧セラルヽヲ得ルカ、將タ何レノ區ヨリ選擧セラルルモ妨ゲナキカ、

一、下院ノ改選ハ議員全部ヲ一時ニ改選スルト其一半或ハ三分一ヲ改選スルト利害何如、

第四　憲法改正

一、憲法ノ改正ハ普通議事ノ手續ヲ用ユルカ、又ハ全國人ノ總議ニ付スルカ又ハ他ノ方法アリヤ、

一、改正ヲ行フニ方リテハ先ヅ其改正ヲ要スル條目ヲ限定シテ後之ガ改正ニ及ブカ、又ハ此預定ヲ爲サヾルカ、

第五　雜件

一、官吏ニ與フル年金退隱料ノ類ハ法律ヲ以テ定ムル國多シト雖モ、或ハ皇帝ノ特權ヲ以テ之ヲ與フル國アリヤ、若シ然ラバ其制限何如、

一、政府ヨリ發スル布告ハ皇帝之ニ署名シ、主務ノ宰相連署スルヲ通則トナスガ如シ、皇帝ノ親署ナク大宰相之ニ代ツテ署名スル國アリヤ、

一、憲法制定ノ時全ク欽定ヲ以テセシ類例何如、就中孛魯士伊太利二國ニ於テ近年憲法ヲ制定セシ時ノ手續何如、

一、議院ニ於テ調査ノ爲メ必用ナル時ハ其事件ニ關係アル官吏人民ヲ召喚スルノ手續何如、

第一　政府ニ於テ法律規則等ヲ頒布スル毎ニ其冒頭ニ之ヲ頒布スルノ理由ヲ列記シ、其說明ヲナス事歐米ノ法律規則ノ冒頭ニアル「プレアンブル」ノ如キモノヲ用ヒルコト。

第二　本邦ニ於テハ未ダ第一ニアル「プレアンブル」ノ例ヲ用ヒズ、直チニ政府ノ主義及ビ將來施政ノ方法等ヲ公然新聞紙上ニ揭載セシメテ之ヲ天下ニ明示シ、人民ヲシテ政府施政ノ目的ヲ知ラシムルノ條規ヲ起サバ其利害得失ハ如何、而シテ又此條規ノ如キハ歐米各國ニ其例アル乎。

第三　法律ト行政規則トノ區別何如、

（甲案）

試草

附ロエスレル、モスセ兩氏答議

『本案ハ最初ノ命意ニ依リ君主ノ特權並ニ他ノ綱要ノ部分ヲ「プレアンブル」ニ讓リ務メテ條章ヲ簡省ニスルノ方嚮ヲ取レリ

第一試案ニハ說明ヲ附シタレドモ說明ハ之ヲ取捨定案ノ後ニ讓リ妬ク之ヲ抹殺シ今各條ニ附スルニ、ロエスレル、モセス兩氏ノ答議ヲ以テシタリ』

（井上）

朕

祖宗ノ遺烈ヲ承ケ、萬世一系ノ帝祚ヲ繼ギ、朕ガ親愛スル所ノ臣民ハ卽チ朕ガ祖宗ノ惠撫慈養シ玉ヒシ所ノ臣民ナルヲ思ヒ、其康福安寧ヲ保護シ、其懿德智能ヲ自由ニ發達セシメンコトヲ願ヒ、又宇內變遷ノ世運ニ當リ往古來今ノ大勢ヲ察シ、我臣民ト俱ニ文明ニ進ムノ必要ヲ認メ、一國ノ事ハ一國臣民ト之ヲ公共ニシ、諸般ノ法律ニ就キ得失ヲ諮詢（コンシルテー）スルノ便ヲ廢メンコトヲ欲シ、乃明治十四年十月二十四日ノ詔命ヲ履踐シ、茲ニ大命ヲ下シ、首メニ主權ノ統一ヲ明ニシ、次ニ國民ノ公義ト權利トヲ示シ、次ニ上下議院ノ組織權限ヲ定メ、又行政司法諸部及諸般ノ制置（インスチチユーション）ヲ係擧シ、各々蹤ユベカラザルノ範圍ヲ明確ニシ、以テ建國根本ノ大典トシ、朕ガ子孫及臣民タル者ヲシテ永遠ニ循守スル所ヲ知ラシム。

國ノ大政ハ朕ガ之ヲ

祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ。朕及朕ガ子孫ハ將來此憲法ニ循由シテ之ヲ施行シ、及施行セシメントス。法律ヲ布告シ法律ヲ施行スル爲ニ、及國ノ安寧秩序ヲ保持スル爲ニ、必要ナル命令ヲ下附シ、又ハ下附セシメ、文武ノ官制及俸給ヲ定メ、官吏ヲ任免シ、爵位勳ヲ叙授シ、陸海軍ヲ統率シ、及編制セシメ、兵役ヲ點徵シ、外國ト戰爭ヲ宣告シ、和平ヲ講盟シ、交際ノ條約ヲ締ビ、及交際スルハ總テ朕ガ攬ル所ノ大權（プレロガチフ）ナリ。

上下議院ハ二十三年ノ冬期ヲ以テ之ヲ開キ、二十四年度ノ豫算ヲ議スルニ適當ノ時間ヲ誤ラザラシムベシ。開會以後ニ制定スベキ諸般ノ法律及新ニ租稅ヲ徵シ、國債ヲ起シ、紙幣ヲ發行シ國庫保證ノ事業ヲ許可スルノ類ハ、朕自發（イニシアテフ）議ノ權ニ據リ起案（プロゼット）ヲ草セシメ、之ヲ議院ノ議ニ

付シ、議成ルノ後ニ於テ更ニ朕ガ裁可ヲ經、之ヲ公布施行セシムベシ。

此憲法ヲ公布スル前、太政官ノ布告及命令其ノ一般及永久ノ爲ニ發布シタル者ニシテ、此憲法ニ矛盾セザル者ハ、法律規則條例又ハ何等ノ名稱ヲ用ヒタルニ拘ラズ、更ニ新法ヲ以テ之ヲ改正スルニ至ル迄ハ、總テ將來ニ遵行ノ力ヲ有セシムベシ。此ノ憲法ヲ公布スル前ニ既ニ定メタル國債、國庫ノ保證及年金ハ、將來年度豫算ノ議ニ由テ之ヲ變更スルコトヲ得ザルベシ。

將來若シ此憲法ノ中或ル條章ヲ改正スルノ必要ナル事宜ヲ見ルニ至ラバ、朕及朕ガ繼統ノ子孫ヨリ發議ノ權ヲ執リ、起案ヲ以テ之ヲ上下議院ニ付シ、上下議院ハ其出席員全員ノ四分ノ三ニ充テ、三分ノ二以上ノ多數ヲ得テ之ヲ可決スルニ非ザレバ、敢テ專ニ之ヲ紛更スルコト勿ルベシ。其他上下議院ハ憲法改正ノ建議（プロポジション）ヲ提出スルノ權ナキモノトス。

朕ハ國ノ隆盛ト臣民ノ幸福トヲ以テ、朕ガ中心ノ欣榮トシ、上ハ祖宗ニ對シ、謹デ盟誓ヲ宣ベ、下ハ朕ガ現在及將來ノ忠實ナル臣民ノ爲ニ憲法ヲ公布スルコト此ノ如シ。自今朕ガ在廷ノ大臣ハ朕ガ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任ズベク、朕ガ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フベシ。

甲案

目次

第一　根本條則
第二　國民
第三　內閣及參事院
第四　元老院及代議院
第五　司法權
第六　租稅及會計
第七　軍兵
計　七十二條

○第一章　根本條例

第一條

日本帝國ハ萬世一系ノ天皇ノ治ス所ナリ

第二條

皇室典範ノ定ムル所ニ依リ、皇子孫之ヲ繼ス

第三條

天皇ハ大政ヲ總攬シ、此憲法ニ於テ勅定スル所ノ條款ニ循ヒ之ヲ施行セシム

(問)

國王ハ國權ノ肖像(シンボル)ナリ、故ニ獨逸各國ノ憲法ニ明言シタルガ如ク、國王ハ一切ノ諸般ノ政權ヲ統攬シ、憲法ニ遵ヒ之ヲ施行スル者ナリ。此ノ主義ニ依レバ國王ニハ特權(スペシヤルプレロカチフ)アルノ理ナシ。何トナレバ既ニ統ヘザルノ政權ナキトキハ又特有ノ權アルベカラザルナリ。

英國及其他ノ立憲國ニ於テ、國王ノ特權(ローヤルプレロガチフ)ト云ヘル文字ヲ解釋スルニ、宣戰講和ノ權、議院開閉ノ權、貨幣鑄造ノ權等ヲ以テシタルハ、其他ノ立法ノ權司法ノ權ヲ以テ之ヲ國王ヨリ分割シ、國王ノ掌握ニ置カザルノ意義ヲ顯シタル者ナリ。抑宣戰講和ノ權等ノ如キハ國王ノ行政權ニシテ、立法部ノ參預ヲ假ラザルガ故ニ、他ノ諸般ノ國權ヲ施行スルニ比較シテ稍ヤ制限少キ王權ナリト雖、是亦國王ノ統ル所ノ諸權中ノ一部ナルニ過ギズ。此レヲ以テ國王ノ特權トシ、全般ノ政權ヲ狹隘ナル範圍内ニ限局スルノ賠償トナスベキ者ニ非ザルナリ。故ニシユルチエー氏ハ憲法ニ國王ノ特權ヲ列擧スルヲ以テ、獨乙ノ立憲主義ニ背クモノトシタリ。

此ノ問題ニ付テ我ガ明治十五年即千八百八十二年ニ於テ已ニ貴下ノ敎ヲ領シ、普國ノ憲法ニ倣ヒ端嚴ナル正條ヲ以テ王權ヲ掲グルノ方法ヲ取ルベキコトヲ示サレタリ。

今又先日貨幣ノ事ニ付明確ナル答議ヲ得タルノ續キヲ以テ、更ニ憲法ニ掲グベキ王權ノ要目ハ何々ナル乎、何等ノ總括的ノ條ヲ設クベキ乎、又ハ各別ニ數條ヲ設クベキ乎、貴下ノ意見ヲ以テ略起案ノ目的ヲ示サレンコトヲ望ム。

(答)

國王ノ特權(プロレガチフ)ナル意義ハ確定シタルモノニ非ズ。英國ニ於テハ通例議院ノ承諾如何ニ拘ラズ

國王ニ歸スル所ノ權利卽チ議院ノ權力ニ對シ、國王固有ノ不羈獨立ヲ維持スル權利ヲ特權ト云フ。今玆ニ英國々王ノ特權ヲ揭グルコト左ノ如シ。

第一　立法上ノ特權（レギスラチーフエ・プレロガチフ）　卽チ過日陳述シタル範圍ニ於テ勅令ヲ發スルノ權。

第二　議院上ノ特權（ワハルトフメンタリツシエプレロガチーフ）　卽チ議院ヲ招集シ延期シ解散スルガ如キ議院ニ對スル國王ノ權利。

第三　行政上ノ特權（アトミニストラチーフエ・プロレガチーフ）　卽チ公共ノ安寧ヲ維持シ（平和ヲ維持スルコト）戰爭及公共防衛外交國王ノ收入通商國王ノ權力ヲ委托スルコトニ關スル國王ノ權利。

此レニ由テ之ヲ觀レバ、英國々王ノ特權ト云ヘル語ハ、議院ト共同執行スルノ權利ニ對シタル名義上國王ノミニ歸スル立法及行政（エキセクチーフヂワルト）權ヲ謂ヘル名稱ト混ズルモノトス。

獨逸國ニ於テハ特權ナル語ヲ用キルコト甚ダ稀レニシテ、通例「ホルチーヘンテ・ケワルト」或ハ「エキセクチーフゲワルト」ナル語ヲ用キ、近來ニ至リテハ又「レギールングス・ゲワルト」ナル語ヲ用キタリ。「レギールングスゲワルト」ナル語ハ此場合ニ適當ナラザルモノヽ如シ。何トナレバ「レギールング」トハ一般ニ國權ノ最上ノ執行ヲ稱スベキモノナレバナリ。例ヘバ法律ノ裁可（サンクシヨン）ノ如キ卽チ一ノ政務（レギールングアクト）ニシテ、大臣ノ副署アルヲ要スル者ハ是レ「ホルチーヘンデグワルト」ノ處置ニ非ズ。獨逸國ニ於テハ又往々「コローンレヒト」ナル語ヲ用ユ。

此語ハ之ヲ國王親カラ自由ニ執行シ得ル權利ノ一部分ニ用ユ。例ヘバ赦免（ベクナデイグンク）ノ權、貴族ヲ叙任スルノ權、勳章ヲ與フルノ權、宣戰ノ權等ナリ。此「コローンレヒト」ナル權利ノ語ノ範圍ハ確定シタルモノニ非ズト雖、實際ノ意義ハ議院ニ於テ之ヲ論議妨害スルヲ得ズ。從テ又議院ニ對シ大臣之ガ責任ヲ負フヲ要セズト云フニ在リ。此「コローンレヒト」ノ執行ハ元來政務ニ屬スルモノナルガ故ニ、均ク大臣ノ副署アルヲ要ス。然ルニ勳章ヲ與フルガ如キ事件ニ關シテ其反對說ヲ唱フル者ナキニ非ズ。但此場合ニ於ケル副署ハ大臣ニ主權者ニ對スル責任ヲ負ハシムルニ止マルノミ。憲法ニ於テハ「コローンレヒト」ヲ以テ一種特別ノ權利トシテ記載シタルモノアルヲ見ズ。

或ル論者ハ單ニ國王ノ議院上ノ特權ヲ指シテ、之ヲ特權ト謂フアリ。「ツエツプル」氏ノ如キ是レナリ。然レドモ此解釋ハ狹キニ失スルコト明カニシテ實際ニ効用ナシ。

往古普ク用キタル至尊（ホーハートレヒト）權ハ一般ニ國權ヲ總稱セシモノナルガ故ニ、之ヲ特權ノ意義ト比較スルトキハ其範圍廣大ナリ。故ニ特權トハ國王特有ノ至尊權ト稱スルヲ得ベシ。上段ニ陳ベタル如キ狹義ニ於テ「コローンレヒト」ヲ分別スルコトハ必要ナラズ。何トナレバ各種至尊權ノ性質ヲ憲法ニ明完スルノ必要ナク、此性質ハ國家生活ノ實際ニ於テ自ラ判然タレバナリ。

特權ノ解釋ニ英國ニ於ケルガ如ク其一部ヲ立法權ニ屬セシムルト、普國ニ於ケル其全部ヲ擧

ゲテ行法權ニ屬セシムルトニ從テ異同アリ。而シテ普國ニ於テハ法律ノ公布臨時（プロフイソーリツシユ・ケゼツク）ノ法律ノ發行サヘモ亦行法權ニ屬セシム。（普國憲法第四十五條第六十三條）此事タル憲法ニ於テ各個ノ權利ヲ列擧スルハ實際ニ於テ一モ効用ナク、其解釋ノ異ナルニ依テ行法權ノ意義ヲ晦昧ナラシムルガ故ニ寧ロ全ク此語ヲ刪除スルノ愈レルニ若カズ。又國權ノ全部ヲ國王ニ屬スルモノトセバ、故ラニ行法權ナル語ヲ掲グルノ必要アルコトナシ。加之或ル論者ノ說ニ從ヘバ、獨リ法律ヲ執行スルノ權ヲ指シテ行法權ト謂フガ故ニ、今此語ヲ避ルコト尤可ナルガ如シ。蓋此說ノ如キハ限狹ニ失シテ全ク國家活動ノ義ニ背戾スルモノト謂フベシ。

國王ノ立法權或ハ少クモ其詳細ナル規定ハ議院ノ事ニ關スル條章ニ掲グルヲ可トスベキカ。故ニ予ハ宜ク修正ヲ加ヘラレタル上、左ノ條々ヲ憲法ニ掲ゲラレンコトヲ可ナリト信ズ。

第一條　皇帝ハ神聖ニシテ侵スベカラズ

皇帝ニ對スル民事上ノ請求ハ、皇帝ノ經費ヲ管理スル者ニ對シテ之ヲナスベシ。

第二條　皇帝ハ帝國ノ首長ナリ。一切ノ國權ハ皇帝ノ一身ニ集合シ、皇帝ハ此憲法ニ親ラ定メタル規定ニ從ヒ之ヲ執行ス

第三條　皇帝ノ一切ノ政務ニシテ効力ヲ有スル爲ニハ一大臣ノ副署アルヲ要シ、皇帝ノ大臣ハ責任ヲ有ス。

第四條　皇帝ハ法律ヲ裁可シ、其公布及執行ヲ命ズ。

第五條　皇帝ハ大臣ヲ進退シ、法律ニ特別ノ規定ナキトキハ公務ニ於ケル諸官ヲ任命ス。

第六條　皇帝ハ一切ノ行政（フエルワルツング）ヲ組織シ其遵奉スベキ規準及其設クベキ制度ヲ定ム。

第七條　皇帝ハ其命令ヲ施行スル爲刑罰ヲ附スルノ權アリ。

第八條　皇帝ハ公共ノ秩序及安寧ヲ維持スル爲ニ必要ナル命令ヲ發スルノ權アリ。

皇帝ハ戒嚴ヲ宣布スルコトヲ得、其後ノ手續ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第九條　公共ノ急迫（ノートスタント）ノ場合ニ於テ、及公共ノ危難ヲ防護スル爲ニ、皇帝ハ內閣ノ責任ヲ以テ法律ノ効力アル命令ヲ發スルコトヲ得。

此命令ハ次回ノ議院ニ提出シテ其承諾ヲ受クベシ。

第十條　皇帝ハ特權（ワリウヰレージ）ヲ與ヘ及或ル場合ニ於テ法律ノ義務ヲ特免スルノ權アリ。但憲法及既權ヲ害スベカラズ。

第十一條　皇帝ハ赦免（大赦（アムネスケ））ノ權ヲ有ス。

第十二條　皇帝ハ貴族ヲ叙任シ及徽章ヲ與フルノ權ヲ有ス。

第十三條　皇帝ハ陸海軍ヲ指揮シ、平時戰時ニ於ケル兵員ヲ定ム。

第十四條　皇帝ハ宣戰講和ノ權ヲ有シ、戰權ヲ執行スルニ必要ナル命令ヲ發ス。

第十五條　皇帝ハ外國ニ對シ帝國ヲ代表シ、外國ト條約ヲ締結ス。

此ノ條約ハ之ヲ公布スルニ依テ法律ノ効力ヲ得。

第十六條　皇帝ハ議院ヲ開閉ス又議院ヲ延期解散スルコトヲ得。

第十七條　皇帝ハ其權利ノ執行ヲ他人ニ委任スルコトヲ得。

第十八條　攝政ヲ置クノ場合ハ、家憲ヲ以テ之ヲ定ム。攝政ハ皇帝ニ歸スル所ノ權利ヲ皇帝ノ名ヲ以テ執行ス。

攝政ヲ置クノ間ハ憲法及家憲ヲ變更スルコトヲ得ズ。

第十九條　皇帝及皇族ニ國庫ヨリ支辨スベキ收入ハ家憲ヲ以テ之ヲ定ム。

第二十條　皇帝ハ男系皇族ノ權利ニ干涉スル限ハ、其承諾ヲ得テ家憲ヲ制定シ、一般ニ通知遵奉セシムル爲、之ヲ內閣ニ下付ス。

家憲憲法ハ議院ノ承諾ヲ要セズ。但此レニ依テ憲法ヲ變更スルコトヲ得ズ。

予ハ以上ノ皇帝ノ特權ヲ可成完全ニ列擧シテ通覽ニ便ナラシメタリ。普國ニ於テハ此列擧ニ遺漏多キガ故ニ疑問ノ起ル毎ニ普通法典或ハ其他ノ法律ノ定タル所ニ依リ、從來現行スル所ノ規準ヲ尋ネザルベカラザルコトアリ。前ニ揭ゲタル第二條アルニ依リ、日本ニ於テモ或ル特權ヲ削除シ得ベシト雖、直チニ憲法ニ就テ其權ヲ尋ネ得ルハ甚ダ便宜ナルガ故ニ、其儘之ヲ保存スルコトヲ可トス。何トナレバ理論上推究及外國例ヲ取ルガ如キハ遂ニ不安全ナルヲ免レザルバナリ。

二月八日

ハ・ロエスレル　拜

（問）

國王ハ國權ノ肖像（シンボル）ナリ。故ニ獨逸各國ノ憲法ニ明言シタルガ如ク、國王ハ一切ノ諸般ノ政權ヲ統攬シ、憲法ニ遵ヒ之ヲ施行スル者ナリ。此ノ主義ニ依レバ國王ニハ特權（スペシヤルプレロガチフ）アルノ理ナシ。何トナレバ既ニ統ベザルノ政權ナキトキハ又特有ノ權アルベカラザレバナリ。

英國及其他ノ立憲國ニ於テ、國王ノ特權（ローヤルプレロガチフ）ト云ヘル文字ヲ解釋スルニ、宣戰講和ノ權、議院開閉ノ權、貨幣鑄造ノ權等ヲ以テシタルハ、其他ノ立法ノ權司法ノ權ヲ以テ、之ヲ國王ヨリ分割シ、國王ノ掌握ニ置カザルノ意義ヲ顯シタル者ナリ。抑宣戰講和ノ權、議院開閉ノ權等ノ如キハ國王ノ行政權ニシテ立法部ノ參預ヲ假ラザルガ故ニ、他ノ諸般ノ國權ヲ施行スルニ比較シテ稍ヤ制限少キ王權ナリト雖、是亦國王ノ統ル所ノ諸權中ノ一部ナルニ過ギズ。此レヲ以テ特別

ノ權利トシテ、國王ノ政權ヲ狹隘ナル範圍ノ內ニ限局スルノ賠償トナスベキ者ニ非ザルナリ。故ニシユルチエー氏ハ憲法ニ國王ノ特權ヲ列擧スルヲ以テ、獨逸ノ立憲主義ニ背クモノトシタリ。

今新ニ憲法ヲ起スニ當テ、帝王ノ政權ヲ擧ルニ如何ナル方法ヲ以テ最モ適當ナリトスルヤ、貴下ノ意見ヲ自由ニ敎示セラレンコトヲ乞フ。

（答）

憲法ニ於テ帝王ノ權利ヲ如何ニ定ムベキヤノ問題ニ關スル意見

第一　貴下ノ下問ノ主意ニ從ヘバ此問ハ王位繼承、攝政、帝室ノ財產（經費等）ニモ亦皇族ニ對スル國王ノ家長權ニモ關セザルモノト信ズ、此等ノ事ニ關シテモ亦鄙見ヲ陳ブベクンバ幸ニ通知アランコトヲ乞フ。

第二　何レノ憲法ニ於テモ國王ハ侵スベカラズトノ明文ヲ揭グルハ皆同ジ。或ル憲法ニ於テハ之ニ加フルニ神聖ナルノ語ヲ以テス。然レドモ此語ハ法律上ノ效力ヲ有セズ。又皇帝ノ至尊ナルコトハ宗敎ノ主義ト共ニ日本國民ノ思想ニ銘刻シアルガ故ニ、皇帝ト國民トノ間ニ於ケル此純然タル德義上ノ關係ヲ憲法ニ揭グベキ政事上ノ必要ナキノミナラズ、予ハ之ヲ揭グルハ却テ弊害ヲ生ズベシト信ズ。何トナレバ此レガ爲國民古來ノ主義ヲ破リ又國王ノ至尊ハ憲法ニ依テ始テ生ズルヤノ思想ヲ起サシムルノ恐レアレバナリ。

之ニ反シテ皇帝ノ身體ハ侵スベカラズトノ文ヲ憲法ニ揭グルハ可ナリ。此條ノ效力ハ世人ノ普ク知ル所ニシテ、國王ノ身體ハ特別ニ防護スベキノ義ヨリ生ズルモノニシテ、刑法ニ於テ至尊ニ對スル犯罪ヲ處刑スルハ此レガ爲ナリ。又一ニハ國王ノ上ニ立ツ權力ナキガ故ニ、國王ニ責ヲ負ハシムルコトヲ得ズトノ義ヨリ生ズルモノニシテ、其無責任ナルコトハ國王ノ政務ニ關スルト一個人タルノ行爲ニ關スルトヲ問ハザルナリ。

然レドモ政務上ノ無責任ハ大臣責任ニ關スル規定ヲ以テ必要ナル補充ヲ得ルモノナリ。

一私人タル行爲ニ關スル無責任ニ在リテハ、國王一個人トナリ財產權ノ訴訟ニ於テ自國ノ裁判所ニ出訴シ或ハ出訴セラルベク、及其規準ヲ定メザルベカラザルコト獨逸法律ニ規定シタルガ如シ。但予ノ見ル所ニ據レバ此事ハ憲法ニ揭グベキニ非ズシテ、訴訟法或ハ特別ノ法律ニ讓ルベキナリ。此レニ依テ之ヲ觀レバ普國憲法第四十三條及第四十四條ト同一ナル個條ヲ憲法ニ揭グルヲ可トス。

第三　政府ニ對スル財產上ノ請求ヲ除クトキハ、國王ノ權利ハ左ノ二樣ニ區別スルヲ得ベシ。

（伊）榮譽權卽至尊權

（呂）行政權

至尊權ハ國王ノ至尊ナル地位ヲ表明スルノ權ナリ。通常此權ニ屬スルモノハ特別ノ尊稱、飾器、兵事上ノ榮譽、國民ノ喪服、誦經（キルヘンゲボート）宮殿ニ關スル權利ナリ、尊稱、爵位、勳章ヲ與ヘ貴族ヲ叙スルノ權モ亦此ニ屬ス。

予ハ此等ノ事ヲ憲法ニ揭ゲザルヲ可トス。

予ノ所見ニ依レバ、憲法ヲ以テ全ク新法律世界ヲ創出スベカラザルコトヲ確執スベシ。憲法ヲ創設スルニハ左ノ主義ニ依リ、其明文ヲ揭グルハ法律上及政事上ノ理由ニ於テ甚緊要ナリ。

憲法ハ臣民ニ安全ナル各個ノ權利ヲ保證シ、國權ヲ施行スルニ當リ、國會ノ參與ヲ制定スベシト雖、其他ハ法律上ノ現在ノ狀況ヲ變更セズ。

歷史上ノ聯絡ヲ維持シ、且國權及皇帝ノ權利ハ憲法ニ據テ始テ生ズト云フガ如キ、其地位ノ爲ニ危險ナル思想ヲ防遏シ得ルハ只此方法アルノミ。故ニ從來ノ國法ニ從テ、疑ナク國王ニ歸スルガ爲ニ特ニ憲法ニ揭グルヲ要セザル所ノ權利ニ對シ、今此レニ依テ始テ之ヲ認許スルガ如キノ觀相ヲ呈スル條規ヲ設クルコトハ總テ之ヲ避ケザルベカラズ。

以上ノ理由ニ因リ予ハ皇帝ノ至尊權ヲ憲法ニ揭ゲザルヲ可トスルガ故ニ、皇帝ハ一切ノ榮譽ノ源泉ニシテ獨リ榮譽ニ關スル徽章ヲ與フルノ權ヲ有スト謂ヘル日本從來ノ法律ニ依テ、既ニ

確定シタルモノハ今之ヲ憲法ニ揭グベカラズト信ズ。

第四　本來ノ行政權トハ國王國務ヲ行フ爲ニ有スル所ノ諸權利ヲ指スモノナルコトハ世人ノ知ル所ナリ。

予ハ貴問ノ關スル所ハ主トシテ此行政權ニ在ルコトト信ズ。

予ノ所見ニ依レバ憲法ノ構制ハ全ク此問ニ關スル答如何ニ依テ定マルベシ。此事ニ關シテ二個ノ注意スベキ要點アリ。

一　既ニ陳ベタルガ如ク憲法ヲ以テ一切ノ公權ヲ新定スベキヤ、或ハ現行ノ法律ハ大體ニ於テ之ヲ維持シ新設ノ必要アルモノノミヲ制定スベキヤ是レナリ。

予ハ後者ノ方法ヲ正當ナリト信ズ。予ノ見ル所ニ依レバ日本今日ノ狀況ニ於テ國會ヲ設クルガ爲ニ騷亂ヲ引起サズ、且帝王ノ權利ヲ十分ニ維持スルニハ此方法ニ依ルニ非ザレバ能ハズ。命ヤ皇帝ハ一切ノ國權ヲ掌握スルハ疑フベカラザルコトニシテ、一切ノ國務ヲ盡スニ必要ナル諸權利ヲ一身ニ總攬スルモノナリ。皇帝ノ此權利ヲ有スルハ憲法アルニ依テ然ルニ非ズ。從來ノ國法ニ依テ既ニ然ルナリ。又皇帝ハ王位ヲ得有シ、或ハ之ヲ維持スル爲、國民或ハ國會ト約束ヲ結ブヲ要セズ。憲法ノ皇帝ニ對スルハ其白耳義國王ニ對スル如ク撰擧條約ニ非ザルナリ。皇帝及其輔弼ニ於テ國君モ亦人生免ルベカラザル短所ヲ有スル事ヲ認メタルガ故ニ、國權

ヲ施行スルニ當リ一定ノ制限ニ服從スベキコトヲ決心シタルナリ。

然レドモ羅馬人種ノ憲法ニ倣ヒ、國君ノ專有スル權利ヲ憲法ニ列擧スルハ全ク日本從來ノ沿習ニ衝突スルモノノ如シ。普國憲法ノ羅馬人種ノ憲法ニ倣ヒシハ誠ニ痛歎スベキコトナリ。

此方法ハ沿習ニ矛盾スルノミナラズ、政事上ノ危險アルハ勿論、更ニ君主ノ地位ヲ侵害スルニ至ルベシ。又此方法ハ從來君主ノ有セザル權利ヲ憲法ニ依テ始テ得有セント欲シ、且憲法ニ揭ゲタル權利ノ外ハ一モ之ヲ有セザルガ如キ思想ヲ生ゼシム。如此シテ大ニ君主ノ權利ヲ妨害スルハ甚ダ覩易キノ事ナリ。

二　此思考ノ方向ヨリシテ第二ノ點ニ進ムベシ。予ノ見ル所ニ依レバ此點ハ憲法ヲ設クルニ當リ大關係ヲ有スルモノト信認ス。此點トハ何ゾ。國權分離論是レナリ。而シテ此論ノ主意ハ既ニ世人ノ熟知スル所ナルヲ以テ、此ニ之ヲ贅セズ。今ヤ此論旨ニ依テ國權ヲ同等ナル各機關ニ分割スルニ於テハ、其他ノ機關ト均ク國君ノ權利ヲ憲法ニ揭グベキハ論ヲ待タズ。卽チ分割ノ際君主ニ歸シ、之ヲ憲法ニ揭ゲタル權力ノミヲ有セシムルハ此論ノ止ムヲ得ザル結果ナリ。

民主權ニ基ケル此君主ノ地位ハ、獨逸國法論ニ於テハ熱心ヲ以テ排斥セラルヽモノニシテ、又日本歷史上ノ權利及實際ノ需用ニ適セザルコトハ固ヨリ證明ヲ待タザルモノト信ズ。

日本憲法ニ於テ明文ヲ揭グベキ皇帝ハ國家ノ首長ニシテ、一切ノ國權ヲ一身ニ總攬スト云フコト是レナリ。此事ハ獨逸諸國ノ憲法ニ揭ゲザルモノナシ。然シ普國ノ憲法ニ此レヲ揭ゲズ。白耳義國ノ模範ニ依テ各權利ヲ列擧シタルハ、當時勢力ヲ占メタル國法論旨ノ曖昧ニ基クモノニシテ、普國憲法ハ國權分離ヲ採用シタルノ誤謬ヲ揭ゲタリ。普國國王ニシテ「ホーヘンツオルレルン」家タルノ勢力ヲ有セザリシナランニハ、如此憲法ニ由リ羅馬人種ノ立憲君主ノ地位ニ擠陷セラレシナルベシ。

君主制ノ本體ヨリ觀ルモ、統一ナル機關タル國家ヨリ論ズルモ國權全體ノ君主一身ニ集合スル必要アルハ論ヲ待タズ。國權ノ施行上ニ於テ多少ノ制限ヲ受クルハ國君ノ地位ト相悖ル所有ルニ非ズ。而シテ此制限ハ他ノ上位ヲ占ル權力、或ハ契約ヨリ負ハシメラレタルモノニ非ズ。自己ノ獨斷ヲ以テ之ヲ甘受シタルモノナリ。要スルニ憲法ハ法律上君主ガ自ラ進デ自己ヲ制限シタルモノナリ。故ニ皇帝ハ自己ノ有スル國權ヲ憲法ニ從テ施行スルノ明文ヲ揭グルニ於テハ、又同時ニ皇帝ハ自己ノ自由意見ニ依テ憲法ヲ設ケ、將來此レニ依テ統御スルノ明文ヲ揭グルニ於テ英佛主義ノ擴充ニ依リ、日本ニ漸長シ來レル民主權ノ說ヲ峻拒セザル可カラズ。

如此規定ノ模範ハ巴威爾憲法ノ第二章第一條及其詔勅ニ揭ゲタリ。

日本憲法ニ於テ國權ヨリ生ズル諸權利ヲ列擧スルノ規定ヲ設クルハ國法ノ主義ニ戻リ、且政事上ノ得策ニ非ズ。皇帝ハ憲法ニ於テ制限ヲ受ケザル限リハ國憲ノ施行ニ制限ヲ受ケザルコト

ハ上ニ陳ベタル論點ヨリ生ズ。故ニ憲法ハ全體ノ主義ヲ確定シ、君主ノ權利ヲ安全ナラシメタル上ハ、君主自ラ其權力ヲ制限セント欲スル法章ニ限リ之ヲ揭グベキナリ。

此主モナル君權ノ制限ハ卽チ議院ニ與フベキ權利ナルコトハ固ヨリニシテ、其程度ハ玆ニ之ヲ辯論セズ。此ニ論ズベキ所ハ議院ニ關シテハ皇帝ニ關シテ陳ベタル所ト全ク反對ナルベキコト是レナリ。議院ノ權利ハ推測ヲ以テ之ヲ判定スベカラズ、必ズヤ皇帝ノ制定シタル憲法ニ於テ特ニ裁可セラレタルモノニ限ルベキコトヲ明ニ憲法ニ揭ゲザルベカラズ。議院ニ此權利ヲ與フルモ、皇帝ハ一切ノ國權ヲ一身ニ總攬スルノ原則ヲ動カスモノニ非ズ。議院ハ只國權ノ施行ニ參與スルノミ。而シテ其參與タル普通一般ノ事ニ涉ルモノニ非ズ。獨リ憲法及法律ニ依テ之ヲ許與シタルモノニ限ルノミ。

此原則ニ依テ憲法ヲ設クルトキハ君主制ノ主義ヲ完全ニ維持スルヲ得。此ニ反シ憲法ニ皇帝ノ權利ヲ列擧スルトキハ其主義ヲ危カラシムルモノト謂フベシ。

但シ皇帝ノ權力ヲ制限スルモノニ限リ其權利ヲ明言スベキモノニシテ、卽チ左ニ之ヲ列擧セン、

(伊)　議院ニ關シテハ之ヲ召集、延期、開閉解散スルノ權ヲ安全ナラシムベシ。

(呂)　立法ニ關シテハ裁可ノ權及ビ勅令ヲ發スルノ權ヲ安全ナラシムベシ。但此事ニ關シテ他ノ答案ニ鄙見ヲ陳ブルアラントス。

(波)　議稅權ヲ與フルニ依リ政府ノ費目ヲ處分スルコトニ關シテ皇帝ノ權利ヲ保全スベシ。

(仁)　憲法ニ依テ裁判所ヲ獨立セシムルニ於テハ赦免權ニ關シテ皇帝ノ權利ヲ保全スベシ。

二月廿二日

憲法ニ君權ヲ列擧スベキヤ否ヤノ問

（井　上）

ア・モスセ拜

憲法ニ君主ノ大權ヲ揭グルニ甲乙二樣アリ。卽チ甲ハ「バヴイエル」憲法第二章第一條「ヴユルタンビユルグ」憲第四條「サキス」第四條ノ如ク君主ハ國ノ元首トシ一切ノ國權ヲ總攬ストノ一條ヲ揭ゲテ他ニ諸般ノ王權（例ヘバ宣戰講和ノ權官吏任命ノ權等）ヲ各別ニ記載セザル者ナリ。

乙ハ佛國ノ王政又ハ帝政ノ時ノ憲法及白國普國ノ憲法ノ如ク、君主權ノ個條ヲ各別ニ記載シ、各條ニ列叙シテ以テ議院又ハ司法權トノ權限ノ區別ヲ判明ニスル者是ナリ。

第一ノ方法ハ積極ノ記載法ニシテ廣汎ノ意義ヲ示シ、卽チ君主ノ大權ハ憲法ノ正條ヲ以テ之ヲ制限スル事件ヨリ外ハ、一切ノ分派ニ於テ之ヲ總攬セザルコトナシトノ意義ヲ示ス者ナリ。第二ノ方法ハ是ニ反對シテ消極ノ記載法ニシテ、限局ノ意義ヲ示シ、卽チ國權ノ君主ニ屬スル憲法ノ正條ヲ以テ之ヲ付與スルノ事件ニ限リ、其正條ナキ者ハ君主ノ權ニ屬セズトノ意義ヲ示ス者アリ。

右甲ト乙トノ方法ノ一ハ何レガ尤モ我國ノ憲法ニ適當ナル乎ノ問題ハ、我國ノ立憲ノ新世界ニ於ケル無二ノ重要ナル事件ナリ。今試ニ左ノ一說ヲ述ベテ以テ識者ノ判斷ニ任セントス。

曰、第一乙ノ方法ハ我國ノ憲法ノ體裁ニ適セザルナリ。何トナレバ我ガ憲法ハ　天皇ノ聖意ニ出デ、特別ノ恩旨ニ依ル者ニシテ卽チ親裁ノ憲法タリ。而シテ君民ノ叶議約束ニ成ル者ニ非ザルナリ。歐洲ノ憲法ハ其人民ノ不平ヲ滿足セシムル爲ニ發行セル變革（レウヲリユシヨン）ノ性質ナル憲法ニ論ナク、其他、縱令名義上ニ於テハ王家ノ恩典（オクトロエー）ニ出ル者（彼ノ佛國王政ノ「チヤルト」ノ如ク）ト雖、猶實際ニ於テハ多少國約（カピチユレーチオン）ノ性質ニ由ラザルハナシ。國約又ハ讓與（コンセシヨン）ノ約束ニ由テ成ル者ニ於テハ、乙ノ方法ヲ執ルコト固ヨリ當然ナルノミナラズ、此ノ方法ニ依ラザレバ王權ノ全部ヲ併セテ之ヲ失却スルノ恐アラントス。然ルニ我國ノ憲法ハ恩典（オクトロエー）ノ憲法（チヤルト）中ノ最モ純粹ナル王命ニ出ル者ナレバ、天皇自ラ發シ玉フ所ノ王命ニシテ、自ラ己レノ權力ヲ列叙セラルヽノ要用ナシ。故ニ乙ノ方法ハ我ガ憲法ノ體裁ニ適セズト謂フナリ。

第二、乙ノ方法ハ我國ノ憲法ノ歷史ニ於テ相當ナラザルナリ。何トナレバ各國ノ憲法ハ多クハ其ノ國創始ノ際、又ハ其國ノ變亂ノ後ニ成レル者ニシテ、王權ハ民權ト共ニ此ノ憲法ニ倚賴シテ、始メテ成立シ或ハ少クトモ存立ヲ得タル者ナリ。是レニ反シテ我國ハ民權ノ成立ハ憲法ニ倚賴スト雖、王權ハ決シテ憲法ノ力ヲ假リ始メテ成立シ、又ハ存立スル者ニ非ズ。各國ハ憲法アリテ始メテ王權アリト謂フコトヲ得ベキモ、我國ハ王權アリテ始メテ憲法アル者ナリ。故ニ憲法ニ王權ノ各條ヲ列擧スルハ、憲法ヲ以テ王權ノ創物者（クンアトール）タルニ疑ハシカラシムル者ニシテ我國ノ憲法歷史ノ相當ナル事狀ニ非ザルナリ。

第三、乙ノ方法ハ我國ノ憲法ノ主義ニ反對スル者ナリ。何トナレバ王權ノ各條ヲ列擧スルハ國王ヲ以テ行政ノ首長トスル彼ノ三權分立ノ主義ニ原由スル者ニシテ、此ノ列擧シタル各條ノ外ニ仍ホ幾許ノ國權アリテ、其一分ハ議院ニ屬シ、他ノ一分ハ司法部ニ屬スルコトヲ示ス者ナリ。抑々主權ハ制限スベクシテ分割スベカラズトハ獨逸憲法ノ緊要ナル主義ニシテ、我國ノ憲法ノ尤モ符合スベキ所ナルガ故ニ、乙ノ方法ハ我國ノ憲法ノ主義ニ反對スル者ナリ。

以上三個ノ理由ハ必ズ識者ノ同意セラルヽ所ナルコトヲ信ズルコトヲ得ベシ。但シ他ニ王權ヲ各條ニ列擧スルコトノ利益ヲ實際上ニ發見スベキニ於テハ、以上ノ理由ハ仍價値ナキ空論タ

ルニ歸セントス。故ニ左ニ又其果シテ實益アルヤ否ヤヲ研究スベシ。

王權ヲ逐條ニ列擧スルノ利益ハ何ゾヤ。蓋將來ニ於ケル世運ノ變化ハ今日ノ現況ヲ以テ豫想シ難キコトナシト謂フベカラズ。若シ後日ニ在テ王權施行ノ間ニ紛議ヲ生ズルコトアルカ、又ハ更ニ極言スルトキハ人民ニ不軌ノ心ヲ生ジ、進ンデ王權ヲ爭フノ時運ニ迄遭遇スルコトアラバ、憲法ニ列擧セル各條ハ卽チ王室ノ爲ニ金城鐵壁タルニ非ズヤ。云々。

予ハ此ノ說ヲ辯ジテ謂フコトヲ得ベシ。曰、列擧シタル條章ノ王權ノ防禦線ニ保固ヲ與フルハ、其ノ自己區域內ノ運動ニ向テ障碍ヲ與フルト得失相償ハザル者ナリ。王權ハ固ヨリ憲法ノ外ニ運動スルコトヲセザル者ナリト雖、亦其固有ノ領分ノ一部ヲ割讓シテ、己レハ他ノ一部分ニ退守スベキニ非ザルナリ。獨逸憲法ノ主義ニ從ヘバ王權ハ全部ヲ領スル者ナリ。故ニ其主法又ハ司法ニ於テハ之ヲ統攬スルハ其行政ニ於ケルト異ナルコトナク、唯其之ヲ施行スルニ各個ノ機關ニ委ヌルノミ。白國憲法ノ主義ニ從ヘバ王權ハ一部分ヲ領スル者ナリ。故ニ其行政部ト及立法司法ノ或ル部分ヲ除ク外、王權ハ國權ノ他ノ部分ニ對シ外類（エトラゾゼ）タル者ナリ。此レ其防禦線モ亦至テ薄弱ナル傾斜アルモノニ非ズヤ。

凡ソ立言法（レトリック）ニ於テ事物ノ全部（プロツク）ヲ顯スニハ單一ナル概括的（グネラル）ノ語法ヲ用ユベク、是ニ反シテ物ノ分割部ヲ顯スニハ許多ノ列敘シタル分析的ノ語法ヲ用ユベシ。王權ヲ列擧スルハ卽チ分割ノ意義ヲ表スル者ニシテ、其全部ノ意義ニ向テハ傷害ヲ與フルガ故ニ、人ノ感性ニ觸ル、意象ヲシテ王權ヲ薄弱ナラシムル照準點ニ向テ歸往セシム。此レ乃列擧ノ利益ヲ見ズシテ却テ其損失ヲ顯スモノナリ。

或ハ又左ノ言ヲ爲ス者アラン。曰、爾ノ說ノ如キハ專制ノ主義ヲ以テ憲法ヲ說ク者ナリト。此レニ答ヘテ云フベシ。獨逸ノ憲法ハ國王諸般ノ主權ヲ總攬スルコトヲ揭ゲテ而シテ之ニ次グニ左ノ言ヲ以テセリ。曰ク此ノ憲法ノ載スル所ニ循ヒ、主權ヲ施行スト、卽チ主權ヲ統攬シ之ヲ分割セズ。而シテ制限的ノ意義ヲ以テ之ヲ施行スルコトヲ顯ス者ニシテ是レ憲法ノ正當ナル目的ナリト。

（答）

貴下ノ論說ハ甚ダ眞理ニ合ヒ、而シテ其意味深重ナルハ疑ナシ。此問題ニシテ單ニ學說的ニ論ズルヲ得バ、予ハ必ズ貴下ノ論斷ニ同意スベシ。抑々皇帝ニ一切ノ國權ヲ有セシメ、只其一部ヲ執行スルニ當リテ制限ヲナストキハ、凡テ其他ノ部分ヲ執行スルニ當リテ制限ヲ受ケザルコト、憲法發布前ニ同キハ論理ノ法則上固ヨリ當然ナリ。然レドモ如此論理的ノ說ハ十分ニ公法上ノ問題ヲ支配スルヲ得テ、其方向ヲ誤ラズ、且其問題ニ對シ論理ノミヲ以テ判然シ利害及

黨派主義及其他實際上ノ需用ニ制縛セラレザル人物ニ向テノミ望ムベキモノナリ。然ルニ此要件ハ實際國家ノ生活ニ於テ甚ダ稀ニ見ル所ナルガ故ニ、此ヲ以テ一般ノ主義トシテ一定ノ法制ヲ創設スルコトヲ得ザルナリ。蓋通常ノ法律ニ於テモ普通ノ原則即釋義ニ依リ、論斷ヲ下スヲ得ルニ拘ハラズ、必許多ノ明文ヲ正條ニ掲グベキニ非ズヤ。況ンヤ憲法ノ規定ノ如キ、之ヲ通常ノ法律ニ比シテ其範圍廣大ナルモノニ在リテ、政府ト議院間ノ論理ニ放任スルヲ得ザル場合ニ於テヲヤ。予ガ國君ノ重要ナル權利ヲ掲グルノ必要アリト謂フ所以ハ主トシテ左ノ三ノ理由ニ在リ。

第一　立法權ハ國會ノ承諾ヲ經テ皇帝之ヲ行フベシ。今ヤ立法權ト施政權トノ區別ヲ設クルニ關ル問題ニ付、一般ニ法律釋義ヲ立テ、此區別ヲナサントスルモ能ハザルコトハ古來ノ實驗ニ徵シテ明カナリ。世人ノ言フ所ニ依レバ法律ハ最上權ヨリ出デタル通規ニシテ、人身若クハ所有權ノ自由ニ關ルモノナリト、然レドモ之ヲ各場合ニ適用スルニ當リテハ此釋義ヲ十分ナリトスルコト能ハザルノミナラズ。立法權ノ範圍ハ各國ノ實際ニ於テ仍疑義アルヲ免レズ。故ニ法律ノ釋義ハ之ヲ憲法ニ掲グズシテ翻テ皇帝ノ特權ヲ以テ處置スルヲ得ベキ事件ヲ明記シテ、以テ間接ニ立法權ノ區域ヲ限定スルコト必要ナルガ如シ。若シ然カセザルニ於テハ、皇帝ハ唯々尤モ狹キ意義ニ於ケル執行權、即チ單ニ法律ヲ執行スルノ權ヲ有スルモノトシ、其命令權ヲ執

行命令ニ止マラシムルノ危險ヲ生ズルモ料ラレズ。予ガ勅令ヲ以テ行政部ヲ組織シ、危急ノ場合ニ於テ勅令ヲ發シ、一時ノ效力ヲ以テ法律ヲ發スルガ如キ皇帝ノ權利ヲ憲法ニ明記スベシト信ズルハ卽チ此レガ爲メナリ。

第二　立法權ハ主權者ト議院トニ分屬シ、施政權ハ主權者ニ專屬スト雖モ世人ノ通常言フ所ナリ。彼ノ三權分立論ハ其價値曖昧ナルガ故ニ、之ヲ掲グルハ固ヨリ不可ナリ。國權ハ一切主權者ニ歸シ、之ヲ執行スルニ當リテ一定ノ制限ヲ受クルノミト云フハ、以上ノ論ニ比較シテ尤モ正當ナリ。而シテ如此制限ハ施政權ニモ之アルコトハ疑ヲ容レズ。豫算ニ於ケル國費、兵員、條約ニ關ル場合ノ如キ是レナリ。シカノミナラズ世襲財產ノ許可、特權（英國ノプライウエー（ディスペンサシオン）トビル）特許ノ下付、歸化ノ免許等ニ於テ主權者ハ議院ノ承諾ニ束縛セラル、國ナキニ非ズ。如此主權者ノ自由ナル施政權ノ區域モ判然セザルガ故ニ、國君ノ重要ナル權利ヲ明掲スルノ必要アルナリ。

第三　主權者自ラ自由ニ處置スルヲ得ル場合ニ於テモ、議院ノ議稅權ニ依テ制限セラルトハ現今歐洲諸國ニ於テ原則トスル所ナリ。例ヘバ主權者ハ議院ノ承諾ヲ經ズシテ戰ヲ宣告スルヲ得ルモ、議院ニ於テ此ガ爲ニ必要ナル金錢ヲ承諾セザルトキハ主權者ノ宣戰權ハ虛權ニ屬シ、又主權者ハ官吏ヲ任用スルヲ得ルモ、金錢ノ承諾ヲ得ルニ非ザレバ其任用ノ效力ナシ。國王ト議

院ノ問ニ起ル無數ノ爭論ハ此議稅權ヨリ生ズルモノニシテ、實際國王ノ權力ナキニ至ラシムルモノハ卽チ此權ナリ。予ハ日本憲法ニ於テ議院ノ議稅權ヲ此如擴張セズシテ、旣ニ陳ベタル如ク明文ヲ以テ或ル區域ニ止ムルヲ可トス。故ニ皇帝ノ憲法上ノ權利ニ基テ豫算ニ掲ゲタル政府ノ支出ニ對シテハ、議院ヲシテ喙ヲ容レシムルベカラズ。然レドモ皇帝ノ憲法上ノ權利ヲ列擧セザルトキハ如此明文ハ徒法ニ屬シ、議論百出スルニ至ルベシ。此場合ニ於テ論理的ノ論斷或ハ學說上ノ論文ニ放任スルトキハ議論ハ容易ニ分裂スルガ故ニ、豫メ法律ヲ以テ此爭論ヲ防遏スルヲ可トス。

故ニ國君ノ權利ヲ列擧シテ政務ノ重要ナル範圍內ニ爭論ヲ生ゼザラシメ、且後來皇帝ノ謙退及勢力ノ衰滅ニ依リ、皇帝ノ權力ヲ漸時議院及黨派ノ首領ニ推讓シテ國民ノ害ヲ來サシメザルハ實際上必要ナリトスルコト、予ノ所論ナリ。又日本人民ハ專ラ英語ヲ用キ居リ、英國及米國ノ國憲ヲ見聞シ居ルガ故ニ、其政事上ノ主義ハ日本國會ニ於テ必大ナル勢力ヲ占ムベキハ尤モ注意スベキノ一ナルガ如シ。故ニ今ニ於テ其豫防ヲナシ、憲法ニ皇帝ノ權力ヲ明記シ、紛議ヲ生ジ易カラザラシムルコト必要ナルガ如シ。

主權者ノ權利ヲ列擧スルハ實際各國ノ憲法ニ於テ見ル所ニシテ、唯其間ニ精粗ノ別及其位置ノ異ナルアルノミ。瓦敦堡ノ憲法ニ於テハ、別ニ政務ニ關ル一章（八十五條）ヲ設ケテ以テ此權利ヲ列擧セリ。索撒憲法ニ於テハ國王ノ命令權（八十七條八十八條）赦免權（五十二條）危急ノ場合ニ於ケル國際契約（百五條）ニ關スル明文アルノミナラズ、直接ニ國王ノ權利ヲ明言セザルモ國權ノ執行ニ關スル許多ノ規定ヲ掲ゲタリ。巴威里憲法ハ其第七章第三十條ニ於テ命令權第八章第四條ニ於テ赦免權ヲ掲ゲタリ。獨逸憲法ハ兵制ニ關ル第十一章第五十七條ニ於テ獨逸皇帝ノ權利ヲ列記セリ。北米憲法ニ於テハ立法權ノ掌握者タル國會ト施政權ノ掌握者タル大統領ノ權利ヲ詳記シ、國會ノ權利ハ施政權ノ重要ナル部分ニモ及ベリ。例ヘバ宣戰郵便廳郵便線路ノ設置、著作權ノ下附、陸海軍ノ制度是レナリ（憲法第一條ノ第八項、第二條ノ第一項第二項）千八百五十二年ノ佛國憲法（第三章第五條以下）及數多ノ獨逸各國ノ憲法モ亦然リ。千八百六十七年ノ施政權ノ執行ニ關スル墺國憲法、瑞典憲法第四條以下噠馬憲法第四條白耳義憲法第六十條乃至第七十六條伊太利憲法第三條乃至第十條荷蘭憲法第五十六條以下ノ如キモ亦同シ。故ニ主權者ノ權利ヲ列記スルハ殆ド各國ノ同キ所ナリト謂フベシ。

四月廿五日

ハ・ロエスレル拜

第四條

日本帝國ヲ組立テタル現在ノ疆土及附屬ノ島嶼ハ、統一ノ版圖ニシテ永遠分割スベカラズ。

○第二章　國民

第五條

日本帝國ニ於テ公權ノ享有ヲ得ル爲ニハ日本國民タルヲ必要トス。

日本國民タルノ身分ハ或ハ出生ニ由リ、或ハ法律ヲ以テ定メタル要件ニ從ヒ歸化スルニ由リテ之ヲ得。

（問）

各國ノ憲法ノ内ニ國民ノ權利ヲ得、又ハ失フノ約束ヲ明條ヲ以テ定ムルアリ。又ハ之ヲ別法ニ讓リ憲法ハ單ニ其別法ノ定ムル所ナルコトヲ示スモノアリ。此ノ二ツノ方法ハ何レガ尤便ナルヤ。

外國人ノ國民權利ヲ得セシムルニ於テ、通常歸化（オルデナルナチユラリザシヨン）ト大歸化（ナチユラリザシヨン）トヲ分テル國アリ。又編籍（デニザシヨン）ト歸化トヲ分テル國アリ。之ヲ寬ニスルアリ。其得失如何。乞教。

（答）

（第一）國民權ノ得有及脫除、就中歸化ニ關スル規定ハ各國多クハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ定メタリ。

普國憲法第三條ニ據レバ此ノ規定ハ一ノ法律ヲ以テ定ムベキモノナリ。千八百六十七年制定ノ塊國憲法第一條ニ據ルモ亦然リ。

バイエルン國ニ於テハ千八百十八年制定ノ憲法第四篇第一條及ビ之ニ屬スル附則第一、卽チ憲法ヲ以テ此件ヲ規定シタリト雖モ、現今ニ於テハ該國ニ於テモ亦他ノ獨逸諸國ト均シク、千八百七十年六月一日制定ノ國民權得有及失墜ニ關スル帝國法律ニ準フモノトス。故ニ獨逸及塊國ニ於テハ方今憲法上此件ニ關スル規定アルコトナシ。

佛國ニ於テハ往時ノ憲法卽チ千七百九十九年制定ノ憲法ニ於テハ、歸化ニ關ル原則ヲ定メタリト雖モ、其後特別ノ勅令及法律特ニ千八百十四年及千八百四十九年並ニ其他ノ勅令及法律ヲ頒布セラレタリ。且ツ民法ニ於テモ亦之ヲ規定セリ。

白耳義憲法第四條及第五條ハ歸化ニ關シ一ノ一般ノ規定ヲ揭ゲタリト雖モ、然レドモ亦之

ヲ特別法律及民法ニ讓レリ。此ノ件ニ關シ最近ノ法律ハ千八百八十一年八月六日制定ノ法律是レナリ。

英國ニ於テモ亦千八百七十年制可ノ特別ノ歸化法アリ。

普國民會ハ憲法ヲ議スルニ當リ國民權ノ得有及失墜ニ關スル原則ヲ憲法中ニ掲グルヲ以テ不可ナリトセリ。何トナレバ之ヲ憲法中ニ掲グルトキハ憲法ニ於テ定ムベキ限界ヲ越ユベケレバナリ。凡ソ憲法ハ重要ニシテ基礎トナルベキ原則ヲ定メ、憲法ヲシテ憲法タラシメザルベカラズ。歸化ヲ規定スルニハ歸化ヲシテ行政權ノ專恣ナル執行ヲ免レシムルガ爲ニ、之ヲ立法權ノ執行ニ委ヌレバ足レリトス。故ニ此事ニ關ル法律ニ於テ規定スベキ節目ハ憲法ニ屬セザルベク、但憲法ニ依リテ立法權ノ爲メ一定ノ制限ヲ定ムルコトヲ得ベシ。例ヘバ大歸化ト通常歸化ノ差別、又ハ之ヲ得ルガ爲メノ條件ニ關ルモノノ如キ是レナリ。

往古ニ在リテハ歸化ヲ許可スルニ關シ現今ノ如ク嚴密ナラザリシ故ニ、當時唯僅々ノ規定ヲ憲法中ニ掲グルコトヲ得タリ。是ニ反シテ近今ニ至リテハ此件ニ關シ漸次詳細ノ規則ヲ頒布シタリ。蓋シ其範圍漸ク廣ク、且ツ官廳ノ手續權限ニ關スルガ爲メニ、憲法中ニ掲載スルヲ以テ足レリトスルコト能ハザレバナリ。

故ニ此件ニ關ル重要ノ原則ヲ示シ、而シテ特別ノ規則ハ特別ノ法律ヲ以テ定ムルヲ可トス。

（第二）大歸化ト通常歸化トノ區別ハ墺國及ビ獨逸國ニ於テ之ナキ所ナリ。然レドモ英國白耳義（往古ハ佛國ニ於テモ）及合衆國（大統領被選權ノ通常歸化ニ依テ得ベカラザル限リ大統領被選權ニ關シ）ニ於テハ此區別アリ。通常政事上ノ關係ニ於ケル國民權ハ唯ニ大歸化ニ依リテノミ之ヲ得ルモノトス。例ヘバ代議士被選擧權及最高ノ官職ヲ帶ブベキ能力是レナリ。其之ヲ得ベキ條件ハ久ク國内ニ居住シ、或ハ國内ニ於テ特別ノ功績アリ、又ハ代議院ニ於テ歸化ヲ附與スルコト是レナリ。此レ其故ハ他ナシ、外國人ハ一國ノ事件ニ於テ最上ノ裁斷權ヲ有スベカラザレバナリ。通常ノ入境者、勞働者、又ハ職工ト彼ノ卓絶ノ人物ニシテ、其人國民トナルモ平凡種族ノ人ノ如キ弊患アルコトナキ者トノ間ニ區別ヲナスコト、數多ノ場合ニ在リテ適當ナルベシ。若シ任意ヲ以テ入境シタル各外國人ニシテ、更ニ制限スル所ナク政治上ノ權利ヲ與フルコトアラバ、憲法又ハ國内ノ秩序ヲ妨害スルコトナシトセズ。許多ノ入境者アル場合、社會黨又ハ異人種即チ未ダ十分ニ國ノ狀況及需用ニ適セザル他人種ノ入境スル場合ニ於テハ、特ニ然リトス。故ニ大歸化ト通常歸化トヲ區別シテ本然ノ政治ノ權ヲ得セシメ、及最高等ノ官職ヲ帶ルコトヲ得セシムルニハ、上文ニ述ブルガ如ク特別ナル條件ヲ設クルコト緊要ナリ。

十二月二日

ハ・ロエスレル　謹白

(問) 貴書ニ外國人歸化ノ要件ハ憲法ニ其大限ヲ定ムベキコトヲ論ゼラレタリ。此事ニ付貴下ノ意ヲ以テ立案ヲ試ミラレバ如何ナル立言ヲ要スルヤ。

(答)

一 國民タルノ資格ヲ得表スルコトニ就テノ原則ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

一 此法律ニ依リ外國人ノ歸化證ハ行政廳ヨリ附與ス。

一 大歸化證ハ十五年ノ間日本國ニ滯在シタル者、或ハ日本ノ爲メニ拔群ノ功勞アル者ニ非レバ之ヲ附與スベカラズ。

一 上院、下院ノ代議士トナリ、或ハ大臣トナリ、行政廳ノ長官トナリ、又ハ陸海軍ノ指令官トナルノ資格ハ大歸化證ニ依テノミ之ヲ得ベシ。

余ハ貴下ノ依囑ニ依リ國民タルノ資格ヲ得喪スルコトニ關スル一條ノ草案ヲ進呈スルニ當リ、聊カ左ノ說明ヲ加ヘント欲ス。

此草案ハ國民タル資格ヲ得表スルコトニ關ル原則ヲ定ムルハ立法權ノ職掌ニシテ、斯カル場合ニ於テ歸化證ヲ附與スルハ行政權ノ職掌トナシタリ。或ル國ニ於テハ歸化證ヲ附與スルコトヲモ併セテ立法權ニ委スト雖、此法ハ正當ナラズ。何トナレバ歸化證ノ附與ハ行政ノ區域內ニ屬スルコトハ當然ノ理ニシテ、歸化ノ場合ニ於テ行政ノ事務ヲ立法權ニ委ヌル十分ノ理由ナケレバナリ。又立法體卽チ議院ニ於テ歸化ノ事ヲ政治上ノ黨派ニ關ル事件トシテ取扱フガ如キハ事宜ノ適當ニ非ズ。

此草案ニ於テ大歸化ノ要件ヲモ併セテ揭載シタリ。何トナレバ其要件ハ本來國民タル資格ヲ得ルノ要件ニハアラズシテ、或ル政權ヲ行フコトニ關ル要件ナレバ、之ヲ憲法中ニ揭載スルハ固ヨリ正當ナレバナリ。故ニ本案第一項ニ國民タル資格ヲ得ルノ要件ハ通常ノ法律ヲ以テ定ムベシトスルト相矛盾スルニ非ズ。又例外ニモ非ザルナリ。白耳義ノ憲法ノ如キハ大歸化ヲ一種ノ歸化ト見做シ、通常歸化ト均ク通常ノ法律ヲ以テ之ヲ規定セシメタリ。此兩樣ノ主義ハ兩樣ノ場合ニ依リテ各々正當ナラン歟。例ヘバ人アリテ先ヅ通常ノ歸化ヲナシ、十五年ヲ經タル後更ニ大歸化ヲナスガ如キ、又人アリテ拔群ノ功勞アルガ爲メ、最初ヨリ直チニ大歸化ヲナスガ如キ、第一ノ場合ニ於テハ大歸化ヲナストキ、既ニ前日通常歸化ヲナシタルハ、其人既ニ外國人ニアラザルガ故ニ、本來ノ大歸化ナルモノハ單ニ第二ノ場合ニ於テノミ存スル者ナリ。是レ兩樣ノ差異アリトスル所ナリ。

是ヲ以テ大歸化ノ要件ニ關スル第三項ハ之ヲ揭ゲザルモ亦必要ヲ欠クコトナシ。但大歸化證

ヲ附與スルニハ通常ノ歸化ニ關スル法律上ノ要件ニ循フベキハ勿論ノ事タリ。

大歸化ノ効力ニ關スル第四項ハ極メテ必要タリ。何トナレバ此項ハ或ル政權ヲ與フルコトヲ揭グルガ故ナリ。政權ヲ與フルニ多少アリ。白耳義法律ノ如キハ大歸化ニ依テ諸般ノ政權ヲ得セシメ、殊ニ參議院議官「チネラル」或ハ高等法院ノ判事タルノ資格ヲ得セシム。此レ甚ダ適當ノ度ヲ過ギタリトス。其他ノ國ノ憲法ニ於テ多クハ國會議員タル資格ヲ得セシムルニ止マル。此草案ハ宜キヲ斟ミ折衷シタル者ナリ。

(問)

各國ノ憲法ノ內ニ國民ノ權利ヲ得、又ハ失フノ明條ヲ定メタルアリ。又ハ之ヲ別法ニ讓リ、憲法ニ於テハ單ニ其立法ノ定ムベキ所ナルコトヲ示シタルアリ。此ノ二ツノ方法ハ何レガ尤便ナルヤ。

(答)

ロエスレル拜

本日ノ下問ニ對シ予ハ國民ノ資格ノ得有及失墜ニ關スル規則ハ憲法ニ規定セズシテ法律ニ規定スルノ便ナル旨ヲ回答ス。其理由トスル所ノ大要ハ、此規則タル國際ニ關渉スルモノニシテ、國際條約ヲ以テ制定セラレタリ。又將來益々此方法ヲ以テ制定セラレンコトヲ希望ス。故ニ若シ之ヲ憲法ニ制定スルトキハ、將來此規則ヲ變更スルニ於テ實際上ノ不便少カラザルベシ。今日ハ其理由ノ大體ヲ陳述セリ。明日ハ此問題ニ付キ貴下ニ面接ノ上尙詳述センコトヲ望ム。

東京

千八百八十六年十二月二日

民權及政權（ドロアー、シヴィール、エ、ポリチック）

モーリス・ブロツク氏

民權ハ本來私權（ドロアー、プリヴェー）ノ部類ニ屬シ、而シテ之ヲ享有スル者ハ獨リ內國人ニ限リテ外國人ニ及バズ。例ヘバ諸國ノ法律ニ於テ獨リ其國人ノミ享有スル土地所有ノ權理及死者ノ財產ヲ相續シ、若ハ其身死スルニ臨ミテ其財產ヲ人ニ讓與スル權理ノ如キハ、卽チ民權ノ部類ニ屬スル者ナリ。此他我佛蘭西ノ法律ニ揭ゲタル遺言ノ證人タル權理ノ如キモ亦均ク民權ノ部類ニ屬スル

者ナリ。(民法第九百八十條)然レドモ我佛蘭西ノ成文法ニハ精密ニ此解釋ニ應ズ可キ條ヲ掲ゲズ。是レ蓋シ當時民法ヲ制定セシ人士ガ民權ト私權トヲ區別スルコト能ハザリシニ由テ然ルヲ致セシ者ナリ。是故ニ不動產ヲ所有スル權理、死者ノ財產ヲ相續スル權理、契約ヲ締結スル權理、物品ヲ賣買スル權理ノ如キハ一概ニ之ヲ民權ト稱シ、而シテ佛蘭西人ト外國人トヲ通ジテ皆均ク之ヲ享有スルヲ得ベシト爲セリ。然リト雖ドモ我國ノ法律ニ於テモ亦彼ノ民權ノ本義ニ合シタル權理、卽チ專ラ內國人ノミ享有シテ外國人ニ及ボサヾル權理ナキニ非ズ。而シテ其事政府ノ職掌ニ關シ、若ハ裁判所ノ管轄ニ屬スル者ニ至テハ、我國ノ民法ニ於テモ亦往昔羅馬法ニ揭ゲタル「ジユス、シヴイタリー」(民權ト「ジユス、ジヤンチヨン」(私權トノ區別ヲ存セリ。是故ニ我國ノ法律ニ於テハ、人ノ身分ニ就キテ專ラ佛蘭西人ニ關スル條件ノミヲ規定シ、而シテ外國人ハ佛蘭西人ニ對シテ家族ニ關ル或種ノ權理、卽チ後見人ト爲リ、養子ト爲ルノ權理ノ如キ、專ラ成文法ヨリ生ズベキ諸般ノ權理ヲ享有スルヲ得ベカラズト爲セリ。又佛蘭西ノ裁判所ハ外國人中ニ起リタル紛議ヲ審判スル職任ヲ有セズ。且外國人ヨリ佛蘭人ニ對シテ訴訟ヲ起ストキハ、被告人ハ其訴訟入費ニ充ルガ爲ニ、原告人ヲシテ預メ若干ノ保證金ヲ出ダサシムルヲ得ベシ。此他拘留ノ處分ノ如キモ亦其外國人ヲ處スルニ當テハ、其佛蘭西人ヲ處スルニ比シテ大ニ嚴刻ヲ加ヘタリ。

民權ヲ享有スル者ト、民權ヲ行フ者トハ宜ク其間ニ區別ヲ設ケザルベカラズ。是故ニ旣ニ民權ヲ享有スル者ト雖ドモ、若シ法律ニ於テ不能力者ト認ムルトキハ、其人ハ自ラ其享有スル民權ヲ行フヲ得ズ。未丁年者治產ノ禁ヲ受ケタル者及旣嫁婦女ノ如キ是レナリ。

凡ソ佛蘭西人タル者ハ皆均ク民權ヲ享有セザルハ莫シ。故ニ其民權ヲ享有スルト否トハ一ニ其佛蘭西國人タルノ資格ヲ具フルト否トニ在リ。然レドモ間々或ハ刑律ニ觸レタルノ故ヲ以テ裁判官ヨリ其民權ノ一部ヲ褫奪セラルヽ者アリ。

左ニ記載シタル外國人ハ佛蘭西人ト同一ノ權理ヲ享有スルヲ得ベシ。

(一)修好條約ニ從ヒ其國ニ在ル佛蘭西人ニ同一ノ權理ヲ附與シタル國人

(二)國長ノ許可ヲ得テ其住居ヲ佛蘭西國內ニ定メタル者

政權トハ專ラ其國ノ政務ニ參與スル權理ヲ謂フ。之ヲ例セバ官職ニ任ズル權理ノ如キ、選擧人若ハ被選人タルノ權理ノ如キ、是レ皆政權ノ部類ニ屬スル者ナリ。凡ソ政權ハ專ラ士人(シトアイヤン)ニ屬スル者ニシテ、佛蘭西國人ノ滿二十一年ニ達シタル者ハ總ベテ之ヲ士人ト看做ス可キ者トス。然レドモ某々ノ政權ニ限リテ年齡、住居、能力等ニ特別ノ權限ヲ設クルコトアリ。又其政權ヲ享有スルト否トハ專ラ其佛蘭西國人タルノ資格(佛蘭西國ニ於テ生レ若クハ歸化シタル者)ヲ具フルト否トニ在リト雖ドモ、法律上不能力者ト視做

ス可キ者、若ハ或種ノ刑律ニ觸レタル者ハ、其政權ノ全部若ハ一部ヲ褫奪セラレ又ハ時期ヲ限リテ其政權ヲ行フヲ停止セラルヽコトアリ。政權ハ其一名ヲ士（ドロアー、シヴィック）權ト云フ。

以上述ブルガ如クナルヲ以テ、政權卽チ士權ノ民權ニ異ナル者二事アリ。何ゾヤ。民權ハ專ラ私益ヲ圖ルヲ旨トシ、政權ハ專ラ公益ヲ圖ルヲ旨トスルコト是レ其一ナリ。政權ハ獨リ士人ノミ之ヲ享有シ、民權ハ佛蘭西國人皆均ク之ヲ享有スルコト是レ其二ナリ。

方今文明國ニ於テハ其國法ニ於テ民權ト政權トノ區別ヲ存セザルハ莫シ。獨リ英國ハ「テニザーシヨン」ト稱スル特種ノ制度ヲ存セリ。

第六條

日本政府ヨリ任用シタル外國人ハ、別段ノ約束アルニ非ザレバ任用ノ間歸化ノ國民トス。

外國人ハ既ニ歸化法ニ依リ歸化シタルモ、法律ヲ以テ特別ノ許可ヲ與フルニ非ザレバ、仍內閣員、參事院議官、兩院議員、及陸海軍將官タルコトヲ得ズ。

（問）

民法上ニ付キ中古ニ行ハレルル外國人抑制法ハ、第十八紀ノ末ニ於テ既ニ各國ノ際ニ廢止セラレタレバ、近世歷史ニ於テ開化ノ進步ヲ表示シタリト雖、國法上國民政府ノ點ニ係リテハ各國ノ憲法ニ於テ內外人ノ間ニ區別ヲ揭ゲザルハナシ。

其中ニハ(A)外國人ハ既ニ歸化スル者ト雖執政又ハ參事官ニ任ズルコトヲ得ズトスル者アリ（ポルチユガル憲百六十八條等）(B)法律ニ依ルニ非ザレバ外國人ノ官ニ就クコト又ハ歸化スルコトヲ許サヾル者アリ（荷蘭丁抹等）(C)其本國ノ籍ヲ離ルヽノ後ニ非ザレバ歸化入籍（デニザオン）ヲ許サヾル者アリ（瑞西）

獨逸ニテハ外國人ヲ使用スルコトノ本國ニ有益ナルガ爲ニ、國法上ニ向テモ此ノ區別ヲ寬ニシタルハ已ニ貴下ノ敎ヲ領シタル所ナリ。今更ニ詳細ノ說ヲ乞フ爲ニ左ノ疑題ヲ呈ス。

第一　獨逸ニ於テハ外國人官吏トナルノ前ニ、先ヅ歸化ノ手續ヲ要セザルヤ。其他何等ノ約束（コンアシヨン）モナキヤ。

第二　獨逸國ノ官吏トナルト同時ニ、獨逸ノ國民タルノ權利ヲ得ルトナラバ、兵役及忠義ノ誓等獨逸國民タルノ義務ヲモ同時ニ負擔スルヤ。

第三　獨逸國ノ官吏タル外國人ハ其本國ノ許可ヲ得タルト否トニ拘ラズ、同時ニ獨逸ノ國民タルガ爲ニ其本國ノ國民籍ヲ脫スル者ナリヤ。又ハ本國ト獨逸ト二國ノ國民籍ヲ兼有スル

ヤ。

若シ更ニ詳明ノ教ヲ賜ハバ幸甚ナリ。

（答）

獨逸殊ニ普國ノ法ニ據レバ、外國人歸化ヲ許サレタルトキハ、獨リ民法上ノ關係ニ於テノミナラズ、政治上ノ關係ニ於テモ亦內國人ニ異ナルコトナシ。英國ニ於テハ千八百七十年ノ歸化法律頒布以來、外國人ニ歸化ヲ許可スルニ巴羅門ノ許可ヲ要セズ。此法律ニ據レバ外國人ニシテ大英國ニ五年間寄留シ、又ハ五年間勤務スルトキハ、內務卿ヨリ歸化ノ許可ヲ受ケ、凡テ英國人ノ有スル權利ヲ得有シ、且ツ忠勤ノ宣誓ヲナサザルベカラズ。

今三個ノ問題ニ就キ之ヲ論ゼンニ、

一、獨逸ニ於テハ獨逸ノ官職ニ就クノ前ニ歸化ノ許可ヲ受クルノ必要ナシ。但外國人ハ內國人ノ盡スベキ要件（コンディション）ヲ盡サヾルベカラズ。然レドモ外國人ノ爲ニ特別ノ要件ヲ設クルコトナシ。

二、外國人官職ニ就クトキハ其任官ノ國ニ於テ從前ノ國民資格ヲ保ツベキコトヲ記載スルニ非ザル以上ハ、自カラ歸化ノ默許ヲ得ルモノトス。而シテ任官ノ國ニ於テ此等ノ事ヲ記載スルハ例外ニ屬ス。默許セラレタル歸化ノ效力ハ公許シタル歸化ノ效力ニ同ジ。歸化者ハ國內

人ニ同ジク凡テノ權利ヲ得有シ、且ツ同時ニ凡テノ義務ヲ負フモノトス。而シテ特ニ兵役義務ニ就テ然リトス。又宣誓ニ就テモ歸化者ハ內國人ニ異ナルコトナシ。往古ハ凡テ臣民タルモノハ君主ノ始メテ政權ヲ握ラルヽノ時ニ當リ、所謂一ノ服從ノ宣誓ヲナサヾルベカラズ。又一國ニ歸化ジタル者ハ其歸化ニ際シ、又國中ニ誕生シタル者ハ其丁年トナルトキニ當リ、服從ノ宣誓ヲナサヾルベカラザリシナリ。然レドモ普國ニ於テハ此宣誓既ニ廢セラレ、今ハ唯官吏ノ宣誓及國會議員ノ宣誓ノミヲ存セリ。獨逸帝國官吏モ亦其委任セラレタル職務ニ屬スル凡テノ義務ヲ盡スベキノ宣誓ヲナサヾルベカラズ。（帝國官吏法律第三條）此勤務ニ就テノ宣誓ハ外國人ト雖帝國若ハ普國ノ職務ニ奉事スルトキハ之ヲナサヾルベカラズ。

三、獨逸法ニ據レバ歸化ノ許可ハ必ズシモ外國國民ノ資格ヲ失ハシムルノ結果ヲ有セズ。又外國國民ノ資格ヲ失ヒタル後ニ始メテ歸化ノ許可ヲ與フルモノニ非ズ。故ニ獨逸ノ官職ニ就クガ爲ニ生ジタル歸化ニ至リテモ亦然リ。官職ニ就キタルモノハ法律上其固有ノ國民資格ヲ保有スルモノトス。例ヘバ露國ノ臣民ニシテ其政府ノ許可ヲ得テ普國ノ官職ニ就クトキハ、同時ニ露國及普國ノ臣民タリ。

此ニ反シ佛蘭西法ニ據レバ、佛國人外國ニ歸化スルトキハ、從前ノ國民資格ヲ失フモノトス。一國民ニシテ二重ノ國民資格ヲ有スルニ因リ生ズル所ノ危險ナル爭議ハ、瑞西千八百七十

六年ノ法律ニ於テ之ヲ除却シタリ。此法律ニ據レバ歸化スベキ者其從前ノ國民資格ヲ失ヒタルコトノ證明ヲナサヾルトキハ、瑞西ニ歸化スルヲ禁ズルモノナリ。又各國互ニ條約ヲ締結シ、兩國ノ國民互ニ前述ノ證明ヲナサヾルトキハ歸化ヲ許サヾルノ義務ヲ負擔セシムルナリ。例ヘバ普國及墺國間ニ於ケル條約ノ如シ。若シ此種ノ義務ニシテ存セザルトキハ、普國若ハ帝國政府ハ法律上假令外國人固有ノ國民資格ヲ妨棄セズ、若ハ失ハザルトキニ於テモ、外國人ヲ任官シ之ニ普國若ハ獨逸ノ國民資格ヲ與フルヲ妨ゲザルモノトス。

又一方ヨリ論ズルトキハ、外國人ヲ任官スルノ義務ハ絕エテ存セザルナリ。故ニ外國人ヲ任官スルニ要件ヲ設ケ、特ニ固有ノ國民資格ヲ拋棄シタル後始メテ官ニ任ズルコトノ條ヲ設クルヲ得、此要件ヲ設クルハ以テ二重ノ國民資格ヲ有スルガ爲ニ生ズルノ事件ヲ豫防スルナリ。外國人獨逸ニ於テ歸化シ、若ハ任官スルガ爲ニ其固有ノ國民資格ヲ失フヤ否ヤハ、又其鄕國ノ法律ニ依リ定マルモノトス。故ニ其鄕國ノ法律例ヘバ佛蘭西若ハ伊太利法ニ依リ外國ニ歸化スル者ハ、佛蘭西若ハ伊太利ノ國民資格ヲ失フノ結果ヲ生ズ。此結果ハ佛人若ハ伊太利人ヲ獨逸若ハ普國ノ官職ニ任ジ、別段ノ要件ヲ設ケザルトキニモ亦生ズルモノトス。且數國ノ法律ニ據レバ、內國人其政府ノ許可ヲ受ケズシテ外國ニ奉行スルトキハ、其國民資格ヲ失フコト、又ハ少クモ其資格ヲ剝奪シ得ルコトヲ定メタリ。

此ニ由リ之ヲ觀レバ、假令獨逸法ノ原則ニ於テハ其事アルヲ容ルヽモ、官吏ノ二重ノ國民資格ヲ有スル場合ハ甚ダ稀ニ存スルコトナルベシ。

此問題ニ就キ日本ニ於テ如何ナル方向ヲ取ルベキ乎ハ、予ハ口頭ヲ以テ陳述センコトヲ希望ス。

東京　千八百八十六年十一月三十日

モス セ

第七條

凡ソ日本國民タル者ハ總テ左ノ權利ヲ保護セラル。

一　何等ノ名稱位列タルニ拘ラズ、法律ニ於ケル一般ノ平等。

二　特ニ許可ヲ要スル者ヲ除ク外、法律ニ觸レズ及秩序安寧ニ妨ゲザル營業ノ自由。

三　生計ノ救助ヲ受クル者、刑法ノ監視ヲ受ル者、及兵役ニ係ル制限ヲ除ク外內外移轉ノ自由。

四　法律ニ揭ゲタル場合又ハ裁判ノ效力ニ依ルノ外強制拿捕勾留ヲ受ケザルコト。

五　法律ニ指定シタル場合ヲ除ク外、家主ノ承諾ナクシテ家宅ニ侵入スルヲ許サヾルコト。

六　正條ノ外刑法ノ處分ヲ受ケザルコト。
七　公益處分ノ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外、各人ノ所有財産ヲ侵サレザルコト。
八　安寧秩序ヲ妨ゲズ、及國民ノ義務ニ背カザル信敎ノ自由。
九　法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印律集會及結社ノ自由。
十　刑事ノ檢探及戰時又ハ内亂ノ場合ヲ除クノ外郵信ノ祕密。
法律ハ安寧秩序ヲ維持シ、又ハ公益ノ必要ノ爲ニ正條ヲ揭ゲテ前ニ擧ゲタル各項ニ適當ノ制限ヲ設ケ、及戒嚴ノ時ニ於テ一時停止處分ヲ行フベキ場合ヲ定ムベシ。

第八條

凡ソ日本國民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ、法律ノ規程ニ循ヒ天皇及議院ニ請願ヲナスコトヲ得。

第九條

凡ソ日本國民ハ兵役ニ就キ及其ノ財産ニ比例シテ租稅ヲ納ムルノ義務ヲ負フ。

第十條

軍隊ノ紀律ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム第七條八條ハ其軍律ニ矛盾セザル者ノ外軍隊ニ準行セズ。

（問）

國民ノ權利及自由ハ法治國ノ最モ貴重ニ保護スベキ者ナリ。但佛國ノ革命ノ憲法ニ於テ、哲學ノ理論ヲ以テ國法ノ條章ニ記入シテヨリ、實際ノ施行ヨリモ寧ロ學科（サイエンス）上ノ問題トナリ、或ル論者ハ權利ノ宣告ハ卽チ政府ニ反抗スルノ元素ヲ包括シタルコトヲ論ジ（ヘンサム氏ノ如シ）又或ル論者ハ其徒ニ憲法外觀粧飾ヲ爲シテ、毫モ實際ノ必要ヲ見ルコトナク、此ノ一紀問ニ流行スル一ノ風潮タルニ過ギザルコトヲ論ジタリ。

今一國ノ爲ニ新ニ一ノ憲法ヲ建ントセバ、此事ニ付キ何等ノ適當ナル軌道ニ由ルベキヤ。甲ハ左ノ案ヲ提出スルナルベシ。

曰ク、ナルベク簡潔ニ其條ヲ約說シテ包括的ニ之ヲ憲法ニ揭グベシ、其一案ハ

（a）國民ノ身體家宅及財產ノ安全ト、營業、移轉、歸依、著述、印刷、集會、結社ノ自由ハ保護セラル。但法律ハ安寧秩序公益ノ爲ニ必要ナル制限ト、及戰機時變ノ爲ニ一時停止ノ處分ヲ定ムベシ。

國民ハ法律ニ對シ平等トス、日本國民ハ法律ニ定ムル所ノ必要ナル約束及能力ノ條項ニ依

リ、公權私權ヲ完全ニ享有スベシ。

又其一案ハ、

（b）別紙ニ具フ。

乙ハ憲法中ノ條章ニ之ヲ沈默シ、寧ロ憲法ノ前置ノ詔勅ニ於テ優美ナル辭令ヲ用ヒ、之ヲ明言宣示スベシト云。

又丙ハ權利ノ享有ト制限トヲ併セテ總テ之ヲ特別ノ法律ニ讓リ、憲法ハ唯行政立法各機關ノ關係ヲ示スヲ以テ足レリトスベシト云。

此ノ事ハ憲法ノ目的ニ於テ最大重事ナリ。願クバ貴下ノ意見ヲ十分自由ニ示サレンコトヲ乞フ。

（答）

或ル一般ノ自由權即チ根本權ハ諸國ノ憲法ニ於テ是認スル所ナリ。即チ英國ニ於テハ「マグナカルタ」「ペチシヨン・オフ・ライト」「ビユル・オフ・ライト」等ニ於テ之ヲ揭ゲタリ。北米憲法ニ於テハ往時ハ根本權ヲ揭ゲザリシガ、其大缺點タルヲ覺知シ、之ヲ補充センガ爲ニ憲法ノ追加（アメンデマン）ヲ發シタリ。白耳義國、普國、墺國、巴威爾等ノ憲法ニ於テハ皆一般ノ權

利及義務ニ關スル一節ヲ設ケタリ。一千八百五十二年ノ佛國憲法ニ於テハ、單ニ一千七百八十九年ノ原則ヲ公法ノ基礎ト認メタリ。

或ル根本權ヲ臣民ニ與フルハ憲法ノ大眼目トスルヲ得ベク、若シ此レナキニ於テハ實ニ憲法ノ缺典ト謂フベシ。抑々根本權ナルモノハ一ニハ行政權ノ專橫ヲ防グノ用ヲナシ、一ニハ後來ノ立法ノ自由ヲ制限スルノ用ヲナス。之ヲ要スルニ後來國民ト政府トノ關係上、國權ヲ以テ蹂躙スベカラザル鞏固ナル法律上ノ基礎ヲ設ケンガ爲ナリ。

然レドモ如斯ノ效力ハ憲法ヲ以テ改革スベカラザルモノトスルニ非ザルヨリハ、之ヲ見ルコト能ハザルベキニ、何レノ國ニ於テモ或ル鄭重ナル約束ヲ以テ、他日憲法ヲ改革スルヲ得ルノ方法ヲ設ケタレバ、此ノ效力ヲ完クシ能ハザルヲ通例トス。

後來ニスル通常法律ハ、其憲法ニ背クトキハ之ヲ無效トスルノ權力ヲ裁判所ニ與フルニ非ザレバ此ノ如キ效力ヲ見ルコト能ハズ。若シ此權力ナキトキハ縱令根本權ヲ侵害スル法律ト雖、裁判所ハ之ヲ適用スルヲ得、又適用スルヲ要スルガ故ニ根本權ハ仍危殆ニシテ、安全ヲ缺クモノトス。北米合衆國ニ於テハ最上法院ハ實ニ此ノ權ヲ握レリ。佛國ニ於テハ拿破翁時代ニ上院ヲ憲法監守者トナシタレドモ、法院ト同一ナル不羈獨立ヲ保ツニハ至ラザリシナリ。

加之、根本權ノ中ニハ實際價値ヲ有セザルモノ多シ、何トナレバ根本權ナルモノハ特別ノ法

律ニ依テ始メテ其施行ヲ細定スベキモノナルガ故ニ、他ノ權利ト均ク官廳ノ法律ニ背反スルコトヲ豫防スルコト必要ナレバナリ。如斯豫防ハ官署ノ權限ニ關ル法律ヲ以テ之ヲ行フベキモノニシテ、此特別ノ法律ナク、又官廳ヲ監督スルコトナク、出訴願訴ノ權ナキニ於テハ、憲法ニ明示シタル根本權ハ一モ特別ノ效用ヲナサヾルニ至ルベシ。

或ル根本權ノ如キハ歷史上自然ニ得有シタルモノニシテ、更ニ法律ノ明文ヲ揭グルニ及バズ。例ヘバ人身ノ自由ヲ奪フコトヲ許サヾルコト、何人タリトモ其權利及所有ノ防護ヲ受クベキコト、不法ナル拘留ヲ受クベカラザルコト等ノ如シ。如斯原則ハ司法ノ制度及刑法等ニ依テ自ラ保證セラルヽモノナリ。

其他ノ根本權ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ確定スルヲ要シ、此ノ法律ニ依テ始メテ之ヲ實行スルヲ得。例ヘバ印刷、集會ノ自由、歸化、移住等ノ如シ。故ニ此權利ハ立法ニ於テ自由主義ノ盛ニ行ハルヽ時ニ效力ヲ得ベキモノニシテ、其範圍及詳細ナル關係ハ別段ノ法律ニ依テ判定スルヲ得ルノミ。以上ノ理由ニ據テ之ヲ觀レバ根本權ノ效用ハ實際ニ於テ極メテ少小ナリトス。何トナレバ其實行如何ハ多クハ特別ノ法律ニ依テ定マルモノナレバナリ。

又上ノ理由ニ據レバ如斯一般ノ根本權ヲ憲法ニ揭グルハ其弊害モ亦極メテ少小ナリ。何トナレバ原來此ニ依テ立法權ヲ束縛スルコトナケレバナリ。

憲法ニ揭グルモ別段ノ法律ヲ以テ其節目ヲ確定スルニ及バズトノ意ナリ

人或ハ謂ハン。果シテ然ラバ根本權ナルモノハ無用ノ長物ニシテ、寧ロ之ヲ憲法ニ揭ゲズ、特別ノ法律ヲ發スルニ當テモ其束縛ヲ受クル所ナカラシムルニ若カザルナリト言フ者アラン。然レドモ予ハ各國憲法ノ例ニ倣フコト猶可ナリト信ズ。何トナレバ全ク一般ノ根本權ヲ缺クニ於テハ、憲法ノ缺點ト認定セラレ、或ハ直ニ信用ヲ失フノ恐レアレバナリ。

又予ハ憲法中ニ一定ノ條章ヲ揭グルヲ可トス。何トナレバ之ヲ詔勅（プレアンブル）ニ揭グルトキハ猶曖昧ニ失シ、法律タルノ效力ヲ有セザレバナリ。

故ニ予ハ左ノ條章ヲ設ケラレンコトヲ希望ス。

第一條　國民權及歸化ニ關スル規定ハ已ニ愚見ヲ陳ベタルガ如クスベシ。

第二條　何人タリトモ政府ノ平等ナル防護ヲ受ク、法律ノ前ニハ平等トス。平等ニ文官武官及其餘ノ公務ヲ奉ズルヲ得ベシ。

第三條　何人タリトモ法律ノ權限內ニ於テ自由ニ移住スルノ權ヲ有ス。

（其權限ハ或ハ兵役ニ關スルアリ或ハ罪科ニ關スルアリ）

第四條　身體住居及權利ノ安全ハ之ヲ防護ス、何人タリトモ正當ノ裁判官ノ裁判ヲ受クベキモノトス。

（法律ヲ以テ許サレタル拘留、家宅搜索等ノ場合ハ特別ノ法律ニ揭グルハ勿論ナリ）

第五條　所有權ハ侵スベカラズ、所有ノ徵收（エキスプロプリヤチヨン）ヲ許スベキ場合ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第六條　何人タリトモ職業及營業ヲ自由ニ撰取スルヲ得ベシ。但法律ニ背反スル者、又ハ公共ノ秩序安寧ヲ妨害スル者、又ハ許可ヲ要スル者ハ此限ニ在ラズ。

第七條　信仰ノ自由ハ之ヲ防護ス、但、公共ノ秩序及安寧ヲ妨害スル者又ハ國家ニ對スル義務ニ背反スル者ハ此限ニ在ラズ。

第八條　言論、集會、結社ノ自由ハ法律ノ範圍內ニ於テ之ヲ防護ス。

第九條　信書ノ祕密ハ侵スベカラズ。但公益ノ爲必要ナル例外ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第十條　何人タリトモ請願權ヲ有ス。

第十一條　日本國民タル者ハ法律ノ範圍內ニ於テ兵役及納稅ノ義務ヲ有ス。

（其他ノ證人トナルノ義務、子女就學ノ義務、仕官及奉公ノ義務ノ如キハ玆ニ別ニ揭グルヲ要セズ）

第十二條　陸海軍ノ紀律ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム、第二條ヨリ第十一條マデノ規定ハ陸海軍ノ法律及命令ニ抵觸セザルモノニ限リ之ヲ軍人ニ適用ス。

第十三條　皇帝ノ行政權中ニ在ル所ノ特權（プレロカチーフ）ハ此章ノ規程ニ依テ害セラルヽコトナシ。

（此條ハ特ニ過日予ノ陳ベタル原則ニ從テ命令ヲ發スル權ヲ保護スル爲メ必要ナリ。例ヘバ法律タルノ効力ヲ以テ發スル臨時ノ命令、警察規則、戰時民亂ノ場合ニ於ケル命令等ノ如シ）

信仰ノ自由トハ內心ニ於テスルト、言論著述ヲ以テスルトヲ問ハズ、各個人ノ或ル宗教ヲ信ズルコトヲ云フナリ。故ニ宗教上ノ所論ニシテ道德法律ニ戾ルニ非ザレバ、此レガ爲決シテ糺彈ヲ受クルコトナカルベシ。家內禮拜ノ自由亦此ニ屬スルモ不可ナシト雖、此事既ニ住居ノ不侵ト云ヘル條中ニ包含セリ。蓋此等ノ點ヲ朦昧ノ中ニ付シ去ラントスルハ、力メテ後來政府ノ活動ヲ自由ナラシメンガ爲ナリ。予ハ範圍ノ廣漠ナル宗教ノ自由ヲ與ヘント欲スルノ一人ニ非ズ。禮拜寺院創立、說教者ヲ任命スル等、完全ナル教會ヲ創設スルノ權ヲ如何ナル教派ニモ與ヘント欲スルニ非ズ。抑々政府タルモノハ可成宗教ヲ統一スルコトヲ力メザルベカラズ。何トナレバ宗派ノ分裂ハ勢ヒ政事上ノ分裂ヲ招カザルヲ得ザレバナリ。而シテ宗教ノ思想ハ精神上、經濟上、國民生活ノ基礎トナルモノナルガ故ニ、邪教ニ與フルニ正教ト同一ノ權利ヲ以テスベカラズ。予ハ宗派ヲ創起シ、正教ト均ク寺院ヲ建設スル等ノ事ヲ許スコトヲ欲セズ。若シ之ヲ自由ニ放任スルトキハ米國ト同一ノ狀況ニ陷ルベシ。米國ニ於テハ宗教ヲ以テ營業トナスニ至リ、國民ノ生活ハ實ニ劣賤ナル有樣ニ沈メリ。今日日本ニ於テ外國ノ各種ノ宗派入リ來リ

各派共ニ人民ヲ其身方ニ致サンコトヲ力ム。米國ニ流行スル所ノ「フライデンケライ」ハ幾分カ其德正敎ノ元素ヲ含有スルモノト雖、然レドモ上帝及人生ノ邪說ヲ擴張スルヲ以テ、固ヨリ弊害アルノミナラズ、亦政事上ノ偏理ノ源泉トナルモノナリ。日本ニ於テモ恐クハ今日ノ如ク宗敎ノ自由ヲ放任シ能ハザルノ時節到來スベシ。此ノ理由ニ依リ宗敎ノ自由ヲ與フルハ過度ニ廣漠ナルベカラズト信ズ。

敎育ノ自由ニ關シテモ宗敎ノ自由ニ關スル鄙見ニ同ジ。此事ニ關シ予ハ故ラニ明文ヲ揭ゲズ、夫文書ヲ以テ言論ヲ吐露スルノ自由ハ一定ノ範圍ニ於テ之ヲ許スヲ得ベシト雖、恣ニ敎育ヲナスノ權ヲ與フルハ正當ノ事ニ非ズ。國民ノ年少ナル者ヲ各種ノ迷路ニ誘カシムルコトアルベカラズ。年少ナル者ハ一意ニ其ノ受クル所ノ敎ヲ信ズルモノナルガ故ニ、政府ハ正當ノ資格ヲ有セザル者ヲシテ敎育ヲ司ラシメザルコトニ注意セザルベカラズ。普國ニ在テハ學術ノ自由ヲ許スト雖、敎育ハ之ヲ自由ニスルコトナシ。敎育ハ國家ノ管掌スベキ事件トスルノミナラズ、學術ト雖大學校ノ管理ニ依テ實際制限ヲ受ク。

凡ソ如斯過度ノ自由主義ハ所謂政治上ノ放任主義（マンツエストルツーム）ニ基クモノニシテ、此主義ノ價値ハ經濟上ニ於テモ甚ダ疑點ニ屬シ、精神上ニ於テハ、全ク擯斥スベキモノナリ。予ノ所謂放任主義トハ其說ニ云ヘル一個人ガ自己ノ事ヲ處置スルハ政府ニ比較スレバ尤能

ク理會スル者トシ、自由競爭ハ自ラ最良ノ結果ヲ來タスモノナレバ、百事各個人ノ自爲ニ任セ政府ノ干涉ヲ避クベシトノ風潮ヲ云フナリ。此主義ハ固ヨリ謬說ノ極ニシテ、政府ハ國民ノ最上裁判官トナリ、立法官トナリ、國民ノ道德上法律上ノ思想ヲ代表シ、非理邪說ヲ排擊スベキ職掌ヲ廔如スルモノナリ。此主義ハ公衆ヲ煽動シテ邪說ニ陷ラシメ、情感物欲ヲ滿足セシムルニ至ル。公衆ハ自己ノ智識ヲ以テ眞理ヲ發見スルノ能力ナキモノナリ。精神上ノ自由競爭ハ邪惡賤劣ノ徒ニ勝ヲ與ヘ、競爭者ハ他人ヲ凌駕センガ爲自己ノ情欲ニ制セラレ、道德上不易ノ眞理ヲ滅裂スルニ至ル。而シテ國民生活ノ品位全ク地ニ墮チ、政府ハ其職掌ヲ維持シ、權利ト眞理ヲ防護スルコト甚ダ困難ナルニ至ルベシ。

以上論ズル所ニ據リ予ハ問題タル一般ノ根本權ヲ上陳ノ方法ニ從ヒ之ヲ制限スベシト信ズ。

一月十一日

（答）

根本權ニ關スル意見

甲案試草

ハ・ロエスレル拜

第一　根本權卽チ各個人ノ自由權トハ獨逸學問上ニ於テハ國權ノ侵害ヲ受ケザル人民ノ自由權利ヲ云フ。根本權ハ權利卽チ國家ノ機關ニ對スル請求權ヲ云フカ、又ハ國權ヲ制限スル法章（規準）ヲ云フカノ爭ハ、玆ニ之ヲ論及スルヲ要セズ。何トナレバ此爭ハ實際ノ効用ヲ有セザレバナリ。

佛ノ權利宣告（デクレーシオン・オフ・ライト）及北米合衆國ノ憲法以來殊ニ千七百九十一年九月三日ノ佛國憲法ノ例ニ倣ヒ、歐洲ノ憲法ニシテ根本權ヲ規定セザルモノ殆ンド稀ナルハ世人ノ知ル所ナリ。獨リ獨逸帝國憲法ノミ此ノ規定ヲ揭ゲザル例外アルノミ。

古來根本權ヲ主張スルモノニ反對スルノ論ハ、國民ニ如此ノ權利ヲ與フベカラズト謂フニ非ズシテ、憲法ニ於テ簡單（クルソウント）ナル抽象的（アブストラクト）ノ條章ヲ以テ此權ヲ與フルモ、直接ニ實際之ヲ適用スルコト能ハザルガ故ニ、別法ヲ以テ之ヲ施行スルニ至ラシメザル間ハ價値ナキ徒法タルノミナラズ、却テ其弊ヲ見ルニ過ギズト謂フニ在リ。余モ亦主義ニ於テハ此ノ論旨ヲ贊成スルモノナリ。而シテ日本ニ於テ近時ノ憲法模型ヲ倣傚シ、概括高大ナル法律ヲ以テ國權ト人民トノ關係ヲ制定スルノ目的ニ非ズ、又外國ニ對シテ報告スルニモ非ザラシメバ、日本國ノ爲ニモ此論旨ヲ辯護セント欲スルナリ。若シ憲法ヲ發セズシテ國會ノ組織權限ヲ別法ニ讓ル等、凡テ憲法ト通常法律トノ區別ヲ（英國ノ例ニ從テ）ナサヾルニ於テハ、所謂根本權及其義務ヲモ各個ノ別法（例ヘバ營業規則、轉任自由規則、町村法、印刷條例、集會結社規則、地所買上規則、治罪法、刑法、敎育法、軍制收稅法）ニ定ムルヲ可トスルハ疑ヲ容レザル所ナリ。而シテ縱令此憲法ニ於テ此權利ヲ與ヘタル時ニ於テモ亦均ク別法ヲ要スベシ。然レドモ予ガ當局者ノ主意ヲ聞知シタル所ニ據レバ、既ニ憲法ヲ發布スル目的ヲ以テ標準トナセリト、果シテ然ラバ又憲法ニ根本權及根本義務ヲ揭グルコトヲ怠ルベカラザルコトヲ信ズルナリ。

此理由ニアリ、一ハ法律上ノ理由ナリ。

一　政事上ノ理由ハ外國及內國ニ對スルモノナリ。

（伊）外國ニ於テ日本ノ法律上ノ狀況ヲ誤解スルコト往々之アリ「シュルチエー」氏曰ク、東洋ノ神權制度ニ於テハ、國權ハ各個人ノ權利ヲ認ルコトナク、人民ニ對シテ無限ノ統御ヲナスト、現ニ日本ノ法律上ノ狀況モ亦此說ノ如シト信ズル者多シ。蓋日本ノ歷史ニ徵スルニ往古ハ實ニ如此狀態アリシコト疑ナシ。故ニ今國法上ノ明文ヲ以テ一個人ノ自由ニ關スル古來ノ主義ヲ脫シ、近世ノ法治國ノ列ニ入リタルコトヲ表明スルハ政事上大ナル價値ヲ有スベシ。

（呂）內國ニ於ケル政事上ノ効力トハ蓋シ根本權ヲ全ク憲法ニ缺クニ於テハ、此權利ヲ以テ憲法ノ必要ナル事項ト認ムル今日ノ輿論ニ反對シ、爲ニ不平ト激論ヲ招クベシ。

二　余ハ法律上ノ理由ハ之ヲ政事上ノ理由ニ比スレバ緊要ナリト信ズ。主義上法律命令ヲ區別スベカラザルコトニ就テハ既ニ意見ヲ陳ベタリ。果シテ此意見ニシテ採用セラルヽニ於テハ各個人ノ權利ハ命令ヲ以テ制定スベカラザルコトヲ明言スルヲ要ス。蓋各個ノ權ハ行政ニ對スル（立法ニ對スルニ非ズ）制限トナルニ依リ、始メテ動力ヲ有スルモノナリ。故ニ此權利ヲ制定スルニ憲法ヲ以テシ、之ヲ制限スルニハ必ズ法律ヲ以テスベキナリ。

故ニ余ハ憲法ノ緒言或ハ憲法ニ關スル勅諭ニ根本權ヲ掲グルヲ以テ足レリトナスベカラズト信ズ。此方法ハ實際上法律上ノ効力ナキノミナラズ、法律ヲ以テ此權ヲ認メザル間ハ皇帝ノ豫約ハ常ニ激論ノ資トナルベキガ故ニ、凡テ如此豫約ハ之ヲナサヾルヲ可トス。

第二　余ハ日本憲法ニ根本權ヲ掲グベシト說クト雖、亦他ノ一方ニ於テハ理論上ノ條章單純ノ豫約ニ止マラズシテ、其條章ハ直ニ實施スルヲ得ベカラシメ、或ハ然ラザルモ命令ヲ以テ之ヲ動カスコトヲ許サヾルノ力ヲ有セシムルコトニ注意セザルベカラズ。

此主義ニ依テ余ハ左ノ規程ヲ掲ゲント欲ス。

第　條　如何ナル要件ニ依テ國民ノ資格ヲ得喪スルヤハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第　條　法律ニ掲ゲタル場合ニ於テ其手續ニ從フニ非ザレバ何人ヲモ拘留スルヲ得ズ。

第　條　住居主ノ意ニ反シテ住居ニ侵入スルコトヲ得ズ。家宅捜索及信書、書類ノ差押ハ法律

ニ定メタル場合ニ於テ其手續ニ從テノミ之ヲ行フヲ得。

第　條　信書ノ祕密ハ侵スベカラズ、刑事裁判上ノ審問倒產及民事裁判並戰時ニ於テ必要ナル例外ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第　條　刑罰ハ法律ニ依テノミ之ヲ宣告處斷スルコトヲ得。

第　條　所有權ハ法律ニ定メタルノ外制限ヲ受クルコトナシ。

何人ニ對シテモ其所有物ノ全部又ハ一部ヲ法律ニ依ラズシテ强テ賣却讓與セシムルコトヲ得ズ。

第　條　移住、國境內ニ於ケル轉居營業ノ自由ハ法律ニ定メタルノ外制限ヲ受クルコトナシ。

第　條　信向及本心ノ自由ハ侵スベカラズ。私權公權ノ享有ハ信敎ニ關係セズ、公私ノ義務ハ信敎ニ依テ妨ゲラルルコトナシ。

禮拜ノ自由ハ風義及公然ノ秩序ヲ害セザル限リハ之ヲ保護ス。

第　條　言、文、圖畫ヲ以テ思想ヲ吐露スルノ自由、集會結社ノ自由ハ法律ニ定メタルノ外制限ヲ受クルコトナシ。

第　條　請願權ハ凡テノ國民ニ屬ス。

第條　凡テ日本人ハ兵役ニ就クノ義務ヲ有ス、此義務ノ範圍及種類ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム。

第三　各個ノ問ニ關シテ更ニ左ノ意見ヲ陳ベント欲ス。

一　第一問ノ範圍ハ廣漠ニ失スルニ似タリ。

二　第五條（卽第二問）ハ均ク之ヲ可トセズ。何トナレバ余ノ見ル所ニ依レバ此ノ如ク列擧スルハ甚ダ敎科書ノ性質ヲ帶レバナリ。

三　法律上保護ノ平等ハ憲法ニ揭グルヲ要セズ、刑罰ノ平素ノ如キハ誤解シ易キ文字ナリ。

四　官職公務ニ從事スルヲ得ルコトハ憲法ニ揭グルヲ要セズ。何トナレバ其要件ハ別段ノ法律及命令ヲ以テ定ムベキモノナレバナリ。

五　貴問五條ノ末段ニ揭ゲタル一般ノ成文ハ予ノ建議シタル方法ニ依レバ不用ニ屬スベシ。

六　納稅義務ノ事ハ財政ニ關スル規定ノ部ニ置クヲ可トス。

七　證人タルノ義務ハ憲法ニ揭グルノ必要ヲ有スルモノニ非ズ。宜ク之ヲ訴訟法及治罪法ニ揭グベシ。

八　余ノ意見ニ從ヒ命令權ヲ規定スルトキハ、軍人懲戒ニ關スル規定（貴問第八）ハ不用ニ屬ス。又餘力提出シタル根本權ノ規定ニ依レバ軍事ノ關係ヨリ生ズル制限ヲ特ニ揭グルノ必要ナシ。

四月十六日

ア・モスセ拜

○第三章　內閣及參事院

第十一條

天皇ハ內閣ニ臨御シ萬機ヲ聽覽ス

（答）

予ハ憲法中ニ皇帝ノ內閣ニ親臨シ、其會議ヲ指揮スルノ條ヲ揭ゲ得ルヲ信ズルナリ。此ノ如キ規定ハ君主政權ヲ總攬シ、總テ緊要ナル事項ヲ親裁スルノ君主主義ニ適スルモノナリ。抑モ君主其職ヲ行フニ當リ、其王位ニ接近スル顧問官ニ意見ヲ問フハ固ヨリ當然ノ事ニシテ、君主獨リ裁決ノ權ヲ有スルモノナリ。故ニ如何ナル邦國ニ於テモ最上議政官（樞密院參事

院）ヲ設ケ、君主之ニ親臨シ、樞密顧問ノ演述ヲ聽クノ方法ヲ設ケザルコトナカリキ。然レドモ君主ハ其至當ト認ムルトキ、又ハ會議ニ親臨シ能ハザルトキ、若ハ之ニ親臨スルヲ歡セザルトキハ其大宰相（スターツスカンツレル）ニ樞密院ニ於テ議長ノ職ヲ執ラシムルコトヲ得ベク、又或ル事件ニ付テハ君主唯大宰相若ハ其他各大臣ノ演述ノミヲ聽クヲ以テ足レリトスルコトアルベシ。

此規定タル憲法ノ新主義ニ矛盾セザルナリ。何トナレバ、卽チ君主ハ引續キ國務ヲ親裁セザルベカラズ。而シテ親裁ハ內閣會議ノ體制ニ於テ施行スルヲ最モ便宜トスレバナリ。抑々君主中ニハ間々國務ノ繁劇ヲ厭ヒ、唯大臣ト書面上ノ交通ヲ爲シ、而シテ時々若ハ或ル事件ノ生ジタル場合ニ於テノミ親ク大臣殊ニ總理大臣ノ演述ヲ聽クコトアリ。此事國ノ良計ニアラズ。何トナレバ一方ニハ爲ニ國務ヲ底滯シ、又一方ニハ君主國務ノ顚末ト其詳細ノ事情ヲ忘却シ、爲ニ事實ノ理由ト反對理由トノ當否ヲ判定スルニ苦ムニ至レバナリ。

近來ノ憲法ニ於テ君主ノ最高會議ニ親臨スルヲ定ムルノ例尠シトセズ。例ヘバ

一千八百九年瑞典憲法第四條ヨリ第十一條ニテ、

國君ハ內閣（スターツラート）ニ於テ總テノ政務ヲ演述セシム。但其裁決權ハ獨リ國王ニ屬ス。

一千八百十四年「ノルウェゲン」憲法第二十條ヨリ第三十二條マデ

前ト同一ノ規定アリ。

一千八百十四年荷蘭憲法第三十二條

君主ハ豫メ內閣（スターツラート）ト協議ヲ遂ゲタル後、總テ主權ヲ施行ス。君主ハ獨リ決議ヲ爲シ、而シテ其決議ハ內閣ニ通知ス。

一千八百十五年荷蘭憲法第七十一條第七十三條

國王ハ內閣ニ於テ首座ヲ占ム、國王ハ其意見ニ從ヒ一般若クハ特別ノ利害ニ關スル事項ヲ內閣ニ提出シ其意見ヲ聽ク又總テ國會（ゲネラルスタテ）ニ提出スベキ事項ニ付テハ獨リ裁決權ヲ有ス。

一千八百八年西班牙憲法第五十二條

國王ヲ首座トシテ其下ニ內閣（スターツラート）ヲ置ク、千八百十二年憲法第二百三十六條

一千八百二十二年葡萄牙憲法第百五十四條第百五十九條及千八百二十六年憲法第百七條及第百十條

一千八百四年佛國憲法第三十七條

皇帝ハ元老院及參事院（スターツラート）ニ於テ首座ヲ占メ、又ハ首座ヲ占ムベキ官吏ヲ指定ス、千八百五十二年ノ憲法第四十九條千八百五十二年ノ元老院決議第二條

英國ニ於テモ亦國王ハ法律上樞密院（プライウイコンシル）ニ於テ首座ヲ占ムルモノナリ。然レドモ此樞密院ハ其議員ノ數甚ダ多ク且稀レニ招集セラル、但一定ノ事件殊ニ命令ノ發布最高官吏ノ任官等ニ付テハ之ヲ招集スルヲ例トス。而シテ通常之ニ出席スル者ハ唯大臣ニ止マル、其他ノ國務ハ獨リ內閣ノ大臣會議ニ於テ之ヲ議ス。此內閣ハ法律ニ依リ成立スルモノニアラズシテ、大臣ノ協議ニ成リタルモノナリ。其決議ハ首相若クハ其他ノ大臣ヨリ之ヲ國王ニ奏上ス。顧フニ此ノ會議ニ於テ國王ヲ避クルノ理由ハ全ク英國ノ議院政治ニ起因スルモノナリ。普國ニ於テハ君主ノ親政深ク其根柢ヲ有セリ。國王ハ縱令內閣ニ親臨シ首座ヲ占メザルモ、時々大臣ヲ招集スルヲ例トス。千八百十年十月二十七日ノ命令ニ於テハ大宰相（スターツスガンツレル）其獨立シテ國王ニ奏上スベキ事件ト大臣會議ニ於テ各大臣ヨリ演述スベキ事件トヲ定ムルノ規定アリ。然レドモ普國ニ於テハ現時大宰相ナキヲ以テ、大臣會議ニ關スル詳則ハ國王ノ親裁スル所ニ依ラザルベカラズ。

顧フニ君主ノ親裁ニ關スル憲法上ノ規定ハ左ノ意義ヲ有スベシ。

一　此規定ハ眞誠ナル君主政府ノ儼存スルコト及實際君主ノ常ニ國務ニ關係スルコトヲ保證スルモノナリ。

二　此規定ハ法律上君主ヲ難レ獨立スル所ノ大臣ノ權力ヲ成立セシメザルベシ。

三　故ニ此規定ハ議院政治若クハ人民主權ノ主義ニ反對スベシ。

又此ノ如キ規定ヲ設クルモ君主其意見ニ從ヒ或ル事件ニ付專首相ト共ニ之ヲ完結スル爲ノ支障トナラザルベシ。何トナレバ首相ハ一定ノ場合ニ於テ大宰相ノ權利ヲ有シ、又ハ皇帝ノ親近ナル顧問官トシテ其ノ信用ヲ受ルコト多キニ居レバナリ。

一千八百八十七年四月二十四日

ハ・ロエスレル　拜具

（問）

英國ノ憲法學者ノ說ニ從ヘバ、內閣ノ會議ハ首相ノ指揮スル所ニシテ其成議ヲ國王ニ上奏シ、裁可ヲ仰グ者トシ、國王ハ內閣ノ會議ニ親臨セズ。若シ國王內閣ニ親臨スルコトアレバ、內閣ノ會議ハ爲ニ其不羈ヲ失フベキヲ以テ、之ヲ憲法ノ精神ニ背ク者トセリ（但シ或ル論者ハ國王ノ內閣ニ親臨セザルハ「デヨージ」一世ノ英語ニ通ゼザリシヨリ起因スト云）

普國フリドリヒ、ウヰルヘルム王ノ千八百八年十一月十四日ノ勅令ニハ、國王自ラ太政官ニ親臨シ、議長トナリ議事ヲ勅裁セラルベキコトヲ定メタリ。又千八百十年十月二十七日ノ勅令ハ首相ノ權任ヲ定メタルニ拘ラズ、又太政官親臨裁決ノ事ヲ載セタリ。千八百十七年三月二十

日ノ勅令モ亦必要ナルトキハ國王自ラ太政官議長ノ席ヲ占ムベキコトヲ定メタリ。而シテ普國ノ所謂内閣ハ卽チ國王ノ内閣ニシテ、政黨ノ内閣ニ非ザルコトハ彼ノ有名ナル「ビスマルク」侯ノ議院ノ演説ニ於テ明言シタル所ノ如キナリ。

其他ノ各國ニテ匈牙利ノ憲法ハ十七條大臣ノ會議ニハ國王不在ノ時ニ限リ首相其議長タルベキコトヲ定メタリ。瑞典及丁抹ノ憲法ハ委シク國王ノ内閣大臣ヲ集メ政事ヲ親裁セラルヽノ約束（コンヂション）ヲ掲ゲタリ。

我ガ國ノ太政官及内閣ノ組織職制ノ勅令ニハ、太政官又ハ内閣ハ天皇親臨シテ萬機ヲ總裁セラルヽ所ナリトノ文ヲ掲ゲテ、以テ我ガ政體ノ一大要件トナシタリ。

今ハ我國ノ天皇ハ當然ニ親政ノ事實アルニ拘ラズ、憲法ニ此ノ一條ヲ明記スベキヤ否ヤハ一ノ問題ナルベシ。右ニ付貴下ノ意見ヲ十分自由ニ示サレンコトヲ望ム。

明治二十年四月二十一日

ロエスレル　貴下
モスセ　貴下

井上

（答）

君主ガ内閣會議ニ臨席スルノ權利ヲ憲法ニ掲載スルノ當否ニ付キ下問ヲ辱クセリ。予ハ此問ニ對シ如何ナル條件アルトモ否ト謂ハザルヲ得ズ。請フ之ヲ左ニ論ゼン。

第一　此問題タルヤ他ノ問題卽チ閣省（ミニステリイン）ノ組織ハ、憲法若ハ法律ヲ以テ規定スベキヤ否ノ問題ニ連繫スルモノナリ。

小官ハ此問題ニ對シテモ亦否ト答ヘザルヲ得ズ。今先ヅ此點ニ付テ論ゼン。

抑立憲國ニ於ケル大臣ノ國權上ノ地位ハ、一ニハ其責任、二ニハ大臣ノ政務ニ參與スル憲法上ノ必要ニ基クモノナリ。此主義タル遂ニ各省分立ノ制ヲ生ジ、以テ百般ノ政務ヲ各省ニ分配シ、各省ニ責任大臣ヲ置クニ至レリ。而シテ一方ニ於テハ此各省ニ分離スル所ノ政機ヲ統一スル爲ニ一ノ機關ヲ設ケザルベカラズ。是レ内閣若クハ内閣會議ノ起ル所以ナリ。此内閣ハ合議制ノ官廳ニアラザルノミナラズ、立憲國ニ於テハ決シテ合議制ノ官廳トナリ能ハザルモノナリ。若シ一大臣ニシテ一方ニハ内閣ノ多數決ニ從ハザルベカラズ、又他ノ一方ニ於テハ其責任ヲ内閣ノ決議ニ委ヌルコト能ザルトキハ、則チ既ニ責任ノ主義ニ背クモノト謂フベシ。又此ノ如キ合議制ノ内閣ハ君主ノ地位ニ對シテ適當ナラズ。蓋君主ハ固ヨリ内閣ノ決議ニ拘束セラルヽモノニアラズシテ、其多數ニ從フモ其少數ニ從フモ、固ヨリ其擇ブ所ニアルノミナラズ、内閣全員ノ一致ニ出タル決議ヲモ却下シ、或ハ此決議ニ對シ更ニ特別ノ命令ヲ發シ得ル者ナリ。

若シ是ガ爲ニ困難ヲ生ズルコトアルモ、君主ハ大臣ヲ任免スルノ權アリ、又大臣ハ隨意ニ職ヲ辭シ以テ自己ノ意見ニ適セザル政務ニ對スル責任ヲ避クルヲ得ルヲ以テ、其困難ハ容易ニ之ヲ除去スルヲ得ベシ。

夫レ內閣ニシテ唯此ノ如キ協議的內閣ノ性質ヲ有スルニ止マルトキハ、法律若クハ憲法ヲ以テ其組織ヲ定ムルハ固ヨリ其當ヲ得ズ。又法律ヲ以テ多數ノ權利ヲ認ムルヲ要セズ。何トナレバ其獨裁君主ノ顧問タル內閣ノ性質ニモ適セズ、合議制ト相反スル各大臣ノ各自責任主義ニモ合ハザレバナリ。

例ヘバ若シ內閣ニ最高行政裁判ノ事務ヲ委任スルコトアリトセバ、固ヨリ前段ノ意義ト異ナラザルヲ得ズ。然レドモ日本ニ於テハ既ニ特別ナル獨立裁判所ヲ設立スルノ計畫アレバ、今此點ニ就テ觀察スル必要ナカルベシ。

以上陳述スルノ理由アルニ依リ、普國ニ於テハ內閣ニ法律上一定ノ職務ヲ有スル總理大臣ヲ置カズ、彼宰相（スターツカンツレル）ノ設置及首席大臣ノ設置及其權利ハ決シテ法律的官廳組織ノ一部トセズ。必ズ國王ノ勅令ヲ以テ定メタリ。縱令首席大臣ノ地位ハ政事上ニ於テ如何ニ高尙ナルニモセヨ、又其實際上ノ勢力ハ如何ニ强大ナルニモセヨ、法律ヲ以テ其地位ヲ定ムルハ其當ヲ得ズ。何トナレバ此事タル恰モ多數決ノ主義ト均ク、大臣ノ國王ニ對スル位地及其各自責任ト矛盾スル

（合議制ニ非ズシテ叶議的ナリ）

レバナリ。

是ニ由リ之ヲ觀レバ法律ヲ以テ各省ノ一部ナル內閣ノ組織ヲ定ムルノ理由ナシ。尙極言スレバ法律上爲シ得ベカラザルモノナリ。而シテ他ノ一方卽チ各省ノ分任ニ付テハ、法律ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ベシ。然レドモ大臣ノ員數及事務ノ分配ハ、法律若ハ憲法ヲ以テ定メザルヲ宜シトス。縱令外務陸軍及司法省ノ事務ノ如キハ稍確定シタルモノナルニモセヨ、大藏省殊ニ內務省ノ如キハ時トシテハ一省トナリ、時トシテ數省（警察、工務、商務、農務、文部、敎部等）ニ分離スルモノナレバ、需用ノ變換ト其當時ノ經濟的思想トニ依リ、屢其事務ヲ變更スルコトアルベシ。殊ニ日本ニ於テハ將來（少クモ兩三年中ニ）屢々變更セザルベカラザルノ需用ヲ生ズベキヲ以テ、法律ヲ以テ各省ノ事務ヲ定メザルヲ可トス。

加之尙他ニ立憲國ノ本性ニ基ク所ノ一原因アリ。立憲國ニ於テハ獨學術（テセニシヨ）上ノ思想ヲ以テ政務ヲ分配スベカラズ。抑モ立憲國ハ數多ノ經世家アリテ協力セザルベカラズ。又此經世家ハ議院ト協同シテ活動セザルベカラザルモノナレバ、政務ヲ分配スルニ於テ尤此點ニ注目セザルベカラズ。此事タル各省組織ノ流動ナクンバ爲シ能ハザル所ナリ。卽チ重要ナル改正ヲ爲スノ必要ニ因リ、或人物ニ依任シテ大功ヲ奏セシメンニハ諸省ヲ分合離併セザルベカラザルコトアルベシ。又縱令英國ノ所謂議院政治ヲ日本ニ移スコトナキニモセヨ、凡ソ立憲國ニ於テハ君主獨裁

ノ國ニ於ケルヨリモ、大臣ノ更迭ハ頻繁ナルモノナレバ、代リテ政權ヲ執ル所ノ經世家ハ其意見ニ從テ政務ヲ各省ニ分配スルノ案ヲ立テ、國王ノ制可ヲ受ケ勅令ヲ以テ之ヲ定ムルコトアルハ亦避クベカラザルノ結果ナリ。

以上概論スル所ノ理由アリテ、遂ニ閣省ノ組織ヲ勅令ニ任ズルコトトハナレリ。凡ソ官廳ノ組織ハ裁判所ノ組織ヲ除クノ外、原則上總テ君主ノ命令權ニ任ジタルモノニシテ（蓋將來日本ニ於テ憲法ヲ立ルニ至ルモ此原則ヲ變更セザルベシ）未ダ憲法ヲ以テ閣省即チ內閣及各省ノ組織ニ關ル皇帝ノ特權ヲ制限スルノ理由アルヲ見ザルナリ。

英國ニ於テモ各省政務ノ分配權ハ原則上國王ノ裁決ニ屬セリ。憲法ノ模範國ナル白耳義ニ於テスラ、法律ヲ以テ合議制、總理大臣ノ地位及各省ノ事務ヲ定ムルヲ避ケ、各省事務ノ分配ハ國王ノ勅令（アレテ）ヲ以テスルヲ立憲國ノ慣例ト爲シテ之ヲ爭ハザリキ。而シテ該國ニ於テ大臣ノ員數及各省ノ組織ノ屢々變更アリタルハ誣フベカラザルノ事實ナリ。

又佛國ニ於テモ國王ノ命令（ヲルドナンス、ロヤル）皇帝ノ命令（デクレテ、インペリアル）ヲ以テ屢々各省ノ組織ヲ變更シ、嘗テ法律ヲ以テセシコトナカリキ。又普國ニ於テモ憲法四十五條ニ據ルニ、閣省ノ組織ハ勅令ニ一任シタルコト疑フベカラザルナリ。此各省分合ノ自由ナル方法ハ墺國ニ於テモ亦行ハル。

日本ニ於テハ唯歐羅巴大國ノ例ヲ以テ模範トスルヲ得ベシ。瓦敦堡（千八百十九年九月二十五日ノ憲法第五十四條乃至第六十一條及千八百七十六年七月一日ノ憲法）遬遜（千八百三十一年九月四日ノ憲法第三十四條）ニ於テ法律若ハ憲法ヲ以テ閣省ノ組織ヲ定ムルコトアルモ、日本ノ如キ大國ノ模範トスルニ足ラザルベシ。

華諾威爾及巴威爾ニ於テハ閣省ノ組織ハ從前國王ノ命令ニ出デタリ今日ニ於テモ亦然リ。

第二　以上論ズル如ク憲法若ハ法律ヲ以テ內閣及各省ノ組織ヲ定ムルヲ善シトセザルトキハ、君主ノ內閣會議ニ親憲スルノ權利モ亦憲法若ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムルノ理由ナキハ勿論ナリ。

予ノ思考ニ依レバ、如何ナル事情アリト雖、皇帝ニ此權利ヲ奪フノ理由アルヲ見ズ。「スタイン」氏ノ君主ノ內閣會議ニ親臨スルトセザルトハ固ヨリ其隨意ナリト論ジタルハ實ニ其當ヲ得タルモノナリ。加之「スタイン」ハ此事ヲ以テ自然ニシテ爭フベカラザルノ事ト見做シ、其理由ヲスラ揭ゲザリキ。若シ此ニ反對スルノ說アルモ、唯國王ハ統御スルモ政務ヲ執ラズト云フ原則ニ基クニ過ギザルモノニシテ、此原則ハ君主國ノ主義ニ背馳スルモノナリ。抑モ君主ハ法律上總テ國家政務ノ中心ナリ。且君主ハ國家ノ形體ヲ代表スルモノナリ。縱令立憲國ノ國法ニ於テ君主ハ大臣ノ參與ニ制限セラルヽコトアルモ、大臣ハ憲法及法律ノ範圍內ニ於テ君主ノ意思（ウィル）及其意向（インテンシオン）ニ依リ政務ヲ執ラザルベカラザルハ勿論ナリ。若シ大臣ニシテ之ガ爲ニ其執ル所

ノ責任ヲ負擔シ能ハズト思惟スルトキハ自ラ其職ヲ辭セザルベカラズ。

予ノ意見ニ依レバ、大臣ハ君主ノ隷僕ナリトノ原則ヲ立ルヲ得ズ。然レドモ若シ大臣ヲ以テ議院ノ意思ヲ執行スル者、又ハ其屬スル所ノ政黨ノ意思ヲ執行スル者ト云フガ如キハ其謬見亦更ニ甚シト云フベシ。蓋大臣ハ國家ノ臣僕ナリ。而シテ君主ニシテ國權ノ所有主タル限リハ、大臣ハ又君主ノ臣僕ナリト謂ハザルベカラズ。若シ大臣ニシテ國家ノ安寧ト認ムル所ノ意見、君主ノ意思ニ背反シ、其所見ヲ述ブルモ以テ君主ノ意思ヲ動スニ至ラザルトキハ、法律上必ズ君主ノ意思ヲ施行シ、其承認セザル處分ニ對シ責任ヲ負擔スルノ義務ナシ。蓋大臣ノ重要ナル職務ノ一ハ王冠ノ所有主ニ其意見ヲ呈スルニ在リ。君主若シ此意見ヲ大臣會議ニ於テ聽カント欲スルトキハ焉ンゾ此權利ノ使用ヲ拒ムヲ得ンヤ。大臣ハ是ガ爲ニ其獨立ヲ失フト云フガ如キハ謂レナキノ說ナリ。抑モ大臣ニシテ憲法及法律ニ適シ、且國家ノ安寧ニ適スル所ノ意見ヲ君主ニ呈スルノ責アルヲ知ラバ、焉ゾ君主ガ親ク會議ニ臨席スルノ故ヲ以テ其責ヲ盡サヾルノ理アランヤ。

皇帝ハ各大臣ヲシテ意見ヲ述ベシムルノ權利アルハ決シテ疑ヲ容レザル所ナリ。焉ンゾ諸大臣ノ意見ヲ會同席ニ於テ聽聞シ、以テ一事ノ處分ニ對スル贊成說及反對說ノ活潑ナル議論ヲ知ルノ權利ヲ妨グルヲ得ンヤ。

今此ニ復言センニ、內閣ニ於テ裁判事務ヲ行ハントスル場合ノ如キハ固ヨリ同一ノ論ニアラザルヲ除ク外、君主主義ニ於テ皇帝ヲ內閣會議ヨリ屏斥スルノ理由アルヲ見ズ。蓋君主ノ議長ノ職ヲ執ルノ權アルハ勿論ナリ。

今又別ニ一問ヲ起シ君主ハ此權利ヲ使用スルヲ可トスルヤ否ト云ンニ、君主ハ今日ノ常務ニ干涉セザルヲ便宜トス。然レドモ一般ノ政治ニ關スル事務ニ至テハ形式上ニ止マラザル眞實ノ君主國ニ付テハ、君主之ヲ親裁スルヲ當然トス。彼ノ小普魯士ノ一歷史上ニ於テ驚クベキ功績ヲ擧タルハ全ク「ホーヘンツオルレン」ノ親ク國務ヲ執リタルノ致ス所ナリ。此歷代ノ君主ハ「フリドリヒ」大王ノ名言ニ從ヒ、心ニ國家ノ臣僕ナリト銘シ、而シテ此職務卽チ國家ノ事務ノ爲ニ敎育セラレ而シテ此歷代ノ君主ハ國憲制定ノ後ニ至リテモ仍此地位ヲ保持シタリ。思フニ將來ノ日本憲法ニ於テモ普魯士ト同一ノ發達ヲ爲スノ妨害トナルベキモノヲ除去セザルベカラザルベシ。而シテ其妨害トハ何ゾヤ。曰ク君主ノ國政ノ親裁ヲ制限シ、及障害シ得ベキ規定ヲ憲法ニ揭グルコト是レナリ。

貴下ノ報道ニ依レバ日本ノ現行法ニ於テ皇帝ノ內閣ニ親臨シ、國務ヲ親裁スルノ權アルハ疑フベカラザルノ事實ナリ。又曾テ屢卑見ヲ呈シタル如ク予ハ成ルベク從來ノ法律ヲ保持スルヲ得策ト信ズレバ、君主ノ國務ヲ親裁スルノ權ヲ憲法ニ規定スルノ理由ヲ見ズ。蓋憲法ハ唯現行

法ノ變更ヲ規定スベキモノナレバナリ。

但シ憲法ノ制定ニ依リ、皇帝ノ政務ハ責任大臣ノ對署アルヲ以テ始メテ効力ヲ有スルモノナレバ、爲ニ皇帝ノ位地ハ從前ニ比シテ稍ヤ變更ヲ見ルモノナルガ故ニ、此ノ一條及普國憲法第六十條ニ類スル一條ハ憲法ニ掲グルヲ可トスベシ。然レドモ各省ノ組織ハ皇帝ノ勅令ニ任セ、而シテ皇帝ノ內閣會議ニ親臨スルハ從前ノ如ク皇帝ノ意見ニ任ズルヲ以テ尤適當トス。是予ノ意見ナリ。

東京

千八百八十七年四月二十二日

モスセ

第十二條

內閣ハ各省大臣（及參事院議長）ヲ以テ組織ス。

（問）

各國ノ憲法ニハ概ネ內閣大臣ノ爲ニハ其對署ト責任ノ件ヲ掲グルニ止マリ、而シテ其組織及君主ニ對スル憲利義務ハ之ヲ正條ニ掲グルコトナシ。

但シ瑞典、丁抹、及匈牙利ノ憲法ニハ詳細ニ內閣ノ君主ニ對スル權務ヲ掲ゲタリ。

近來ノ憲法學者ノ說ニ從ヘバ、內閣モ亦一ノ憲法的獨立ノ機關トシテ、君主ヲ輔佐スル者ニシテ、決シテ君主ノ使令ニノミ供奉スル者ニ非ザルナリ。

果シテ此ノ說ヲ以テ採ルベシトセバ、憲法ニ行政各部ノ組織及分任ヲ擧ルノ必要ナキニ拘ラズ。其內閣ノ組織及權任ハ（例ヘバ總理大臣ヲ置クコト、內閣ハ各部大臣ヲ以テ組織スルコト等）憲法ノ正條ニ於テ其大綱ヲ示スコト尤適當ナルニ似タリ。貴下ノ意見ニ於テ此疑問ノ決定ヲ與ヘラレンコトヲ乞フ。

明治二十年四月十五日

ロエスレル君　貴下

井上

（答）

獨逸各邦ノ憲法ニ於テモ內閣ニ關ル規定ヲ掲グルモノナキニ非ズ。一千八百三十一年ノ撒索第四十一條、一千八百十九年ノ瓦敦堡憲法第五十四條ヨリ第六十一條ニ至ルマデ、一千八百四十八年ノ「リユクセンブルヒ」憲法第七十八條、以下一千八百五十二年ノ「クールベツセン」憲法第八十一條ヨリ第八十五條マデノ如キ是レナリ。

內閣ヲ以テ特別ノ合議官廳トナサヾル國ニ於テハ、少クモ參議院（スターツラート）ノ組織ニ關スル規定アリ。一千八百四十年ノ花諾威爾憲法第百六十九條、一千八百五十二年ノ佛國憲法第四十七條ヨリ第五十三條マデノ如キ是レナリ。又或ハ大臣ノ任免ノ如キ或ル權利義務及一般ニ其職務ニ關ル規定ノミヲ設クルアリ。一千八百四十八年ノ巴威爾大臣責任法ノ如キ是レナリ。

是ニ由テ之ヲ觀レバ內閣ノ組織及權限ニ關ル一般ノ原則ヲ憲法ニ揭グルハ異例ノ事ニ非ズ。普國ノ如キ內閣ヲ以テ合議廳トナスノ國ニ於テハ、其組織及權利義務ヲ定ムルニ多クハ勅令ヲ以テシ、而シテ憲法又ハ單行法律ヲ以テスルハ只其一小部分ニ止マルノミ。余ガ普國ノ制ヲ正當ナリトスルハ專ラ左ノ理由ニ基クモノナリ。

主義上ヨリ論ズレバ憲法發布ノ後ト雖、行政全體ノ組織ハ皇帝ノ權內ニ存スベシ。而シテ內閣ノ組織ハ其一部ナルガ故ニ、此區域ニ於ケル天皇ノ組織權ヲ制限センニハ必ズヤ一定ノ理由ナカルベカラズ。

余ハ如此理由アルコトナシト信ズ。憲法ニ於テハ一般ニ大臣ニ付テ規定シ、各個ノ場合ニ於テ內閣ニ付テ規定スルヲ以テ足レリトス。如何ニ內閣ヲ組織スベキヤ、及一般ニ各大臣ト內閣トノ間ニ事務ヲ分任セシムベキヤニ至リテハ、時宜ニ隨ヒ皇帝ノ意見及內政ノ進路ニ任ズルヲ得ベシ。日本ニ於テハ現時ハ勿論將來モ亦世運變遷ノ期ニ際セルガ故ニ、此時ニ當リ此事件ヲ確定スルコトハ極メテ難シ。以前ノ太政官ハ今ノ內閣トハ略其趣キヲ異ニス。將來國家行政ノ改新ノ時代ヲ經過シタル後ハ、大臣交互ノ關係ヲ疎少ニスルノ必要ヲ感ズルコトナシト謂フベカラズ。卽チ普國ニ於テモ太宰相ノ時期ハ比例上短期ニシテ、之ニ次デ起ル所ノ內閣ハ其間數回ノ變迁ヲ經タリ。故ニ余ハ此ノ關係ニ於テ政府ハ憲法ヲ以テ自ラ束縛セズ、自由ナル活動ヲ有スルヲ可トス。又汎然ニ內閣ノ事ヲ揭グ一定ノ規定ヲ設ケザルトキニハ、價値ナキ徒法ニ屬スベキナリ。凡最上官廳タルノ意義ニ於ケル內閣ヲ設クベキヤノ一問題ト雖、其時ノ經過ニ從ヒ其答區々ナルニ至ルベシ。故ニ憲法ハ以テ後來ニ對スル必要ヲ今日ニ豫定スベカラズ。又總理大臣ノ地位及權限並ニ各省大臣ノミヲ以テ內閣ヲ組織スベキヤ、或ハ他ノ人員ヲ交ユベキヤノ如キ一般ノ規定ニ在リテモ、亦難事タリト謂フベシ。如此難事ハ時々勅令或ハ大臣ノ協議ヲ以テ之ヲ防グベシト雖、憲法ヲ以テ之ヲ制定シ、或ハ之ヲ制定スルニ於テモ一層其困難ヲ大ナラシムベシ。蓋裁判所ハ國權ヲ施行スル爲ニ設ケタル憲法上ノ機關タリト雖、憲法ヲ以テ之ヲ組織スルヲ必要トセズ。仍通常法律ヲ以テスルヲ例トス。故ニ行政部內ノ事件ハ其組織ヲ勅令ニ讓ルモ不可ナル所ナシ。

明治二十年四月十八日

第十三條

內閣總理大臣及各省大臣ハ其職務ニ就キ各其責ニ任ズ。

(問)

普國ニ於テハ大臣ハ王室ニ對シテノミ責任ヲ有シ、而シテ其王室ハ不可侵ノ地位ニ居ル。是レ政府ハ終ニ人民ニ對シテ責ヲ負フノ場合ナキ歟。

(答)

貴諭ノ如ク普國ノ大臣ハ王室ニ對シテ、責任ヲ負荷スルノ制ニシテ王室之ヲ進退スルノ權アルノミナラズ、政事上ノ所爲ニ關シテ當否ヲ監察スルモ亦王室ノ權ニ屬ス。然ルニ普國ノ憲法中ニ議院ハ大臣ノ憲法ニ觸レ、及犯罪アルモノヲ高等法院ニ訴フルヲ得トアリ。而シテ其條中ニ大臣ヲ彈告スルノ場合、及之ヲ審斜スルノ手續ハ別段ノ法律ヲ以テ之ヲ定ムベシト云ヒ、而シテ爾後今ニ至ル迄遂ニ其法律ヲ發セズ蓋シ議院ト王室ト此議ニ關シテ叶議スルコト能ハザルニ由ルナリ。故ニ此彈告ノ事ハ憲法ノ條則ニ於テ許ス所タリト雖モ、實際ニ行ハルヽコト能ハ

ズ、高等法院ニ於テ未ダ發セザル所ノ別段ノ法律ナル者ヲ得ルニ非レバ、之ヲ受理審判スルコト能ハズ。又假令此法律アリトスルモ特ニ大政ニ關スル事ノ如キハ該法院ノ受理スル所タルコトヲ得ズ。何トナレバ其當ニ受理スベキト否トヲ判ズルハ仍王室ニ在レバナリ。此場合ニ於テ唯一個ノ手段タルハ之ヲ王室ニ効奏スル事、卽建議ヲ爲スニ在リ。而シテ此建議ナルモノハ固ヨリ裁判ニ非ズシテ一ノ奏請タルニ止マルモノナレバ、其請ヲ聽クト聽カザルトハ專王室ノ自由ニ在リ。普國並其他日耳曼諸邦ニ於テハ往々議院ノ請ニ反シ、王室ノ斷スル所ニ從ヒ其大臣ヲ黜斥セザルコトアリ。而シテ其王室ノ斷ズル所ニ從テ大臣ヲ黜ケザルヲ得ルハ、日耳曼ノ制未ダ全ク議院政府ノ實ヲ成サヾルニ依ルナリ。

(問)

宰相ノ責任ハ君主ノ不可侵ト相對シテ憲法上ノ一大主義ナリトハ各國ノ憲法並ニ憲法學者ノ均シク一致スル所ナルガ如シ。蓋此一條ヲ欠クトキハ憲法ハ制裁力ヲ有セザル一ノ意義ナキ空文タルニ過ギザレバナリ。

然ルニ憲法上ニ於テ判然ナル說明ヲ欠キ、曖昧ノ意義ニ經過スルハ亦此一條ヨリ甚シキハアラズ。

第一　和蘭ノ宰相ハ「我レハ君主ニ對シテ責任アルモ人民ニ對シテ責任ヲ擔ハズ」ト公言シタルコトアリ。抑々君主ニ對シテ宰相ノ責任アルハ固有當然ノ事ニシテ、之ヲ憲法ニ揭グルヲ要セザルベシ。若シ宰相ノ責任ヲ憲法ノ正條ニ揭ゲタルトキハ此レヲ法律及人民（卽國會）ニ對スルノ責任ト解釋スルハ亦疑ヲ容レザルベシ。然ルニ猶他ノ明文ヲ欠クト云テ以テ口實トシテ斯ノ如キ解釋ヲ下スコトヲ得ベキ歟。

第二　或國ハ宰相責任ニ係ル糾治及刑條ハ之ヲ別法ニ定ムベシト云ヘル一條ノ豫約アリテ、其別ヲ定ムル豫約ヲ履行セザルガ爲ニ、責任ノ主義ハ遂ニ實際ニ行ハレズシテ、空シク一ノ論理（テオリー）タルノ有樣ニ經過セリ。或ル政事論者ハ此事ヲ以テ一ノ憲法ノ欠典トシタレドモ、又或ル老練ナル碩學ハ、却テ此レヲ以テ尤モ智巧ナル憲法ノ制定トナシタリ。抑々此ノ如キ兩樣ニ解釋スベキ憲法ハ或ル一種ノ國ノ全體健全ナルコトヲ證明スベキ一個ノ產物トシテ看ルベキヤ、又ハ他ノ邦國ニモ移シ得ベキ所ノ政略ナルヤ。

第三　宰相責任トハ彼ノ英國ニテ實行セラルヽガ如ク、政事上ノ責任トヲ併セタルノ名義ナルヤ。又ハ或ル憲法學者ノ說ノ如ク、單ニ最高官ノ懲戒法ト看做シ、政事裁判ノ結果ハ之ヲ免罷ニ止ムルノ意義ナルヤ。若シ刑法上ノ責任ヲモ包括ストナラバ、普通ノ刑法ノ外ニ宰相ノ受クベキ刑名ハ憲法ニ指定セザル以上ハ之ヲ政事裁判所ノ專斷處分（アルビスレイルバユンシオン）ニ委ヌベキカ

右ノ問題ニ就キ貴下ノ明敎ヲ乞フ。

明治十九年十二月

ロエスレル君

井上毅

（答）

一　國君ニ對シ大臣ガ責任ヲ有スルコトハ固ヨリ當然トス。殊ニ國君ハ大臣ヲ任免スト云ノ條ヲ憲法ニ揭ゲタルトキハ、此條アルガ爲ニ大臣ニ其職務上ノ行爲ニ就キ責任ヲ負ハシムルヲ以テ、國君ノ特權トスベキコト明白ナリ。拿破翁時代ノ佛國憲法ニ明文ヲ揭ゲテ曰ク「大臣ハ專ラ皇帝ニ從屬ス」。

二　之ニ反シテ國卽チ國會ニ對シ大臣ガ責任スルコトハ左ノ理由ニ依リ固有當然ノ事ト爲スヲ得ズ。

（甲）大臣ハ國會ニ對シ責任ヲ有スルモノトセバ、國君ハ其政務ニ關シ責任ヲ有セズト云ヘルノ原則ヲ間接ニ破滅シ、國君ノ身體ハ犯スベカラズト云ヘル原則ノミヲ存スルニ至ル。何トナレバ國君ハ大臣ニ依テ政務ヲ執ルモノナレバナリ。一層精嚴ニ之ヲ論ズレバ、大臣ハ官吏ノ責任ニ關スル通常ノ原則ニ據テモ亦責任ヲ負擔スベカラズ。何トナレバ大臣ハ專ラ國君

ノ命令ヲ執行スレバナリ。故ニ大臣ニ責任アルモノトセバ、國君ハ直接其身ヲ以テセザルモ、大臣ヲ以テ自己ノ政務ニ關スル責任ヲ負擔スルモノトスルナリ。

(乙)又大臣ハ國會ニ對シ責任ヲ有スルモノトセバ、大臣ヲ任免スル國君ノ主權ヲ侵スモノト云フベシ。何トナレバ大臣彈劾ハ國君ノ赦免權ヲモ制限スレバナリ。故ニ大臣ノ責任ハ其免職ヲ强ヒントシ、其際國君ノ意ニ非ザル場合ニ於テモ、仍裁判ノ判決ヲ以テ大臣ノ免職ヲ强ヒントシ、其際國君ノ赦免權ヲモ制限スレバナリ。故ニ大臣ノ責任ハ其免職ニ關スル國君ノ特權ヲ制限シ、卽チ主權ヲ減削スルノ効果ヲ生ズルモノナリ。

如斯國君ノ主權及一般ノ權利上ノ原則ヲ制限スルハ自然法ニ基クモノニアラザルガ故ニ之ヲ實行セントスルニハ必ズ明文ヲ以テ之ヲ法章ニ掲グベキナリ。

此ニ論ズル所ノ責任ハ通常ノ刑法上ノ責任トヲ混同シ、普通ノ犯罪ニ關シテモ亦議院ハ大臣ヲ彈劾スルヲ得、普國憲法ニ於テハ賄賂及大逆謀反ニ關シテノミ上ノ二國ト同樣ナリ。然シナガラ大臣ノ犯罪ハ多クハ政事上ノ理由ニ原キ、政事上ノ責任中ニ包括スルヲ以テ、之ヲ混同スルモ亦一理ナキニアラズ。

三　大臣ノ責任ハ憲法中ニ其大體ノミヲ揭グ、其詳細ノ施行ハ別法ニ讓ルヲ例トス。而テ其別法ハ之ヲ發シタル國アリ。發セザル國アリ、又ハ之ヲ發シタルモ實際ニ之ヲ行ハザル國アリ。例ヘバ巴威里及墺國ノ如キ是レナリ。英國ニ於テハ近來宰相彈劾ヲ實用セズ。所謂議院政事ノ主義ニ從ヒ、議院政黨ノ更迭ト俱ニ大臣ヲ更迭スルノミ。是乃チ右ノ言ヲ爲スモ亦大過アルコトナシ。曰「議院政事ノ行ハルヽ國ニ於テハ、大臣ノ彈劾ハ固ヨリ不用ニ屬シ議院政事ノ行ハレザル國ニ於テハ大臣ノ彈劾ハ君主政治ノ原則ヲ破ルト」又大臣ノ彈劾ハ黨派ノ愛憎ヲ長シ、且議院政事ノ方向ニ傾向セシムルガ故ニ甚ダ危險ナルモノナリ。又政事上ノ犯罪ヲ以テ殊ニ裁判所ノ處斷ニ委ヌルヲ得ザラシム。蓋シ大臣彈劾ノ法方アルトキハ、議院ハ其投票ニ依テ大臣ノ執行ヲ批准スルノ便ヲ得ルノ利益アレドモ、政事上反對ノ思想ヲ有スルガ爲ニ彈劾ノ權ヲ過度ニマデ使用スルニ至ル。シカノミナラズ、且司法ハ行政ノ牽制ヲ受クベカラズト云フノ原則ヲ破ルモノナリ

大官ノ責任ニ關スル憲法及法律ノ規定ハ、自由主義ト君主政主義トノ互相推讓ニ由テ生ズルモノニシテ、外部ノ現相ニ於テ議院政事ノ方向ニ傾キタルモノト謂テ可ナリ。之ヲ要スルニ憲法ニ論理的ノ條章ヲ設ケテ、自由主義ニ滿足ヲ與ヘント欲スルモ、議院政事ノ未ダ發達セザル國ニ於テハ、大臣ノ彈劾ハ實際ニ於テ更ニ其効力ヲ顯ハサヾルコト明カナリ

以上ノ所論ニ拘ハラズ「皇帝ノ大臣ハ責任ヲ有ス」ト云ヘル一條ヲ憲法ニ揭グルハ不可ナルコトナシ。若シ斯ノ制定ナキニ於テハ、國王ノ執政ニハ大臣ノ副署ヲ要スト云フノ條